

氏名	事蹟
赤塚鳳船齋林抱（六代） あかつかほうせんさいりんぼう	文化十年生まれ。通称平左衛門。鳳船齋林抱と号し、自得子・溪崖とも号した。父鳳船齋芝常に蒔絵を習い、印籠・刀掛・重箱などを製作した。父が文久年間より輸出品を製し、第二回勸業博覧会にも出品した。江戸芝浜松町一丁目十九番地に住。明治三十二年没。印籠が現存し、「自得子」「溪崖銘」が多い。
赤塚鳳船齋芝常（五代） あかつかほうせんさいしばつね	江戸後期の道具蒔絵師であり、印籠蒔絵師。江戸赤坂に住。通称平左衛門、鳳船齋・芝常庵と号して婚礼調度・印籠などを製作していた。明治十五年没。比較的多くの在銘の印籠が現存する。
赤塚平左衛門（四代） あかつかへいざえもん	通称平左衛門。安政四年没。
赤塚平左衛門（三代） あかつかへいざえもん	通称平左衛門。天保八年没。
赤塚平左衛門（二代） あかつかへいざえもん	通称平左衛門。文化十一年没。
赤塚平左衛門（初代） あかつかへいざえもん	通称平左衛門。山田常嘉齋門と推測される。安永四年没。
赤澤八之助（四代） あかざわはちのすけ	△赤塚平左衛門は江戸中期に興った江戸の印籠蒔絵師で、近代の名工赤塚自得まで代々平左衛門を称した。
赤澤八之助（三代） あかざわはちのすけ	赤澤八之助（三代）の子で、享保十一年生まれ。寛延二年に相続。翌年御目見御扇子献上。
赤澤八之助（二代） あかざわはちのすけ	赤澤八之助（二代）の子で、元文二年に相続。江戸深川佐賀町に住。寛延二年病身により隠居。
赤澤八之助（初代） あかざわはちのすけ	赤澤八之助（初代）の子で、宝永五年に相続。江戸深川佐賀町に住。元文四年に没。
青山貫洪 あおやまかんこう	天正十六年正月、三河で徳川家康に御祝御定器を献上して以来御用を勤め、慶長四年伏見向島御殿に移住の際に御目見御扇子献上。寛文四年江戸に召出され御目見御扇子献上。正徳年間に類焼し、記録を焼失したため詳細は不明。
江戸末期に京都で活躍した印籠蒔絵師。姓が青山、通称が勘四郎、屋号が堺屋、諱は寛治、号が貫洪。文化三年、江戸に生まれ皆川町の蒔絵師某に学ぶ。二十四、五歳の時に蒔絵師玉斎と共に京都へ移住し、中村宗哲（八代）の蒔絵下職となる。さらに浅野友七（初代）に蒔絵を学び、武者小路新町西入町に住す。安政年間、御所炎上により島津家より進献の屏風筆筥へ青山貫洪、浅野友七、木下徳兵衛、永田習水、藤井満喬、山本武光らで合作に蒔絵した。文久年間、某氏の注文により、印籠を制作したが、当時号を持たなかったため、注文主により貫洪の号を授けられたという。また盃の糸底に唐人百人を描いて技倆を誇ったこともあつたという。明治十三年に没。孝明天皇遺品の山本光利作「虎蒔絵印籠（宮内庁三の丸尚蔵館）」と同図であり、孝明天皇の御用を勤めたと推測される。また一橋徳川家には「鉄刀木地萩雁蒔絵小囊」が伝来した。現存作品は至って少ない。赤澤家は本國山城で江戸時代を通じて明治維新まで、代々幕府の御賄頭支配の御腕師。代々の仕来りとして年始御目見の節に御扇子献上。	

氏名	赤塚自得（七代） あかつかじとく	赤塚鳳玉 あかつかほうぎよく	赤塚光山 あかつかこうざん	明信 あきのぶ	明秀 あきひで	秋山光塙 あきやまこうとう	浅田萬次郎 あさだまんじろう	浅田常吉 あさだつねきち	浅野治兵衛 あさのじへい	浅野惣三郎 あさのそうざぶろう	浅野太三次 あさのたさじ
事蹟	現代の巨匠。明治四年生まれ、通称、平左衛門。蒔絵を父林抱に日本画の狩野久信・寺崎広業に学び、白馬会研究所で洋画を研究。内外の博覧会・漆工競技会・農展・帝展で活躍した。昭和十一年没。独自の皇室御用品を制作した。晩年は乾漆・変塗を試みていた。明治三十三年に「秋野人物蒔絵印籠」を美術展に出品。また「鳳船自得」を朱漆の印形銘とした。「元禄風俗蒔絵印籠」が現存。銘は「花押も使う。草書まで様々あり、印も丸・方形・八角」。	明治の蒔絵師。明治三十三年のパリ万国博覧会出品。	明治の蒔絵師。長谷川光祇の門人。	江戸後期の印籠蒔絵師。「孔雀蒔絵印籠」が現存。銘は「明信（印）」	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	明治の東京の蒔絵師。明治三年、両国柳橋で生まれる。通称は金五郎。十二、三歳で船橋の門には入り、絵画は琳派の山本光一に学ぶ。東京向島住。一八九〇年代の美術展覧会に出品。明治三年没。煙管筒が多いが、印籠の作品も確認している。銘は「光塙」の二字銘。	江戸後期の茶器塗師。江戸住。天保十四年没。	江戸後期の茶器・道具塗師。天保元年に生まれ、十二歳で浅田萬次郎に入門。安政六年に開業、柳沢家の用品を製作。精工社の雇工となる。江戸小川町住。後に馬喰町四丁目二十一番地に住	名古屋の漆工。明治六年開業。名古屋針町に住。漆七宝塗を特色とし、第一回・第二回内国勸業博覧会・明治一一年パリ万国博覧会に出品。後東京に移住し、本所区緑町三丁目七番地に住んだ。	明治の蒔絵師。安政三年加賀に生まれ、金沢で鶴来又右衛門・高田河月に蒔絵を学ぶ。通称惣三郎、号が可秀。明治二年、石川県金沢工業高校描金科の助教となる。明治三年のパリ万国博覧会に出品。昭和七年没。	明治の金沢の蒔絵師。代々蒔絵師の家系で、父藤右衛門に蒔絵を学ぶ。明治一年パリ万国博覧会に出品。金沢区下今町住。また自ら金粉を製造した。

氏名									
	飯塚桃葉 いづかとうよう	飯尾蒨齋 いのおちようさい	安藤墨湖 あんどうぼっこ	新井東玉齋 あらいとぎよくさい	浅野墨谷 あさのぼっこく	浅野友三郎（三代） あさのともさぶろう	浅野友七（二代） あさのともしち	浅野友七 あさのともしち	
事蹟	江戸後期の江戸の印籠蒨絵師。通称源六、偉が秀久、名が桃葉。で、号が観松斎。須賀重喜に十五人扶持で召抱えられる。重喜の下年。徳島藩主蜂須賀重喜に十五人扶持で召抱えられる。重喜の下駄に蒔絵をするように命じられ、その概に感じて蒔絵は印籠にすべきもの。話をして憤然として寛政二年に没。文房具・調度品まで製作した。天明七年に剃髪し、寛政二年に推測される。茶人として石州流古田宗雪に師生。まれに六十六歳歿と推測される。紙箱・硯箱（宮内庁三の丸尚蔵館）の作者として古来有名。幕命により、多くの印籠を製作した。せら野れた前藩主重喜の無聊を慰め、ため、多くの印籠を製作した。多。ある。作名は「須賀家が親しかつたため、典信の下絵によるものも。銘がある。め、稀に「松斎（花押）もしくは「桃葉斎（花押）」が三字	明治の蒨絵師。明治四年禁裏檜皮茸師吉之丞の三男に生まれ、通称鐘三郎。幼に「煙管」現存。東京市浅草区向柳原町二丁目二番地に住。明治三十六年没。東京市浅草区向柳原町二丁目二番地に	岐阜の産で代々酒造業を営む。墨湖の父が加納鉄哉と親しかった。と、色漆を交える。一八九〇年代の美術展覧会に出品。煙管筒が多。く現存する。	幕末・明治の蒨絵師。本名新井鐘吉。弘化二年生まれ。伊藤東川斎の門に入り、文久三年開業し印籠等の蒨絵をしていたが、印籠の不流行により、櫛・簪等を製した。	浅野墨谷は通称善蔵。東京市京橋区因幡町に住。明治三、四十年代に活躍しており、安藤墨湖系の彫工と考えられる。また、船橋舟眠との合作の作品もある。	浅野友七（二代）の子で、父に蒨絵を習う。京都上京区第三十組橋町に住。昭和元年没。父に蒨絵を習う。京都上京区第三十組	浅野友七（初代）の子で、父に蒨絵を習い、「橋屋」を屋号とする。京都押小路幸町西住。「塗師蒨絵／＼橋屋七」の墨書きに「橋友七」の黒文長方印を捺す。大正元年没。四男は杉林家の養子となった古香である。	江戸後期の道具蒨絵師。享和二年生まれ。幼少より長野横笛（二代）に師事し、文政年間、開業。長野横笛の屋号「橋屋」を称した。安政年間、御所炎上により島津家より進献の屏風筆筒（青山貫洪・浅野友七・木下徳兵衛・永田習水・藤井満喬・山本武光らで合作）に蒨絵した。また島津家より御所に献上の「御紋章蒨絵太刀拵」を制作。在銘は「未見で、共箱には「塗師蒨絵／＼橋屋七」の墨書きに「橋友七」の黒文長方印を捺すの常とする。三井家など豪家の注文品には、黒印のみで署名を捺すの常とする。三井	

池島常春（初代） いけじまぎょうしゅん	名が常俊、号が常春、別号は印斎。江戸の人で牙蓋師として有名。
井川左茂理 いがわさもり	越中富山の鞘塗師。天保頃に紫漆を發明したと伝えられる。▽池島家は茶入の牙蓋師として興った家で、「蓋挽」とも名乗っている。だが、江戸中期からは徳川將軍家の御根付挽物師のものになっている。今日では一般に「立左根付」とは象牙中空透彫りのものを指す。が、昭和初期までは売立目録でも木製中空の挽物による饅頭形根付を指しており、戦後に語義が変化している。元来は池島立理とその末裔が木製中空の饅頭形根付を挽いていたことに由来し在銘の作品が数点現存する。
五十嵐随甫 いがらしずいほ	五十嵐派正統最後の蒔絵師。嘉永五年、加賀藩、五十嵐長左右衛門の子に生まれ、通称他次郎、号が隋甫。金沢木倉町。明治三十六年没。高蒔絵の文房具・盃などが現存する。
一斎久孝 ひっさいひさたか	江戸後期の印籠蒔絵師。將軍家の印籠蒔絵師であったと考えられる。松平慶永が天保九年に田安徳川家から越前松平家に養子に入る際、大御所家斉から御手ずから腰に提げて賜った。「松鶴鹿蒔絵印籠」（福井市立郷土資料館蔵）にこの銘がある。
飯塚桃枝 いづかとうし	諱が秀貞、名と号が桃枝、別号が秦々斎。二代の初期の名の桃枝とは別人で、推測では二代桃葉の外孫であり、二代桃葉の養子となり、徳島藩士のために製作したと思われる木地蒔絵の印籠や煙草入れ・根付で、銘は「桃枝（花押）」銘である。また藩主のために奉ったと思われる塗蒔絵下地の印籠には格別に優秀な技術が見られる。生没年不詳だが文化八年生まれと考えられる。
飯塚茂秀 いづかしげひで	二代桃葉の養子で、通称久米十郎、偉が茂秀。文政二年養子となり、三代桃葉と共に藩の御用を勤めたが翌年歿した。
飯塚桃葉（四代） いづかとうよう	天保九年生まれ。偉は秀秋、桃葉と号した。病身のため明治七年、家名を弟秀明に譲った。蒔絵師としての活動はほとんどなかったと思われる。
飯塚桃葉（三代） いづかとうよう	推測では二代桃葉の外孫であると思われる。初名が桃秀、後に桃葉と改名、観松斎を号した。幕末に江戸から徳島富田浦に移住し、元治元年に歿した。作名は初め「桃秀（花押）」、相続後「観松斎（花押）」もしくは「桃葉（花押）」で「一草庵」銘が二点現存する。生年不明だが推測では文化三年と思われる。
飯塚桃葉（二代） いづかとうよう	初代桃葉の実子で初名を桃枝ついで桃子と号し、偉が秀栄。寛政二年に相続して、二十人扶持を給される。翌年藩公より観松斎知足さらに桃葉と改名を命じられる。享和元年蜂須賀重喜七女、寿美姫の婚礼調度を製作した。徳島藩画工の鈴木芙蓉や渡辺広輝の下絵を用いた作品がある。晩年縫雪を号した。銘は初め「桃枝（花押）」「桃葉（花押）」「桃子（花押）」「桃葉（花押）」「桃子（花押）」もしくは「桃葉（花押）」「桃子（花押）」「桃枝（花押）」「桃葉（花押）」「桃子（花押）」などとなる。使用した花押は九種類に及び、また藩主以外の注文に、桃水・桃川などとも銘したと推測できる。生没年未詳だが明和三年生まれの弘化元年没と推測できる。
氏名	事蹟

池田泉哉 いけだせんさい	初め平山姓で通称、松之助。池田泰真の門に入り、明治二十八年にその養子となる。明治三十三年パリ万国博覧会出品。明治三十七年、泰真の孫娘りゆうと結婚し、婿となつて池田姓を冒す。農展に出品。池田泰真の画・風・作風をよく守り、文房具や盆類・櫛が現存する。銘は「泉哉」銘で「古満」の印を使用した。是真一門の後援者であつた藤岡惣次郎家には多数の泰真作品が伝来し、後に池田泉哉が極書をした。また泉哉も同家に多くの作品を納めた。
池田清助（初代） いけだきよすけ	清助（初代）の子。政府から十萬円、紀伊徳川家から十五萬円を無償で借款し、池田合名会社として海外貿易隆盛の一翼を担つた。蒔絵工場は主任が春井恒眠で四十人ほどの工人がいたとされる。明治四十四年に解散。大正七年没。
池田清助（初代） いけだきよすけ	明治の貿易商。天保十年紀伊郡墨田村に生まれ。十五歳まで百姓をしていたが、天保錢八枚を資本に油を売買し、小間物・刃物・木綿・呉服・家具と五年の間に徐々に商いを大きくし、明治十七年に美術骨董商を設立した。古製品のほか、工人を抱えて蒔絵・七宝・金工・彫刻・指物の新製品を製作。蒔絵ではアメリ力に輸出したため、漆器が乾燥のため破損することが多く、評価を落とした。いたため、明治十八年に薄い銅板で胎を製作することを発明し。京都新門前梅本町が本店で大阪東京にも支店を置く。意匠・発案は池田清助から出たものとされる。明治三十二年没。
池島義矩 いけじまよしのり	飯塚桃葉（初代）が蒔絵した「紅葉蒔絵根付」に金泥でこの銘があり、池島立圓（五代）同人と考えられる。
池島丈助（七代） いけじまじょうすけ	徳川將軍の御根付挽物師。文政から天保まで武鑑に見られる。本所徳右衛門町に住。
池島立佐（六代） いけじまりゆうさ	徳川將軍の御根付挽物師。享和から文化まで「御根付挽物師／池島立佐」の名が見られる。四郎右衛門は立佐と同人と考えられる。芝田町四丁目に住。在銘の根付が二点現存する。
池島立圓（五代） いけじまりゆうえん	徳川將軍の御根付挽物師。宝暦十年から寛政武鑑まで「御根付挽物師／池島立圓」の名が見られる。本八丁堀三丁目の住居は拝領地で、御目付を許されている。
池島立全（四代） いけじまりゆぜん	通称、孫左衛門、号が立全。宝永五年から宝暦十年武鑑まで「御挽物師／池島立全」の名が見られる。
池島立佐（三代） いけじまりゆうさ	慶安二年生まれ。徳川將軍家の御挽物師を勤めた。江戸靈巖嶋長崎町に住。元禄頃に活躍し、武鑑によれば「御挽物師／蓋挽立る」。享保頃に八十歳代で存命。仙台藩主伊達綱村の茶会記にしばしば登場する。
池島立古（二代） いけしまりゆうこ	牙蓋師として有名。
氏名 事蹟	

氏名	石井勇吉（初代） いしいゆうきち	石井馨堂 いしいけいどう	石井有得齋（二代） いしいうとくさい	石井有得齋（初代） いしいうとくさい	石井一徳齋 いしいいつとくさい	石井一得齋 いしいいつとくさい	池田慶真 いけだけいしん	池田泰真 いけだたいしん
事蹟	幕末越中高岡の漆工。文化七年生まれ。通称勇助。指物師から塗師に転業。鏑上高盛絵や存星・箔絵・密陀絵・沈金などで唐絵を表し、「勇助塗」と呼ばれた。第一回内国勸業博覧会、高岡鉄砲町に住。明治十九年没。	近代讃岐彫の大家。明治十年生まれ。昭和十九年没。木彫彩漆・彫漆を得意とした。音丸耕堂ら門人を多数輩出。昭和十九年没。	天保六年生まれ。石井有得齋（初代）の子。通称次郎兵衛。江戸用品や西六間堀町三十二番地住。文久二年に相續し、徳川将軍家の降蓑田長次郎・精工社の製品を製した。多くの印籠が現存する。	江戸末期の印籠蒔絵師。神奈川の産で、生年未詳。通称次郎吉、有得齋、玉溪と号した。江戸へ出て、古満派の蒔絵を学ぶ。恐らく大村玉山の門人であろう。日本橋桶町に住。晩年郷里の神奈川に帰り、文久二年に没した。江戸に門人が多く、中妙行寺に分骨され墓石が現存する。多くの二代は子の次郎兵衛が継ぎ、やはり有得齋玉山を号した。多くの印籠が現存する。	近代の蒔絵師。通称栄吉。川之邊一朝の門には入ってその名を知られる。東京浅草区柳原町三丁目十番地に住。明治二年没。蓮華寺に葬られる。	幕末・明治の蒔絵師。通称源兵衛。天保十一年生まれ。日本橋桶町に住していた。石井有得齋（初代）に蒔絵を学び、印籠・煙管筒を製していた。が、維新前より輸出品を製造するようになった。浅草福井町一丁目二十六番地に住。	天保十年生まれ。はじめ紫村慶次郎。十一歳で池田泰真入門。後に養子となり、池田姓となる。古満印を使用した。赤坂区伝馬町二の十に住。是真風をよく守った。明治四十一年没。	幕末・明治の江戸の印籠師。文政八年、江戸赤坂に西尾藩士池田新五郎の五子として生まれ、幼名七五郎、後に久三郎を称す。十一歳で柴田是真の門に入り、初号が泉哉、後に泰真と号す。安政六張塗の開発に尽力した。初号が泉哉、後に泰真と号す。青銅塗・砂年、浅草榊町に独立し、囊物商の「丸利」に宮川、一坂倉「等」の注文で印籠類を製作した。明治六年のウィーソン万国博覧会をはじめ内外の展覧会に出た。門下に池田慶真・池田泉哉・柴田真哉・都築幸哉・矢田雪真・高井泰令・福島泰哉・田辺照成・市川泰山ら輩出した。その一派は、明治十四年以來の住居、両国薬研堀から「薬研三十六年」に歿し、福福寺に堅実な画題が多い。男子なく、守り、生真面目な性格そのまに堅実な画題が多い。男子なく、門人の慶真・真哉・泉哉などを養子とした。真哉は娘のすみと結婚してりゅう女を継いだ。銘は初号の「泉哉」銘と、「泰山真」銘とがあり、一古満「印」を使用した。

石橋平壽斎（二代） いしばしへいじゅさい	石橋平壽斎（初代） いしばしへいじゅさい	石橋嘉良斎 いしばしかりようさい	石塚庄次 いしづかしようじ	石塚觀羊斎 いしづかかんようさい	石田美明 いしだよしあき	石川光明 いしかわみつあき	石川嘯月斎 いしかわしゅうげつさい	石岡庄寿郎 いしおかしょうじゅろう	石井勇介 いしいゆうすけ	石井勇吉（二代） いしいゆうすけ	氏名
幕末・明治の蒔絵師。天保六年、石橋平壽斎（初代）の子に生まれる。号が平壽斎で名が久家。嘉永六年に相続。幕府作事方の用品を製作。フィラデルフィア万国博覧会をはじめ内外の博覧会に出品。東京神田下白壁町六番地に住。	江戸末期の江戸の蒔絵師。通称安太郎、号が平壽斎で名が久家。徳川将軍の御蒔絵師栗本豊次郎・同伊予の仕手頭を勤めた。神田九軒町住。	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。印籠の名作が多く、「常嘉斎印籠」下絵とよく合致するため山田常嘉斎の門人と考えられる。銘は「嘉良斎」の蒔絵銘に朱漆により壺形印を添えた銘を入れるが、わずか一点の印籠に「石橋嘉良斎」銘があり、姓が判明する。壺印は二種類ある。	幕末の鞘塗師。江戸四谷塩町住。加藤忍斎の師。	幕末明治の古満派の印籠蒔絵師。通称菊之助。江戸住。石井有得斎（初代）の門人。石井有得斎の下絵帳を引き継ぎ現存している。	奈良の塗蒔絵師。通称健治郎、号が美明、東雲堂を屋号とした。明治二十五年、春日大社の大工喜太郎に奈良根来を学び翌年開業した。	明治の彫刻界の巨匠。嘉永五年生まれ。十一歳で根岸の菊川正光に入門して木彫を学び、画は狩野素川に学ぶ。二十五歳で開業して煙管筒を製していたが、画は狩野素川・花瓶の流行により牙彫を始めた。明治二十三年に帝室技芸員、翌年東京美術大学教授。大正二年没。牙彫の第一人者だが、木彫の煙管筒・文房具も製作した。	江戸後期の道具蒔絵師。通称勝蔵、諱が正明、嘯月斎と号した。「夕顔蒔絵櫛（東京国立博物館蔵）」が現存する。	秋田能代塗の漆工。宝永年間に初代が開業。当代（十代）まで続く。	石井勇介（初代）の次男。嘉永四年生まれ。通称与三吉。明治十年別家し、越中射水郡下関村に住。勇介を号とした。大正十四年没。	石井勇吉（初代）の長男。天保一四年生まれ。堀川敬周に画を学ぶ。若年より父を助け注文作に追われる。明治二十六年シカゴ万国博覧会で優等賞。明治三十年没。酒仙と伝えられる。ある時加賀前田家に大作を納め百金を得たことがあったが、帰途に酒屋・料亭で蕩尽し、道中俱利伽羅峠で追剥ぎに奪われたことにしたという。	事蹟

伊 船 齋 いせんさい	江 戸 後 期 の 江 戸 の 蒔 絵 師 。盃が現存し、御小屋系の蒔絵師と推測される。
石 和 田 永 俊 いしわだえいしゅん	近 代 東 京 の 櫛 蒔 絵 師 。在銘の櫛が多く現存。作品から昭和と推測される。
石 山 基 董 いしやまもとただ	寛 文 十 二 年、從三位壬生基起卿の次男に生まれ、權中納言從二位に叙せられた殿上人。土佐派の画に巧みで、京後藤の分派に師事し刀装具も作り、また蒔絵をして印籠も制作した。刀装具も印籠も素人離れした巧手である。享保十九年没とされる。「松嶋蒔絵印籠」など数点が現存する。
石 村 金 太 郎 いしむらきんたろう	幕 末・明治の芝山象嵌師。天保十四年生まれ。代々石村近江として有名な三味線工の末。明治五年より芝山師になった。明治八年家名を相続。輸出用の象牙張小筆笥などを制作した。
石 原 抱 真 いしはらほうしん	明 治 の 蒔 絵 師 。通称真之助。植松抱民の門下で抱真と号した。京橋の漆器商「黒江屋漆器店」の仕事を多く手がける。大正九年、日本井抱中とともに明治神宮御神宝を製作。一般の作品は、文房具や盃が現存。銘は「抱真」の二字銘。
石 橋 平 秀 齋 （二 代） いしはらへいしゅうさい	幕 末・明治の印籠蒔絵師。弘化四年、石橋平秀齋（初代）の長男に生まれ、明治五、六年に東海道を遊歴、同年より神田美土代町を学び、明治五、六年に東海道を遊歴、同年より神田美土代町の自宅に開業。のち神田区三河町四丁目七番地に住。日本漆工会の創設に尽力した。大正七年に没し、東大久保法善寺葬られる。根朱筆を用いた細画の研究蒔絵を得意とした。ギャレットコレクシオンに青漆による「杜若蒔絵印籠」が現存。
石 橋 平 秀 齋 （初 代） いしはらへいしゅうさい	江 戸 後 期 の 印 籠 蒔 絵 師 。通称源次郎、号が平秀齋。
石 塚 桃 壽 いしづかとうじゅ	江 戸 後 期 の 印 籠 蒔 絵 師 。飯塚桃葉（初代）の門人で江戸住。号が桃壽、別号東方齋。通称は不明で蒔絵師仲間からは「道益さん」の緯名で呼ばれる。それはその挙動・風采が芝居の「千代秋」に登場する医者「道益」に似ていたためという。一つの逸話が伝えられる。松江藩主松平不昧は浄瑠璃の宮本齋宮太夫が不昧愛用の蒔絵の湯呑みをねだったことがある。不昧はそれを断ったが、代わり蒔絵師の湯呑みを作らせて与えることを約した。ところが、その蒔絵師は言下に「桃壽」の名を挙げたという。幸阿弥長周、山田常嘉齋との合作による「三夕蒔絵硯箱」もあり、異例の名工ぶり、が伺える。賀家の飯塚桃葉に続いて蜂須賀家の蒔絵御用も多くの勤め、蜂須賀家の道具類が伝来した。大正十一年は蜂須賀家の伝来の「松鶴蒔絵鞍轡」や「雪松蒔絵手元筆笥（ポーラ美術館）」が現存する。また多くの「緻密な高蒔絵は桃葉を凌ぐものも多い。作風は飯塚桃葉に近く、綴密な高蒔絵は桃葉を凌ぐものも多い。
氏 名	事 蹟

氏名	磯矢完山 いそやかんざん	一我斎 いちがさい	市川泰山 いちかわたいざん	市兵衛 いちべえ	一葉 いちよう	一柳斎東卯 いちりゅうさいとう	一光斎光義 いっこうさいみつよし	一色一哉 いっしきいっさい	一萬斎 いっとうさい	伊都 いと	伊藤東川斎 いとうとうせんさい	伊藤隆光 いとうりゅうこう	稲垣霞松斎 いながきかしろうさい	伊東貞文 いとうさだふみ	嘉永六年、代々漆工を業とする伊東八郎兵衛の長男として江戸川区小石川に生まれる。文久元年、菱田自得に入門。さらに北島政蔵・小林寶船・三浦乾也に師事。閑翁堂・観妙斎・乾谷と号す。明治二十年石川監獄署漆工場授業師、同二十三年東京美術学校就職、同二十八島監獄署で銀牌を受ける。大正二年日本漆工会漆工に就く。ス万国博覧会。京都美術協会の審査部長。大正六年競技会にて御前制作。京都美術協会の審査部長。大正六年に没し、京都慈照院に葬られる。「乾谷」・「観妙斎」銘の笠翁細工の作品が現存する。
事蹟	近代の蒔絵作家。明治八年、磯矢宗庸の子に生まれ本名邦之助。小川松民、ついで川ノ邊一朝に蒔絵を学び東京美術大学を卒業。関口台町、小石川区上富坂町十七番に住。帝展出品。明治天皇御大葬の葬具を謹製した。昭和十二年没。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	近代の蒔絵師。池田泰真の門人。通称幸次郎、泰山と号した。北品川新宿一九五に住。	「装剣奇賞」に所載の貝入錆印籠師。大阪追手筋住。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	「梅鶯蓮蛙蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館）」一点のみが現存。作風から江戸の印籠蒔絵師と推測される。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	近代の蒔絵師。通称は福松。鈴木華斎に入門して蒔絵を習い、中井敬所に書を学ぶ。さらに岩崎交玉・田邊源助（五代）・白山松哉らに師事して一哉を号とした。仲徒町一ノ十六、浅草区下平右衛門町二十六番地などに住。日本漆工会評議員。明治四十四年に没し、西教寺に葬られる。櫛や女性用のコンパクトの類が現存する。	幕末の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。印籠や盃が少数現存する。銘は「伊都作」とする。	幕末の印籠蒔絵師。新井東玉斎の師。	近代東京の蒔絵師。本名春三。東京下谷区中根岸六十八に住。豊川楊溪（三代）に蒔絵を学んだ。帝展出品。	文政十一年生まれ。通称は伊兵衛、十二歳で笛木松風斎由甫に入門して十年修業し、鞘の蒔絵を専門とした。霞松斎を号し、別号が静巒・似雲。維新後は笠翁風の額・聯などを制作。第一回内国勸業博覧会に出品して褒状を受ける。東京都麻布区網代町七番地、のちに一番地に住。在銘の香箱等が現存する。明治二十五年没。		

氏名	稲川	稲川千流	稲川松壽齋	乾出雲	井上呉山	井上白齋	伊平次	今泉成之	今村孝永	岩井柳木	岩崎交玉
事蹟	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。梶川系統の蒔絵師と推測される。	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。未詳。作風から梶川・常川などの関連も考えられる。銘の多くは「仲宥」の壺印が朱漆で入る。在銘の印籠・根付が多く現存。梶川作「五節句蒔絵揃印籠（印籠美術館）」の根付にもこの銘がある。	幕末・明治の印籠蒔絵師。大阪の人。未詳。在銘の印籠が数点現存。銘は「浪花／松壽齋（花押）」とする。	乾家は代々越前福井藩主松平家の御抱蒔絵師である。初代は延宝三年没。出雲はその七代目で元禄六年生まれ。名が博政、国名が出雲。福井米町に住した。硯箱や道具類を作ったとされるが、作品は少ない。安永三年没。印籠が一点現存する。	近代東京の蒔絵師。農展で活躍した。文房具・食膳類が現存。	文化・文政期の江戸の印籠蒔絵師。通称は和三郎、号が白齋。江戸茅町二丁目裏通住。谷文晁下絵の印籠が現存する。また印籠以外では棒原家伝来「南天蒔絵菓子器」や「菊桐蒔絵炉縁」・「松竹梅蒔絵棗」がある。銘は「井上白齋漆」とするものが多い。	江戸中期の印籠蒔絵師。小川破立の門人として「古画備考」に名がある。	大正・昭和の東京の印籠蒔絵師。東京漆芸蒔絵組合の理事長。戦後茨城石岡に移住したと伝えられる。印籠や棗の作品が見られる。作銘には花押や「今泉」の方形印が添えられているものがある。	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。作品から明治・大正と推測される。	江戸末期の印籠蒔絵師。	幕末・明治の印籠蒔絵師。文政十年生まれ。已之助・已之吉・已之平・已之治と称し、交互で号した。十三歳で原羊遊の門に入り、五年までその工房で下職をつとめた。直接の師は昇龍齋光玉で、交玉の号は光玉から授けられたと考えられる。その後、光玉とともに関立田邊源助家に寄寓、日光東照宮修復御用にも参加。漆器製作の棟梁となる。晩年、新川の豪商鹿島清兵衛に召し抱えられ河鍋曉斎の下絵で作品を作った。明治三十年代、鹿島清兵衛の別荘で没す。在銘は少なく、銘は「交玉」か「交玉齋」銘。輸出品に羊遊齋と同じ花押を朱漆で据えたものがある。

氏名	岩瀬京水 いわせきょうすい	上田喜三郎 うえだきさぶろう	上田光玉 うえだこうぎよく	植松抱民 うえまつほうみん	植松包美 うえまつかねよし	植松真美 うえまつしんび	魚野自醒 うおのじせい	鵜澤松月 うざわしょうげつ	有得斎鳳玉 うとくさいほうぎよく	鵜野満継 うのみつづく
事蹟	江戸末期の蒔絵師。文化十三年、山東京伝の実弟岩瀬京山の子に生まれる。梅作または梅朔と称し、蒔絵を業として京水を号し三た。慶応三年に没し、本所回向院に葬られる。銘は「京水造」三字が多い。印籠や煙管筒が現存。	幕末の江戸の鞍蒔絵師。植松抱民の師。	明治の蒔絵師。弘化二年生まれ。通称、榮吉。父から蒔絵を学び、明治八年に開業。鈴木古巖の嘱品を制作したが、同十年から起立工商会社から直接注文を受けて輸出品を製作した。東京北本所番場町十七番地に住。	明治の蒔絵師。弘化二年江戸四谷荒木町に生まれ。通称弥吉、上田喜三郎に師事し、さらに梶山明細から十年間蒔絵を習い、二十五歳で開業。明治十一年から精工社内に住んで輸出漆器を製作した。内国勸業博覧会や漆工競技会で活躍した。代表作に田中光顕伯爵旧蔵「卯花雁蒔絵文台・藤燕蒔絵硯箱」(広島県立美術館蔵)がある。作品は文房具類で、銘は「抱民」の縦長楕円形の印形銘が多い。	近代東京の名工。明治五年、植松抱民の長男に生まれ、通称を弥太郎。号は初め抱美のちに包美。蒔絵を父抱民に、図案を岸光景に学ぶ。光琳・羊遊斎などに私淑した。漆工競技会、内国勸業博覧会、帝国美術院展覧会など活躍し、赤塚自得とともに昭和初期の漆工会で双璧をなした。京橋区出雲町十三番地に住。昭和八年没。文房具・茶道具が多く現存する。初期は「抱美」銘、のち「包美」銘。「不老斎」銘。また晩年「不老斎主人」と箱書する。数点の印籠が現存し、「不老斎」銘がある。	植松抱民の子で包美の実弟。明治二十一年生まれ。通称弥吉。兄包美に師事し、抱民・真美・也奇知・古松苑と号した。帝国美術院展覧会で特選を受ける。京橋区出雲町十三番地のちに杉並区高円寺七一九一九に住。	近代の蒔絵師。明治十六年石川県石川郡野々市村に生まれ本名治朔。京都に上がつて山本光利に師事。また東京で赤塚自得に師事して、自醒と号した。帝展・文展に入選。戦時中に帰郷した。	近代の印籠蒔絵師。明治十年生まれ。白山松哉の高弟でその作風を最もよく伝えた。緻密な研出蒔絵、高蒔絵を得意とし、印籠の煙管筒・茶道具の名品を残した。パウアイコレクションに多くの作品が収蔵される。	江戸末期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が数点現存。石井有得斎の縁者と考えられる。	享保頃の印籠蒔絵師。彦根藩主井伊家の御抱とされる。「曳船蒔絵印籠」ただ一点が現存し、「彦根士鵜野満継(満継)」銘がある。

氏名	梅澤隆真 うめざわりゅうしん	大正・昭和に活躍した蒔絵師。柴田是真の三男で、明治七年には母方の姓梅澤を名乗る。父是真に蒔絵と絵画を、池田泰真に蒔絵を、黒川真頼に国学、石塚宗通に茶道を学ぶ。明治三十三年のパリ万国博覧会と四十三年の日英博覧会で銀賞を受賞。漆工競技会のち黒区美術院展覧会で活躍した。日本橋区浜町一丁目三番地。茶道具・漆絵・櫛が現存する。銘は「隆真」や「隆真造」とし、「古満」印を使用した。
事蹟	江戸後期の印籠蒔絵師。不詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。古満寛哉（初代）の門人。銘は「英哉」もしくは「英哉作」。
英哉 えいさい	江戸末期の印籠蒔絵師。古満寛哉（初代）の門人。銘は「英哉」もしくは「英哉作」。	江戸後期、尾張名古屋の蒔絵師。「津島祭礼蒔絵三組盃」に在銘がある。
雲光斎秀福 うんこうさいひでとみ	江戸後期、尾張名古屋の蒔絵師。「津島祭礼蒔絵三組盃」に在銘がある。	「京雀跡追」には「まきえや」として「新丁上立うり下二丁め梅原とうふ」とあり京都にも梅原家が存在した。
梅原 うめはら	寛文四年生まれ。越中富山前田家が金沢から招致し、延宝八年に塗師方城端蒔絵師として十両十人扶持を与えた。享保十二年没。半七（二代）、正三郎（三代）吉五郎（四代）、半左衛門（五代）と代々続いた。	江戸後期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が現存。江戸の人と考えられる。
梅原半助（初代） うめはらはんすけ	江戸後期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が現存。江戸の人と考えられる。	幕末、亀井直斎の師として下谷町に住んだ幕府御細工所御用塗師梅原の名が伝えられる。
梅原幸立斎 うめはらこうりゅうさい	幕末、亀井直斎の師として下谷町に住んだ幕府御細工所御用塗師梅原の名が伝えられる。	江戸京橋二丁目に住。
梅原七郎右衛門 うめはらしちろうえもん	江戸京橋二丁目に住。	諱は重壽。幕府御細工所の御蒔絵師。延宝八年巖有院廟宮殿に蒔絵、また香台を制作した。元禄二年日光東照宮修復御用を勤めた。
梅原七郎右衛門 うめはらしちろうえもん	諱は重壽。幕府御細工所の御蒔絵師。延宝八年巖有院廟宮殿に蒔絵、また香台を制作した。元禄二年日光東照宮修復御用を勤めた。	諱は久壽。幕府御細工所の御蒔絵師。貞享四年、京橋一丁目横丁に住。
梅原七郎右衛門 うめはらしちろうえもん	諱は久壽。幕府御細工所の御蒔絵師。貞享四年、京橋一丁目横丁に住。	諱は久音。幕府御細工所の御蒔絵師。制保三年、女五宮調度を制作。
梅原七郎右衛門 うめはらしちろうえもん	諱は久音。幕府御細工所の御蒔絵師。制保三年、女五宮調度を制作。	天正・慶長頃の人とされる。不詳。
梅原久加 うめはらひさか	天正・慶長頃の人とされる。不詳。	▽梅原家は京都から各地に移住したと見られ江戸時代初期から江戸・京都・金沢・富山などにその名が散見される。江戸では幕府御細工所の御蒔絵師を勤めた。

氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
盈斎成章 えいさいなりあき	榮昇 えいしょう	悦延 えつえん		榎本又右衛門 えのもとまたえもん	榎本遠江 えのもととおうみ	榎本信濃 えのもとしなの	榎本喜平治 えのもときへいじ	榎本筑後 えのもとちくご	榎本備後 えのもとびんご	江馬長閑 えまちょうかん		圓阿弥武宗 えんあみたけむね
江戸後期の印籠蒔絵師。未詳だが盈斎章同と系統と考えられる。銘は「盈斎君達成章」もしくは「盈斎成章君達」で、花押や印を組み合わせる。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸中期の印籠蒔絵師。未詳。	▽榎本家は幸阿弥・菱田・奈良・両栗本・鈴木・太田と共に江戸開府以来、代々塗物蒔絵御用を勤めた家で幕府御細工所の御蒔絵師。切米二十五俵二人扶持。小石川牛天神前に代々居住したが、寛政頃、赤坂新町四丁目に転居している。系図・由緒書が伝存せず、代の詳細は不明。	諱が寛継。延宝八年の時点ですでに榎本又右衛門寛継が扶持を給書」を提出。同名で数代続いたと考えられる。	宝暦三年武鑑にその名がある。	安永二年武鑑にその名がある。	寛政元年武鑑にみられる。	寛政二年武鑑に見られる。国名筑後または飛騨。弘化元年、本丸御道具新規仕立御用を勤めた。松平不昧の茶友であり、好み物の製作に関わった可能性もある。また実妹が飯塚桃葉（三代）に嫁いでいる。	天保六年生まれ。筑後の跡を継いで御用を勤めた。備後には男子がなく、親戚にも養子に相応しい者がなかったため、慶応元年、寺社奉行支配右筆平沢長三郎を養子にした。	近代京都の蒔絵師。大和郡山藩士の子に生まれ、本名長治。十八歳で大阪に出て櫛蒔絵師小西春斎に三年学び、山本光利に師事。五十嵐道甫・山本春正に私淑した。「老松蒔絵重硯箱（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）」など宮内省御用品も多数手がけた。上京区百万遍境内に住。	▽圓阿弥家は江戸初期から明治維新まで幕府御細工所の御蒔絵師。元禄期には幸阿弥与兵衛と共に塗師方・蒔絵師方の肝煎ともなっている。系図・由緒書が伝存せず、代の詳細は不明。	通称又五郎、諱が武宗。延宝八年、巖有院廟の蒔絵に参加。元吉原難波町住。

氏名	圓阿弥又五郎 えんあみまたごろう	圓阿弥周防 えんあみすおう	圓阿弥筑前 えんあみちくぜん	圓阿弥新之助 えんあみしんのすけ	圓阿弥重宗 えんあみしげむね	應哉 おうさい	大垣昌訓 おおがきしやうくん	太田勘兵衛 おおたかんべえ	太田百三郎 おおたもさぶろう	太田播磨 おおたはりま	太田播磨 おおたはりま
事蹟	通称又五郎、元禄十二年には幸阿弥与兵衛と共に塗師方・蒔絵下の肝煎となる。武鑑によると、元吉原難波町、元禄十五年には谷長者町に住んだ。	武鑑によると、宝暦十年から神田永富町に住む。「装剣奇賞」所載の人で、「圓阿弥丹後／江戸神田永富町住／上手蒔絵結構にして甚々見事なり」とされる。「装剣奇賞」は武鑑を情報源にしており、「丹後」は武鑑から書き写した際に「周防」のくずしを読み間違えたもので、圓阿弥丹後は存在しなかったと考えられる。	筑前また主殿とも称し、諱が常清。江戸神田永富町に住。弘化元年に本丸御道具新規仕立御用を勤めた。	文久頃の最後の当主。維新となる。	圓阿弥在銘の印籠が数点現存し筆跡は共通する。いずれも朱漆による「重宗」の壺印を添えている。作風から宝暦から文化頃と推測され、圓阿弥周防・筑前あたりの作と考えられる。文化頃と推	江戸末期の印籠蒔絵師。篁園子と号した。初代古満寛哉の門人である。在銘の印籠・根付けが現存する。	近代加賀蒔絵の名工。慶応元年加賀藩の馬術家大垣平左衛門の次男として金沢に生まれた。十三歳で高田河月に学び昌訓・國貞・錦装堂と号した。明治二十五年に大垣工場を開業し、宮内省後用品・御買上品多数。便防具・什器類が多く現存。什器類は箱書のみが多く在銘は少ない。昭和十二年没。	享保元年、御役塗由緒書を連名で提出。	寛延元年、朝鮮国王へ献上の狩野祐清下絵、「貝海草蒔絵鞍鐙」・「蜻蛉蒔絵鞍鐙」・「秋草兎蒔絵料紙箱・硯箱」を製作。	通称鐘次郎、国名は播磨。弘化元年、本丸御道具新規仕立、万延元年新調御道具製作。文久年間、菱田大和とともに禁裏に献上の小筆筥を製作。	初め小磯小三郎。太田播磨に男子がなく、慶応三年に養子となつて相続した。

氏名	大藤半三郎（八代） おおふじはんざぶろう	大藤巳之助の養子。文政八年相続、御目見。文姫君様・溶姫君様・和姫君様・喜代姫君様・未姫君様の御引移御用を勤め、天保十二年隠居し、同年没。
	大藤巳之助（七代） おおふじみのすけ	大藤東作の養子。文政六年相続、御目見。同七年、盛姫君様御引移御用を勤め、八年隠居同年病死。
	大藤東作（六代） おおふじとうさく	大藤長十郎の養子。寛政五年休株（休職）を解き相続。先規のとおりに御成先御用御割籠木地塗を勤め、同七年御目見、同十二年淑姫君様御入輿御用を勤め文政六年隠居同年没。
	大藤七右衛門（五代） おおふじしちえもん	大藤長十郎の養子。天明六年相続。寛政四年休株（休職）となり、同五年隠居、同年没。
	大藤長十郎（四代） おおふじちやうじゆうろう	大藤大吉の養子。寛延三年相続。御代替の節に、御扇子献上御目見。若君様山王御宮参の節、外桜田で御目見。天明六年没。
	大藤大吉（三代） おおふじだいきち	延享元年相続。御代替の節、御扇子献上御目見、將軍宜下の節に御扇子献上御目見し、寛延三年没。
	大藤内藏之進（二代） おおふじくらのしん	正徳五年相続。享保五年、大猷院様御法事の際に拝礼、延享元年没。
	大藤内藏之進（初代） おおふじくらのしん	徳川家康の御用を勤めて御目見。延宝八年定式塗蒔絵御用を勤め、正徳五年没。
	大橋荘兵衛（三代） おおはししょうべい	▽大藤家は江戸時代を通じて明治維新まで徳川將軍家の御納戸頭支配、御割籠師ならびに御蒔絵師。
	大橋荘兵衛（二代） おおはししょうべい	中村宗哲（八代）の工人で、そのほとんどは莊兵衛の作とされる。宗哲（八代）没後、宗哲家を預かり、宗哲婿（後の十代）の育成を待って婿養子を迎え九代目とし、その後見となった。明治三十八年没。
	大橋荘兵衛（初代） おおはししょうべい	中村宗哲（七代）の弟子で中村宗哲（八代）の後見人となるが早世した。
	太田自適 おおたじてき	中村宗哲（四代）の門人で、寛政以降中村宗哲（五代）の後見人となり六代、七代の下職を勤める。
	太田喜久太郎 おおたきくたろう	近代の蒔絵師。明治二十二年生まれ。赤塚自得の門人。自得の作風をよく守る。昭和四十二年没。
	太田喜久太郎 おおたきくたろう	近代の作家。明治三十八年東京に生まれる。東京美術学校卒業。昭和三十五年、京都美術大学塗装科教授となる。前記太田喜久太郎との関係は不詳。
	太田喜久太郎 おおたきくたろう	近代金沢の蒔絵師。明治五年生まれ。通称、喜久太郎、別号が錦城・龍翠。金沢市南町に住。明治三十四年に「糸巻蒔絵手箱（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）」が第五次漆工競技会で銅賞になる。昭和二年没。
	太田喜久太郎 おおたきくたろう	

[illegible]

氏名	奥村霞城	奥田松壽齋	奥谷熊吉	奥田義貫	小川破笠	奥村四郎兵衛	小田玉得齋	落合鶴舟
事蹟	近代大阪の蒔絵師。岡山県牛窓に生まれ、本名奥村享。美術工芸没。文房具・茶道具を多く見る。帝展・文展で活躍。昭和十二年	明治の蒔絵師。在銘の香箱が数点現存する。	幕末・明治の堆朱師。弘化二年生まれ。浅草区福井町十三番地住。松本豊慶に堆朱を十二年習い、印籠・刀掛等を制作した。維新後堆朱・唐木彫の道具類や木彫・象牙彫刻もした。	天保期に印旛鳥取の絵師の下絵により緻密な高蒔絵をしたものが多く。青木図南から鳥取のものや天保年紀の作品も現存する。作品は極めて少ない。	寛文三年生まれ。通称平助。字は尚行。宗羽・宗宇・破笠・笠翁・卯観子・夢中庵と号した。芭蕉門下で俳諧をよくした。享保八年、六十一歳の時、弘前藩主津軽信壽に擬作高三十両五人扶持で召し抱えられる。延享四年没。蒔絵作品は中国文物を意匠とし、古鏡を漆芸技法で表現したものなど独特なもの。笠翁細工と呼ばれた。代表作に津軽家に伝来した「柏木菟蒔絵料紙箱・春日野蒔絵硯箱（出光美術館蔵）」「芙蓉蝶高彫硯箱（根津美術館蔵）」がある。	奥村家は代々幕府の御蒔絵師。初代の奥村四郎兵衛嘉之は元禄二年の日光東照宮蒔絵御用に参加した。武鑑では元禄十年から登場し、南鍛冶町一丁目住となっていた。代々四郎兵衛を称し、宝永十一年以降絶家したものの確認できない。代数は二、三代存在する。作品は現存しない。「装剣奇賞」印籠工名譜に記載されるが確実な	幕末・明治の印籠蒔絵師。天保十四年生まれ。通称勇藏、橘遊齋・勇山とも号した。安政元年、石井有得齋（初代）に入門。明治三年に開業。内外の博覧会に出品。東京蠣殻町三丁目十番地住。大村玉山から引き継いだ下絵帳を所持し現存している。	幕末・明治の印籠蒔絵師。文政九年生まれ。通称長吉、二十一歳で赤塚鳳船齋（五代）芝常に蒔絵を学び、二十九歳で独立して生計を立てた。維新後は箕田長二郎の嘱目を製し、ウイーン万国博覧会、内国勸業博覧会に出品した。南鍛冶町三番地のち京橋区和泉町四番地に住。

氏名	落合鶴舟 おちあいかくしゅう	音 おと	小畑七郎兵衛 おばたしちろべえ	小原春翠 おはらしゅんすい	温故斎 おんこさい	温故張寛永里 おんこちようかんながさと	温故張寛武永 おんこちようかんたけなが	鶴林斎 かくりんさい	神楽岡不入 かくらおかふにゅう	花航斎桃里 かこうさいとうり	笠間巨山 かさまごぜん	華山 かざん
事蹟	明治の蒔絵師。父落合鶴舟に学び通称長太郎、鳳得斎鶴舟と号した。第2回国勲業博覧会出品。京橋区中橋和泉町四番地住。「貝桶蒔絵色紙箱（ハリリ・コレクション）」が現存し、銘は「鶴舟（花押）」となっている。	明治の蒔絵師。起立工商会社の工人で、息子と弟子二人を連れて作業していた。	江戸後期京都の道具蒔絵師。安永以降、禁裏御蒔絵塗師常職となり、明治維新で廃業した。相国寺鹿苑院前に住んだ。	明治末から昭和にかけての東京の印籠蒔絵師。通称弥雄二郎、号は初め雄乙、後に巖松斎春翠、別号が珠光。川之邊一朝宅に寄寓していたところから門人と推測される。明治三十四年の第六次漆工競技会で「小町蒔絵硯箱」で三等賞を受賞し、宮内省御用品となる。大正期にあって印籠・煙管筒の緻密な名品を残した。戦中から終戦直後に没したと伝えられる。銘は「春翠（花押）」か「巖松春翠（花押）」がほとんどである。	「松月蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館）」一点のみが現存。作風から江戸後期の印籠蒔絵師と推測される。	江戸後期の印籠師。江戸の人。彫漆印籠を得意とした。	江戸後期の印籠師。江戸の人。彫漆印籠を得意とした。	江戸後期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が数点現存。	江戸後期の茶道具塗師。尾張の人。松平不昧の愛顧を蒙るが松江に入るものがなかったため松枝不入と号した。また無塵庵とも号す。晩年京都神楽岡に住し「神楽岡」・「日本神楽岡前不入」などと銘した。	江戸後期の印籠蒔絵師。飯塚桃葉（初代）の門人と推測される。数点の印籠が現存。	江戸中期の印籠蒔絵師。元文元年生まれ。江戸伊勢町道浄橋際の竹皮屋で、通称が酒井屋忠兵衛。はじめ巨山のちに笠窓・箕笠・筍栄居・巨孫とも号す。望月半山の門人で小川破笠三世を称し、寛政五年に芭蕉像を刊行した。享和二年没。印籠が少なからず現存し、「巨山造」・「笠窓」などの蒔絵銘が多い。	幕末・明治の印籠蒔絵師。

[illegible]

梶川常正	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川常壽	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川常貞	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川忠純	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川高房	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。柳光斎とも号した。
梶川松翠	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川恵信	江戸後期の印籠蒔絵師。
梶川鰭鯛	江戸後期の蒔絵師。印籠・盃が現存し、鰭鯛・好竹斎・大庭琴車とも銘し、大庭琴車が本名と推測される。
梶川胡柳斎	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。胡柳斎・福王斎・寛王斎・雀子斎・和言と号した。命は「胡柳斎」・「梶川胡柳斎」・「胡柳斎和言」・「福王斎和言」・「寛王斎和言」・「雀子斎和言」などで同形の壺印を用いる。
梶川一房斎	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川彰信	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。
梶川久次郎	「装剣奇賞」印籠工名譜に古今第一の名工として記載される。中橋檜物町に住。本姓堀川で梶川家当主ではなく、一門人と考えられる。
梶川鉦太郎（十二代）	嘉永三年生まれ。元治元年、梶川徳三郎（十一代）の養子となり相続。御細工所御用見習となり、本丸奥表新規仕御用を勤め、慶応三年に相続した。また柴田是真に師事している。
梶川徳三郎（十一代）	文政十一年生まれ。梶川精左衛門（十代）の養子となり嘉永三年に相続。線姫様御引移御用・西丸表奥新規御用・美賀君様下向道具御用・本壽院様御用・晴光院様五ヶ年目御道具御用・御待請御道具御用・御縁組御道具・本壽院様二の丸へ御引移御用・和宮様御用などをお勤めした。
梶川清左衛門（十代）	養子で文化十年相続。浅姫君様・文姫君様・溶姫君様・和姫君様・未姫君様・喜代姫君様・永姫君様・泰姫君様御引移御用などをお勤めた。嘉永三年没。
氏名	事蹟

氏名	梶川桃枝齋 かじかわとうしさい	梶川桃秀 かじかわとうしゅう	梶川儔英 かじかわともひで	梶川久高 かじかわひさたか	梶川英高 かじかわひでたか	梶川房高 かじかわふさたか	梶川文蔵 かじかわぶんぞう	梶川平三郎 かじかわへいざぶろう	梶川文龍齋 かじかわぶんりゅうさい	梶川光頼 かじかわみつより	梶川与四郎 かじかわよしろう	梶川良延 かじかわりょうえん	鹿島一峯齋 かしまいつぼうさい
事蹟	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。印籠が現存。また白河藩主阿部家伝来品に「松鶴蒔絵煙草盆（白河集古苑蔵）」がある。	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。	江戸後期の梶川一派で特に技術が優れ、印籠の名品が多い。就中、伊予西条藩主松平家に伝来した「牡丹蒔絵印籠」を最上作とする。印籠以外では「瀧蒔絵尺八」が現存する。	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。	江戸後期の梶川一派の印籠蒔絵師。江戸住。狩野典信の下絵銘があることから安永頃の梶川一門と考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。鹿島寒山、皆川露道らの師としてその名が伝えられる。幕府御用品を制作していた。	江戸末期の印籠蒔絵師。鹿島寒山、皆川露道らの師としてその名が伝えられる。幕府御用品を制作していた。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が現存。銘には壺印を添える。	鹿島寒山の祖。初代一峯齋は宝永頃の人で梶川の弟子となり、幕府の御用品を制作した。その製品には梶川と銘し、壺印を押したと伝えられる。以後、幕末の鹿島寒山まで代々幕府の蒔絵師であつたという。白河藩主阿部家伝来品に「菊蒔絵煙草盆（白河集古苑蔵）」があり、また酒井抱一下絵の「日観葡萄漆絵広蓋」がある。これらは文化・文政期の鹿島一峯齋が個銘で注文に応じた作品と考えられる。

氏名	鹿島寒山 かしまかんだん	鹿島慶哉 かしまけいさい	梶山明細 かじやまめいさい	禾水 かすい	粕川不落 かすかわふらく	一政 かずまさ	片岡旭 かたおかあさひ	片岡華江 かたおかかこう	片岡好信 かたおかこうしん	片岡秀直 かたおかひでなお
事蹟	幕末・明治の印籠蒔絵師。文政二年、代々梶川家の下職を勤める。鹿島一・明治の家に生まれる。幕府御細工所用達の鍵屋某に卸す。通称佐。歳で独立開業した。号が「一峰斎」。維新後は箕田長二郎の嘱品を製した。助。名が「寒山」。号が「一峰斎」。万国博覧会をはじめ内外の博覧会に出た。第二回内国勸業博覧会写真帖（東京国立博物館蔵）に「猩猩高」。絵額「鳳凰草写真がある。また同博覧会に川之邊一朝らと合作出品高」。の「鳳凰草」の写真がある。また同博覧会に川之邊一朝らと合作出品高」。銘の印籠も現存し、銘は「一峰斎寒山」となっている。	池田慶真の門人。茶道具類が現存する。	幕末・明治の蒔絵師。文政八年生まれ。江戸皆川町に住した。幕府御細工所に仕出し、御蒔絵師梶川家の仕事を勤めた。維新後浅草に住み、嘱品を所持した。通称「清兵衛」または「重次郎」として、人々は「尊ん」。会社の「品を製した。通称「清兵衛」または「重次郎」として、人々は「尊ん」。で「重傑」と呼んだ。また「明細」と号した。明治十二年没。東京「国立博物館」には「起立工商会社」の「若井兼三郎」が「寄贈した」。観音「額」は「と重次郎本人が「寄贈した」。美術館」もあるが、在銘の作品は「八手蒔絵箱（広島県立美術館）」もあるが、在銘の作品は極めて少ない。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	名は幹、花城軒とも号した。東京牛込に住。明治七年に紫呂色塗を發明した。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	明治の芝山象嵌工。嘉永五年生まれ。通称源次郎、芝山易政（三代）の甥にあたる。十三歳で易政入門、二十四歳で開業。起立「工商」の工人となり内外の博覧会に出品。御一聖一個の書棚「一菊蒔絵螺鈿棚（三の丸尚蔵館蔵）」の螺鈿を担当した。明治三十八年、井上馨伯爵の注文による明月腕の膳腕二十組を制作中に病死した。	近代の芝山象嵌工。明治二十二年浅草猿屋町で片岡旭の子に生まれる。通称「三郎」。大正天皇即位式の御召列車、伊勢神宮宝箱の製作などにより相続。東京港区麻布十番二一八十三に住。昭和五十二年没。	明治の芝山象嵌工。天保十三年生まれ、通称「辰五郎」。芝山易政（三代）に師事。起立工商会社の嘱品を製作。東京浅草区小島町二十三番地に住。	江戸後期の蒔絵師。茶器が一点現存する。片岡秀道と同系統と考えられる。

氏名	片岡秀道 かたおかひでみち	勝山如水 かつやまじよすい	可庭斎 かていさい	加藤晋生 かとうしんしょう	加藤居山 かとうこざん	加藤忍斎 かとうにんさい	加藤弥助 かとうやすけ	金井壽一 かないじゅいち	金森春次 かなもりはるつぐ	狩野十旭 かのうじゅつきよく
事蹟	江戸後期の蒔絵師。「上巳節句蒔絵盃（大阪市立美術館蔵）」が現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸の人と思われる「蘆生蒔絵印籠」一点が現存する。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	明治の蒔絵師。安政三年、麻布古川に生まれる。通称新十郎。十三歳で旗本石河土佐守の家臣となり、河内東山に赴く。東京に戻り十六歳で竹内生翁入門。号を晋生とする。浅草区西三筋に葬られる。櫛に在銘が多く、「晋生」銘が入る。	近代東京の蒔絵師。農展で活躍した。	幕末・明治の塗師。文政八年生まれ。二十三年、四歳の時に石塚庄次郎に塗を学び、諸国を遊歴して鍊磨し、安政二年に白漆を發明。明治元年帰京するが、漆芸衰退により廃業して小縣家庭従となり東京本所松井町一丁目二十五番地に住。第一回内国勸業博覧会に出品して花紋賞牌を受けた。	江戸後期の京都の蒔絵師。「七瀧蒔絵七組盃」が現存する。	天保二年生まれ。通称清吉。十九歳で田邊源助（四代）入門、また源助（五代）にも師事。安政五年に幕府御細工所下職となり、浅草蔵前に住。維新に際して徳川家に従い静岡へ移住、明治三年に上京して東京。蟻殻町三丁目九番地に開業、杉本屋の雇工となりまた起立工商会に入社。明治九年フイルデルフイア万国博覧会出品。後に東京美術学校教授となる。明治三十三年に没し、深川良信寺に葬られるが墓石は建てられなかった。	近代名古屋の塗師蒔絵師。春正家の別家十家の内の一家。春正家十代正興の師。明治三十八年「溜塗棗」が第七回漆工競技会で銀賞牌となる。在銘はなく、箱書に「春次」の墨書と「春次」の黒文長方印を捺す。	江戸中期の蒔絵師。本姓木村で通称文次郎、名が健元。「装剣奇賞」が多くの現存する。載される。「古墨形印籠」や笠翁風の象嵌の作品が多く、狩野姓、木村姓どちらもある。の印籠を多く製したためである。古墨形印籠へパウア・形のレクシオン。には「深溪廣郷」あるいは「紀陽廣郷」と添えたものもあり、後年紀伊に移住したとも考えられる。幕府儒活躍は享保頃で、漢詩を配した古墨印籠が数点あることから、明治以降、巨匠は細井廣澤の漢詩を配した古墨印籠が数点あることから、明治以降、降、作品の多くは小川破笠作とほぼ同時代と考えられる。明治以降、めて賞揚すべき工である。

氏名	加納鉄哉 かのうてっさい	加兵衛 かへえ	神坂雪佳 かみさかせつか	神坂祐吉 かみさかうきち	亀井直斎（初代） かめいじきさい	亀井直斎（二代） かめいじきさい	亀澤貞常斎 かめざわていじょうさい	蒲生盛雅 がもうもりまさ	蒲生孝太郎 がもうこうたろう
事蹟	弘化二年に岐阜で生まれる。幼より父加納鶴峰に画を学び、さらに京都・長崎で、画・書・彫刻を学ぶ。鉄筆を彫刻して以来、その名を知られる。東京美術学校教授も務めた。大正十四年没。煙管筒の作品が多く現存する。	「装剣奇賞」所載の人物で、印籠の地下工。銘は蓋裏に黒漆で記される。加兵衛の蓋裏銘があるものには、春正、田付ら京都の蒔絵師の銘の在るものが多く「装剣奇賞」の「京師の人歟」を裏付ける。銘字は二種類で大きく「装剣奇賞」の存在が推測される。	近代の図案家であり工芸家。慶応二年生まれ。鈴木瑞彦に四条派の画を学び、岸光景に図案の指導を受ける。琳派に傾倒し、蒔絵作品もある。明治四十年に競美会を設立し、図案の指導をした。昭和十七年没。	明治十九年生まれ。雪佳の実弟。富田幸七に蒔絵を学び、新古典美術品展で活躍。大正十二年に東宮御成婚記念の書棚を江馬長閑・美迎・田秋悦らと制作。兄雪佳の図案にあるものが多い。昭和十三年没。	五代前より寛永寺宮様出入の植木屋で「木屋」を屋号とし、四代より漆工となる。これを初代とする。初代直斎は、文政四年に生まれ、漆工はじめ商家に丁稚に出されるが、馴染まず木工大川藤七宅に寄食して実家に帰らず、十四歳で下谷に住んだ。幕府御細工所の塗師梅原某に入門。さらに明珍宗周に就いて有職故実を学び、あわせて甲冑塗りと下職になる。弘化四年父の死により家名を相続。通称を金蔵とする。嘉永より主に茶器を製作。また明治初年から紙製漆器を発明し、内国勸業博覧会でも有功二等賞牌を受け、た。俳諧を趣味とし、亀山とも号す。明治二十九年没。下谷正燈寺に葬られる。	文久元年生まれ。通称栄蔵、十五歳から父に就いて修業。田中抱二に画を、横山松三郎に写真を拓植黙阿弥に茶道を学ぶ。二十九歳で直斎を襲名、下谷区中根岸町百四番地住。	明治の蒔絵師。通称慶次郎。東京橋桶町後に日本橋区本材木町一 一、二十二に住。香箱や櫛が現存。	江戸後期の人。通称安五郎、号が盛雅。水戸藩士の余技で天保頃八景蒔絵印籠も現存しており蒔絵にも長じていたことが判明している。銘は「水府小巨／蒲生盛雅」とし、屈輪彫印籠は蓋裏に切る。	蒲生盛和の子。水戸藩右筆を勤め、余技に駕籠や刀鞘などに蒔絵をしていた。維新後神田小川町に蕎麦屋を出すが「士族の商法」で失敗。明治三年、渡米してシケラックスを導入。明治十年帰国、神戸造船船内塗装に木工塗装を導入した。明治十年帰

氏名	華陽齋	唐杉梧竹	河合喜遊齋	河合秀甫	河合静山	川勝照玉齋	川上閑月	川崎儀兵衛	川崎成甫	川崎光山	
事蹟	江戸末期の印籠蒔絵師。冷泉家伝来の「富士鶴蒔絵印籠」にこの銘がある。	明治の蒔絵師。通称弥久彦、自得齋・漆園と号した。東京本郷区根津西須賀町十一番地住。乾漆色漆を研究し美術博覧会・漆工競技会に出品。日英博覧会に能面を出品。銘は「梧竹」とする。煙管筒に在銘を見ることが出来る。	明治の蒔絵師。文政十一年生まれ。通称久次郎。十三歳で関陸遊齋に入門。嘉永三年、師家の職工となる。明治元年に開業、紋唐草蒔絵を得意とし、小道具を製作。東京南鍛冶町十五番地に住。	明治二十三年生まれ。通称亀太郎・豊三。父河合喜遊齋に師事。東京京橋区南鍛冶町十五番地に住。農展・帝展で活躍。昭和五年没。	近代東京の蒔絵師。日本漆工会に出品。大正十年農展で三等を受ける。森川紫山・川面冬山らとともに「昭和の三山」といわれた。	文政十年生まれ。通称逸吉。菱田自得・田邊源助（四代）に学び、本文久頃に開業。菱田自得を通じて幕府の御用品を製作。維新後、本石町三丁目二十七番地に住み、明石屋・精工社の商品を製作。一龍甲富士鶴蒔絵大盃（ハリリコレクシヨン）には「田邊照玉齋（源）」銘があり、田邊工房で川勝照玉齋が製作したと推測される。	文政十年生れ。通称逸吉。菱田自得・田邊源助（四代）に学び、本文久頃の開業。菱田自得を通じて幕府の御用品を製作。維新後、本石町三丁目二十七番地に住み、明石屋・精工社の商品を製作。一龍甲富士鶴蒔絵大盃（ハリリコレクシヨン）には「田邊照玉齋（源）」銘があり、田邊工房で川勝照玉齋が製作したと推測される。	文政十年生れ。通称逸吉。菱田自得・田邊源助（四代）に学び、本文久頃の開業。菱田自得を通じて幕府の御用品を製作。維新後、本石町三丁目二十七番地に住み、明石屋・精工社の商品を製作。一龍甲富士鶴蒔絵大盃（ハリリコレクシヨン）には「田邊照玉齋（源）」銘があり、田邊工房で川勝照玉齋が製作したと推測される。	江戸中期、延享・寛延頃の伊予大洲藩主の御用蒔絵師。	江戸中期、明和頃の蒔絵師。通称儀左衛門、諱が成甫、俳号知足庵。静甫。伊予大洲城下で武具その他に蒔絵する。後伊予松山、京都に移住する。狩野典信下絵の作品や八十七歳在銘の作品がある。	幕末・明治の印籠蒔絵師。天保六年生まれ。通称忠次郎、白井可交。蒔絵を習い、二十二歳で開業、光山と号して専ら印籠を製していたが、維新後は貿易品を制作した。薬研堀町二十八番地に住。

氏名	川之邊一朝 かわのべいつちよう	川之邊一湖 かわのべいつこ	川之邊一朋 かわのべいつぼう	川之邊文朝 かわのべぶんちよう		木内喜八 きうちきはち	木内半古 きうちはんこ	木内省古 きうちしょうこ
事蹟	明治の蒔絵界の巨匠。天保元年に生まれ、幼名源次郎。十二歳で幸阿弥因幡長賢の仕頭を勤める古満派の武井藤助入門。二十歳で一歳で独立。維新前は和宮の調度をはじめ幕府の調度類や熊本藩主細川家の「青海波海貝丸蒔絵鞍鐙」(永青文庫蔵)を製作した。た。受賞。明治二十年に帝室技芸員、同三十年に東京美術学校教授となる。明治二十九年に「蔵月」を明した、御一聖一個の書棚「菊蒔絵螺鈿」(三の丸尚蔵館蔵)を明した、御一聖一個の書棚「菊蒔絵没。御用品が多いために銘品は少ない。印籠として「鶯蒔絵印籠」一点のみが現存する。	川之邊一朝の長男ではじめ清吉のち平右衛門、一湖と号した。浅草区西三筋町五十二番地、のち本郷区本郷五一二十に住。	名は豊三郎。川之邊一湖の子。本郷区本郷五一二十に住。	川之邊一朝の次男で、はじめ房吉、文朝と号した。日本橋区中州一三十三年パリ万国博覧会の硯箱が現存する。一等賞を受ける。明治三十三年住。明治三十一年全国漆器共進会で一等賞を受ける。明治三十三年住。明治三十一年全国漆器共進会で一等賞を受ける。明治三十三年住。	▽木内家は東京において幕末から戦前にかけて木画・木彫・指物を得意とした木工で、天平以来絶えていた木画を復興したことで有名。	安政十年、江戸深川佐賀町に船大工喜八の子に生まれる。幼名友吉、長じて喜八、諱が喬求。琴師重元平八に学ぶ。琴師・船大工・鉄砲台木師・鞘師・指物師などを務めるが、何れも器用で人よ第一回内国勸業博覧会に「紫檀木画書棚」を出品して鳳紋賞牌、宮内省御用品となり、以後も木画の復興に努めた。明治三十五年没。	安政二年神田白壁町に生まれる。母が木内喜八の妹で甥に当たる。本名は半五郎、喜八の養子となつて半古と号した。明治十一年に臨時国宝取調局が置かれ、九鬼男爵に随行して調査に参加した。また明治二十八年から第二正倉院御物整理に完成させた。日本美術協会展覧会で受賞多数。昭和八年没。	半古の子で明治十五年生まれ。友吉を称し、省古と号した。美術展覧会・彫工会で受賞数々、大正十五年、現代装飾工芸展覧会で金賞。昭和三十七年没。

氏名	岸上義明 きしがみよしあき	其舟斎 きしゅうさい	北村春照 きたむらしゆんしょう	北村春正 きたむらしゆんしょう	木造貞門 きつくりていもん	玉斎 ぎよくさい	玉泉斎 ぎよくせんさい	玉川斎 ぎよくせんさい	玉潤斎 ぎよくじゆんさい	玉龍斎宗正 ぎよくりゅうさいむねまさ	清野扇斎 きよのせんさい
事蹟	明治の唐木彫工。天保六年生まれ。十三歳で後藤弥太郎の門に入り、随行して諸国を遊歴。明治五年に開業。東京浅草区須賀町二丁目番地に住して置物・花瓶・香箱・額縁など輸出品を製作した。木彫象嵌の印籠を作り、特に「菊壽彫螺鈿印籠」はビクトリア&アルバート美術館・印籠美術館多数点が現存する。銘は蓋裏に彫銘。	江戸後期の蒔絵師。盃が現存し、江戸の御小屋系の蒔絵師と推測される。	近代京都の蒔絵師。明治元年に生まれ、通称徳治郎。湯浅華曉に入門し春照と号した。また青海波塗・紅葉塗を研究。新門前東山線西入に子の春正と住む。印籠の作品も多く、乗合船などは古作と見紛うばかりの出来である。昭和十四年没。	近代京都の蒔絵師。北村春照の息で明治三十一年に生まれ、通称を徳造、印籠・茶器を作る。山本春正の後裔を自称し、箱には「印籠師春正」と自署したと伝える。	木造貞門の先祖の鞍師木造助十郎は伊勢加賀守の末葉木造左衛門佐で天正十四年に織田信雄に召し出される。貞門は幕末・明治名古屋の指物、象嵌工。堅木に螺鈿平象嵌の独特の作風を持つ。巻煙草入・香箱・茶道具などの作品を僅かに見る。「第二回内国勸業博覧会写真帖（東京国立博物館蔵）」にも「梅象嵌茶箱」の写真がある。明治三十八年没。戦災で墓石は存在しない。余暇に和歌を詠む。	幕末の蒔絵師。江戸の人で青山貫洪らと共に京都に上がり、篠屋治兵衛宅に寄寓して製作したが、五、六年後に没したという。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。印籠・根付が現存する。	文政五年生まれ。柳瀬柳斎に就いて十年間修業、天保十四年に開業。印籠・櫛を製作。明治七年起立工商会社で職長となり職人を七から十人を使役。光琳風高蒔絵を得意とした。江戸本郷金助町に住。後に愛宕下町一丁目住。第一回内国勸業博覧会で鳳紋賞牌受賞。

氏名	清野如眠 きよのじよみん	清房 きよふさ	金次郎 きんじろう	愚常斎 ぐじょうさい	國井栄次郎 くにいえいじろう	國廣 くにひろ			栗本源左衛門 くりもとげんざえもん	栗本忠次郎 くりもとちゅうじろう	栗本兵庫 くりもとひょうく	栗本阿波 くりもとあわ	栗本伊予 くりもといよ
事蹟	嘉永四年生まれ。武州羽村矢部嘉助の次男で名は三吉。慶応元年浅野扇斎に入門。後に養子となる。明治六年ウイン万国博覧会事務官に随行。明治八年、内務省勸業寮試験所に入る。閉鎖後、起立工商会社に入った。若き日の白山松哉も指揮下に属す。京橋区新港町四丁目一番住。蒔絵は是真風、堆朱屈輪彫を得意とし。墓地に葬られる。煙管筒が現存する。昭和四年に没し、西教寺駒込林町に住した。	「紅葉猫傘蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」一点のみ現存。作風から江戸末期の印籠蒔絵師と推測される。銘は「奥州仙宮城。城住清房工」とある。	江戸末期の塗師。幕府の御小屋で御蒔絵師栗本豊次郎の塗師を勤めた。	江戸末期の江戸の蒔絵師。在銘の盃が現存する。御小屋系の蒔絵師と推測される。	幕末・明治の塗師。文政八年生まれ、十四歳で最上善蔵に学ぶ。文久二年独立、起立工商会社・精工社の嘱品を制作。築地三丁目十四番地に住。	江戸末期の江戸の印籠蒔絵師。彦根藩主井伊家に伝来した「十二ヶ月蒔絵揃印籠」にこの銘がある。	▽栗本家は幸阿弥宗伯の子、宗清が永禄年間に分家し幸阿弥家の所領栗本郡を姓としたことにはじまる。小田原北条家に仕えていたが、落城により徳川家に仕えた。栗本家は源左衛門家と太郎右衛門家の二家に分かれ、両栗本家とも五十俵二人扶持を受ける。源左衛門家ははじめ大工町、次いで白金町三目横町のち皆川町三丁目門家は、はじめ大工町、次いで白金町三目横町のち皆川町三丁目に住した。	通称源左衛門、諱が信新。延宝八年巖有院廟に蒔絵した。	通称源左衛門、諱が正俊。元禄二年日光東照宮修復御用を勤めた。	源左衛門家の当主。宝暦九年武鑑以降に名がある。	源左衛門家の当主。寛政四年武鑑以降に名がある。	源左衛門家の当主。文政四年武鑑以降に名がある。	源左衛門家の当主。通称豊次郎、国名が阿波。弘化元年、本所御道具新規仕立御用を勤めた。

こうあみふさなが 幸阿弥長房（十一代）	寛永五年に生まれ、興兵衛と称し、入道長房と号し、諱が長房。江戸・京を往来して御所と幕府の御用を勤める。延宝八年御代替の節、御扇子献上。天和三年に御印籠・香箱を製作した。同年没。作品は無銘であったと考えられる。
	▽幸阿弥家は足利八代將軍義政に近侍した土岐四郎左衛門入道幸阿弥道長を祖とし、同朋衆の一人として蒔絵の技術を以て仕えた。のが始まりで、以後足利將軍家・豊臣家・徳川家に仕えた。貞享元年武鑑から記載され、住所は靈巖島、馬喰町一丁目と変遷し、宝永三年以降、神田皆川町一丁目と目高は三代將軍家光の時、二代々の仕来りで正月朔日に御目見。禄高は三代將軍家光の時、二百石十人扶持から百石減知されたのを不服とし、百石をも辞して江戸時代を通して常に最高位に位置した。蒔絵師棟梁の別席として江戸時代を
けんさいとうねい 賢哉等寧	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。
ぐんゆうさい 郡遊斎	越後新発田藩主溝口家伝来の「蓬萊蒔絵盃」がある。
くろかわまさひで 黒川正英	幕末・明治の彫漆工。黒川家は代々長崎で漆目利を勤める地役人で、正英は文化十年に生まれる。彫刻に長じた。長崎東上町住。第二回内国勸業博覧会出品。明治十七年没。彫漆の印籠が少なからず現存する。
くりもとりのすけ 栗本鐐之助	太郎右衛門今朝以後の当主。文久三年に相続。
くりもとしなの 栗本信濃	幸阿弥因幡次男で、太郎右衛門家の養子となる。通称、長之助、国名が信濃。柴田是真にも師事。弘化元年、本丸御道具新規仕立御用、万延元年、新調御道具御用を勤めた。
くりもとうえもん 栗本宇右衛門	太郎右衛門家の当主。寛政四年武鑑以降に名がある。
くりもとすけが 栗本駿河	太郎右衛門家の当主。享保元年、御役塗由緒書を連名で提出した。寛延元年、徳川將軍家から朝鮮王国へ献上の「青海波蒔絵台子」、狩野探常下絵の「葡萄蒔絵鞍鐙」を制作。
くりもとらうえもん 栗本太郎右衛門	通称、太郎右衛門。諱が光屋。元禄二年、日光東照宮修復御用を勤めた。はじめ大工町次いで白金町三目横町、皆川町三丁目に転居した。
くりもとらうえもん 栗本太郎右衛門	通称、太郎右衛門、諱が茂利。延宝八年巖有院廟に蒔絵した。
氏名	事蹟

氏名	幸阿弥長救（十二代） こうあみながみち	幸阿弥正峯（十三代） こうあみまさいね	幸阿弥長孝（十四代） こうあみながたか	幸阿弥長周（十五代） こうあみながちか	幸阿弥長輝（十六代） こうあみながてる	幸阿弥長行（十七代） こうあみながゆき	幸阿弥長賢（十八代） こうあみながた	幸阿弥長福（十九代） こうあみながとみ	幸阿弥忠光 こうあみただみつ	幸阿弥新三郎 こうあみしんざぶろう	光峨 こうが
事蹟	寛文元年生まれ。通商、興惣次郎のち興兵衛、国名が伊予、諱が長道のちに長救。靈巖島・馬喰町一丁目・南大工町と転居。貞享元年鶴姫の香棚製作。元禄二年日光東照宮修復御用に際して馬一足朱印を賜る。また護持院の額、柳沢家調度を製作。元禄三年御代替の節、御扇。献上、元禄十二年塗師蒔絵師肝煎となる。「桜山鵲蒔絵硯箱（重要文化財）」に極書く、享保八年没。	通称、四郎左衛門・興兵衛・万助。国名は伊予。諱が正峯また長好。享保五年、部屋住で早世。	国名、因幡。諱が長孝・長好。寛延四年九代將軍家重の將軍就任祝賀のため来日した。第十回朝鮮使節への返礼品の内、鞍鐙六組・大卓二点・料紙硯箱を製作。狩野典信下絵「鯉鮎蒔絵印籠」は「幸阿弥長孝」・「幸阿弥長孝（花押）」とする。	国名が因幡、諱が長周または長因。山田常嘉斎、石塚桃壽との合作による「三夕蒔絵硯箱」や「朱面取茶器」、「三番叟蒔絵三組盃」がある。また享和二年制作の「貝桶蒔絵印籠」と寛政十二年作の「鼓鷄蒔絵印籠」が現存する。銘は「幸阿弥」・「幸阿弥長周（花押）」とする。	国名称因幡。諱が長輝。	国名、因幡。文政十年、御昇進の御位階御用につき御進献御太刀箱に蒔絵をし、御褒美銀子を頂戴した。弘化元年、本丸御殿新造により新規御道具を製作した。	通称吉之丞、諱が長賢。国名称は初め因幡、万延元年に山城に改めた。同年本丸御殿造営に伴い、新調御道具製作。文久元年和宮御入城の御車を修復した。	通称久之丞、国名称は伊勢で諱が長福。柴田是真に蒔絵を習う。慶応三年、進献御太刀箱蒔絵御用を勤め御褒美銀子を頂戴して、明治三年に徳川家に従い静岡へ移住。後東京へ戻るが、零落して居所さえ明かさなかったという。	江戸後期の印籠蒔絵師で幸阿弥家の一門であろう。多くの印籠が現存する。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	

氏名	好古齋 こうこさい	公齋 こうはい	光齋 こうさい	篁齋保雪 こうさいやすぎよ	高坂桐谷 こうさかとうこく	迎田嘉兵衛 こうだかへえ	迎田嘉亭 こうだかてい	河面冬山 こうもふとうせん	光柳齋 こうりゅうさい	古鶴齋 こかくさい	越田尾山 こしだびざん		
事蹟	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	幕末・明治の印籠蒔絵師。	江戸末期の印籠蒔絵師。江戸の人。昇龍齋光玉齋門下と推測される。金粉溜地小判形の印籠を多く見る。銘は「光齋」。孝明天皇御遺品として和宮に譲られた「野馬蒔絵印籠（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）」にこの銘がある。	江戸後期の印籠蒔絵師。印籠と盃が現存。銘は「篁齋保雪（花押）」または「保雪（花押）」とする。	幕末・明治の塗師。文化十二年生まれ。通称金兵衛。古市桐谷に入門し、櫛谷の号を授けられ、天保七年、下谷和泉橋通に開業、職工十数人を使って諸侯の道具類を制作。笠翁風・疑堆朱を得意とした。古市桐谷が隠居の際に桐谷の号も授かり、法橋に叙せられ、花紋賞牌を受けた。	旧彦根藩主ではじめ黒田鉦三郎、のちに黒田家に婿入する。明治初年春井蒔絵工房に勤める。明治二十一年に秋悦・嘉亭と京都に転住した。明治二十八年、京都奨美会から宮内省へ納める。書棚・文台・硯箱を製作した。明治四十二年没。	明治十九年迎田嘉兵衛の次男に生まれ、通称鐘太郎。新町一条の没。中村宗哲宅に住む。帝展・紀元二六〇〇年展出品。昭和三十六年	没。に住んだ。盛美園神殿に高蒔絵をしたことでも有名。昭和三十年	近代の蒔絵師。明治十五年広島に生まれ、本名河面冬一。東京に出で、明治四十一年に東京美術学校卒業。帝展出品、文展無鑑査。仏像・古漆器の模写でも知られ、東京国立博物館には模写手本が所蔵される。森川紫山・河合静山とともに「昭和の三山」といわれる。重要無形文化財に指定される。杉並区大宮町一七〇九	江戸末期の印籠蒔絵師。江戸の人で昇龍齋光玉門と推測される。金粉溜地小判形の印籠を多く見る。金粉溜地の技術が大変優れる。芝山や金工を象嵌したものも多い。銘は「光柳」もしくは「光柳齋」。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	明治七年金沢に生まれる。本名貢。高橋幸一に師事。帝展出品、文展無鑑査。大阪市南区上本町五一二六に住。没年未詳。	▽小島清兵衛は京都の堅地屋清兵衛の次男で、寛永十五年に出雲松江藩主松平直政によって松江に招かれる。翌年出雲大社造営の塗師棟梁となり、苗字帯刀を許された。江戸後期の五代小島漆壺齋（初代）が出た。以後茶道具を中心に製作した。

氏名	事蹟
小林八次郎（五代） こばやしはちじろう	小林惣之助の養子。嘉永二年相続。姫君様引移御用を数々勤め安政五年隠居。
小林惣之助（四代） こばやしそのすけ	小林傳次郎の養子。天保九年相続。姫君様引移御用・御入輿御用を数々勤め、嘉永二年隠居。
小林傳次郎（三代） こばやしでんじろう	文政十年相続。姫君様引移御用を数々勤め、天保九年隠居、同一年没。
小林甚兵衛（二代） こばやしじんべえ	小林甚兵衛の養子。寛政五年相続。御入輿御用を勤め、享和三年隠居。文化十二年没。
小林甚兵衛（初代） こばやしじんべえ	宝暦三年、御細工所に召出され、五十宮様御煙草盆御用、御簾中様御入輿御用を勤め、上野・増上寺御靈屋修理御用、姫君様引移御用、御賄方御用を数々勤め、寛政五年隠居、同六年没。
	▽小林家は甲斐の出身。宝暦三年に新規に召抱えられた徳川将軍家の御細工頭支配御蒔絵師。
小林幸八 こばやしこうはち	近代の曳物師。鳥取生まれで中年に松江に移住し、小椋堂・小椋左近とも称した。鳥取生まれで中年に松江に移住し、小椋堂・小椋の木地を見て、発奮し、大いに技を磨いたという。小島漆壺斎（瓢形に「幸」を刻銘する。）。大正九年没。銘は瓢
小林敬哉 こばやしけいさい	江戸時代の印籠蒔絵師。文政十年生まれ。本名は森江敬次郎で中井敬所の実兄である。松本交山に画を学び、古満寛哉（二代）に師事して、敬哉と号した。安政二年没。
小林華鴻 こばやしかこう	幕末・明治の蒔絵師。嘉永二年、京橋銀座四丁目に生まれる。通称徳太郎または徳三郎。十二歳で商家に奉公に出、十五歳で鶴下永寿斎に入門。華鴻または魁山と号した。明治元年から南伝馬町二番地の自宅で開業。高蒔絵研出蒔絵を得意とした。
小島漆壺斎（四代） こじましつこさい	漆壺斎（三代）の養子で幼名豊十郎。嘉永五年に生まれ、明治十年に相続。昭和四年没。多くの茶道具が現存する。曳物は小林幸八の手になる物が多い。銘は「漆壺斎」、「漆壺斎（花押）」とする。
小島漆壺斎（三代） こじましつこさい	漆壺斎（初代）の子で幼名林五郎。文政元年に生まれ、他家に養子に行くが、兄の早世により小島家を相続。鈴翁と号した。文政三年に家督を相続。弘化三年に没。銘は「漆壺斎」、「漆壺斎（花押）」とする。
小島漆壺斎（二代） こじましつこさい	漆壺斎（初代）の子で文化九年に生まれる。諱が乗継。文政三年に家督を相続。弘化三年没。
小島漆壺斎（初代） こじましつこさい	小島家の五代目で、寛政三年に家督を相続して清兵衛を称する。松江藩主松平不昧に従って江戸に上がり、原羊遊斎に入門する。不昧好みで狩野栄信下絵「秋野蒔絵棗（絲原美術館蔵）」の作者として有名。文政十三年没。

故 倣 斎 こほうさい	小林 和 光 斎 こばやしわこうさい	小林 義 珍 こばやしぎちん	小林 保 執 こばやしやすもり	小林 政 勝 こばやしまさかつ	小林 寶 船 こばやしほうせん	小林 好 山 こばやしこうざん	小林 貞 玉 こばやしていぎよく	小林 八 十 吉 (八 代) こばやしやそきち	小林 八 次 郎 (七 代) こばやしはちろう	小林 喜 兵 衛 (六 代) かばやしきへえ	氏 名
「六歌仙蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館）」一点のみが現存。作風から江戸末期の印籠蒔絵師と推測される。銘は「故倣斎平尾作（花押）」。	明治の蒔絵師。通称善吉、号が和光斎。神田区鍛冶町三十六番地住。	江戸後期の印籠蒔絵師。別号、天蘭六十二叟。銘の印籠が現存。「藻鯉蒔絵印籠（東京歴史民族博物館蔵）」には「柳城巨」ある。柳城は名古屋城を指すとも考えられるが、筑後柳川藩主立花家の御用蒔絵師の可能性もある。	江戸末期の印籠蒔絵師。多くの印籠が現存。また「千鳥蒔絵小簞」が現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。作風から江戸の人と考えられる。	幕末・明治の蒔絵師。文化十三年に生まれ。通称又三郎。十三歳で水戸藩士の蒲生盛雅について十年修業し、二十三歳で開業。初め蒲生寶船、小林蒲生、小林鷺毛とも称し、晩年小林寶船を称した。また旭水斎・旭山とも号した。湯島三組町、後に湯島天神一丁目住。主に茶器を製作していたが、晩年は老いて技巧を凝らす気力がなくなつたとして主に修理をしていた。起立工商会社では堆朱を古器修復を担当し、ウイーン万国博覧会に堆朱額を出品。また修復の腕は高田和三郎よりも上手と伝えられる。印籠・根付・刀装具などに在銘品がある。銘は「蒲生寶船」、「小林寶船」、「旭水斎小林寶船」などで花押を添えることも多い。	通称、萬次郎。白山松哉の蒔絵の師。小林貞玉の後嗣とも思われる。	江戸後期の蒔絵師。通称萬次郎、号が貞玉。嘉永・安政頃の幸阿弥派の蒔絵師。江戸鉄砲町に住んだ。清川守貞の師。	嘉永元年生まれ。文久三年十六歳で相続、奥表新規御道具御用、年始御目見。慶応二年、御進発につき御細工御用をと止めた。	文久元年相続。御用を勤め、同三年に隠居。	小林八次郎の養子。安政五年相続。万延元年実成院様引移御用、和宮様御下向御待請。並びに御婚礼御用、文久元年本壽院様引移御用を勤め同年隠居。	事 蹟

氏名	事蹟
こまきゆうざうやすただ 古満久藏安匡（四代）	通称を久藏、諱が安匡。宝暦四年に初御目見、相続し御用を勤め た。宝暦八年没。乙卯日本橋の紙商榅原家旧蔵の「野路玉川」の硯 箱に「宝暦五年卯月／古満安匡銘があること、明かである。時の 当主四代目久藏と安匡とは同一人である。狩野英信の「花鳥」の 美術館蔵「薄鶉」の硯箱に「東洋美術館蔵」の「狩野英信」の 絵であることもこれと矛盾しない。石仲子守範「図百鳥」の 基づいた「花鳥」の硯箱に「永井家に伝来」など百点の 印籠が現存。また「山水」の硯箱に「静嘉堂文库美術館蔵」の あけ「古満安匡」とする。類を制作して嘉文の銘は細字で字間をは
こまきゆうはくやすあき 古満休伯安章（三代）	通称を久藏、号が休伯、諱が安章。正徳四年に部屋住で初御目見、 翌年相続。享保十七年に没した。上記二点の極銘の存在からも、 在銘の習慣は、この三代休伯安章から定着したものである。住友 家伝来の「月梅」の硯箱に「古満休伯安章」の印籠の作品も多い。 満休伯の作と「寛政頃までは古満本家歴代と古満巨柳まで厳守され る。この習慣は寛政頃までは古満本家歴代と古満巨柳まで厳守され
こまきゆうはくやすあき 古満休伯安明（二代）	通称を久藏、号が休伯、諱が安章。正徳四年に部屋住で初御目見、 翌年相続。享保十七年に没した。上記二点の極銘の存在からも、 在銘の習慣は、この三代休伯安章から定着した。住友 家伝来の「月梅」の硯箱に「古満休伯安章」の印籠の作品も多い。 満休伯の作と「寛政頃までは古満本家歴代と古満巨柳まで厳守され る。この習慣は寛政頃までは古満本家歴代と古満巨柳まで厳守され
こまきゆうい 古満休意（初代）	寛永十三年、三代將軍徳川家光に召出されて御蒔絵師となった。 翌年に初御目見。寛文三年に病没した。延宝八年、 院廟の宮殿に蒔絵して、東京国立博物館蔵「三代休伯安章が初代休意 財一柴垣薦蒔絵硯箱（東京国立博物館蔵）の銘があり、三代休伯安章が初代休意 同休伯安章極めている。花押「」の銘があり、三代休伯安章が初代休意 の作と極められている。

氏名	古満休伯安巨（五代） こまきゅうはくやすなお	古満勘助（六代） こまかんすけ	古満六右衛門（七代） こまろくえもん	古満休意（八代） こまきゅうい	古満源蔵（九代） こまげんぞう	古満清兵衛（十代） こませいべえ	古満清兵衛（十一代） こませいべえ
事蹟	通称を久蔵、号を休伯、諱が安巨。宝暦十二年に家督を相続、田鶴宮様婚礼御用、若君様誕生道具御用、壽賀宮様婚礼御用、日光奇賞にも記載され、多くの印籠に「古満休伯作」銘がある。数点到沈金彫銘もある。武鑑に記される上槇町は工房と考えられる。	五代休伯に男子がいなかったため天明二年、養子となり相続した。種姫君様御入興道具・御台様婚礼御用・道具・鳳凰丸修復御用・式御用・誕生道具・鳳凰丸誕生御用・裕宮様手下道具・御伝馬船新規道具一式御用・月番とった。同年七月没。一月松柳蒔絵印籠（三井記念美術館蔵）、「古満安匡作」銘は、字間が詰まり筆跡が四代安匡とは異なる。特に「紅葉蒔絵印籠」には狩野栄信の下絵銘があつて貴重である。六代勘助の諱も四代久蔵と同じく安匡であつた可能性が高い。	勘助の子で寛政七年、父の死により相続した。御台様御産御道具・日光修復御用・犀鶴丸修復御用・脩君御方御下向御用・淑姫君様御入興御用・御台様御道具御用を勤めた。享和三年に没。	幼名清右衛門、のち久蔵。享和三年養父六右衛門の死により相続、御目見。友松君御誕生御用・日光修復塗師方御用・峯姫御引移御用を勤めた。文化八年剃髪・休意と改名。同十二年隠居し、引同十三年に没した。文化八年剃髪・休意と改名。同十二年隠居し、引	文化十二年養父の隠居により相続し、浅姫君様御引移御用・御霊屋向御位牌所塗師御用・紅葉山御宮向修復塗師方御用・西丸新規道具仕立御用・泰姫君様御引移御用等を勤めた。天保五年に剃髪、源亀と改名した。同十一年隠居し、同十三年に没した。	天保十一年父の隠居により相続した。東明宮御下向御道具・姫君様御入興道具・西丸御小納戸御慰御用・御本丸表新規御道具・仕立御用・睦宮御下向御用を勤めた。弘化四年隠居し、安政五年に没。	弘化四年養父の隠居により相続。精姫君様引移御道具・末姫君様焼失御道具・壽明君御方下向御入興御用・線姫君様御引移御道具・西丸奥表御道具新規仕立・美賀君御下向道具御用・本壽院様御用・具御用・晴光院様御住居御焼失道具御用・篤君御方婚礼御用・本壽院様御用・二丸御引移御用・和宮様御待請御道具御用・和宮様御婚礼・御道具御用・御本丸二丸奥表御道具新規仕立御用を勤めた。慶応三年時点で存命であり、誤りと考えられる。

氏名	古満清兵衛（十二代）	古満巨柳	古満寛哉（初代）	古満寛哉（二代）	事蹟
	店舗十二年相模鎌倉郡大船村甘粕小左衛門の次男に生まれ、幼名辰吉。本所林町三丁目三番地に住り、古満清兵衛（十一代）の養子となり慶応元年、養父の隠居により相続した。同二年御納戸頭支配となる。	満寛哉（初代）・御用を勤めたと推測される。門下に大村玉山・古満寛哉（初代）・御用を勤めたと推測される。門下に大			

氏名	古満寛哉（三代）	古満貞栄	古満久哉	古満遠州	古満叟山	古満堤哉	古満正甫	古満又三郎安治	古満安明	古満安国	古満安秀	古満安昌
こまぶんさい 古満文哉	こまかんさい 古満寛哉（三代）	こまさだえい 古満貞栄	ふるまきゆきい 古満久哉	こまえんしゅう 古満遠州	こまそうざん 古満叟山	こまていさい 古満堤哉	こまさとも 古満正甫	こまたさぶろうやすはる 古満又三郎安治	こまやすあき 古満安明	こまやすくに 古満安国	こまやすひで 古満安秀	こまやすあき 古満安昌
事蹟	初代古満寛哉の次男で、欽十郎と称した。幼い頃より兄貞次郎と共に父の薫陶を受けた。また父の親友谷文晁に画を学び、文晁の一字を貰って文哉と号した。また文晁は秘蔵する東山時代の雁の絵の食器を文哉に贈っている。是真とは親しく、文晁七十七歳の祝賀の配物盃は真と二人で製作した。また文哉が今戸八幡の境内に住んで、病氣と子沢山に苦しんでいた時に、是真が援助した逸話は有名。初代寛哉は、愛蔵の尾形光琳作「扇面業平蒔絵硯箱（根津美術館蔵）」を囊物商宮川に質入れしたまま没してしまいが、硯箱はそのまになつていた。文哉の苦境を見かねた是真は、それを銀座役人の辻某に二十五両で請出し、その金を嵩高の天保は銭に替えて文哉の枕元に二十五両で請出した。明治四年没。作品は印籠・根付・櫛類・刀装具が現存。銘は「文哉」「古満文哉」などが多い。	寛哉（二代）の子で天保十二年生まれ。通称は貞次郎。十七歳で三代寛哉を継ぎ、熊本藩主細川家御抱の蒔絵師となる。文久二年である。二十二歳の若さで病没したため、在銘の印籠が数点現存するのみ。	江戸後期の印籠蒔絵師。古満家の一派と考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。「井手玉川蒔絵印籠」一点のみが現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。古満本家の直弟子と考えられる。印籠・盃・煙草盆などの作品がある。三井家伝来「三番叟蒔絵三組盃（三井記念美術館蔵）」は、文化二年に宇和島藩主伊達家から拝領したものであり、寛政から文化頃に活躍したと推測される。	江戸末期の印籠蒔絵師。銘には白鳳斎・雲峯斎などの別号も見られる。印籠・拵が現存。	江戸末期の印籠蒔絵師。古満家の一派と考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。在銘の盃が現存。	江戸初期の印籠蒔絵師。徳川家康遺品の「志津薙刀拵（久能山東照宮蔵）」にこの銘があり、初代古満休意以前の徳川家と古満家との関係を窺わせ興味深い。また一説によれば古満家は足利時代より蒔絵を業としていたともいう。	江戸中期の印籠蒔絵師。古満家の一派と考えられる。鍋島家伝来の「秋野蒔絵硯箱（徴古館蔵）」や印籠が現存する。	江戸末期の印籠蒔絵師。古満家の一派と考えられる。	江戸末期の印籠蒔絵師。古満家の一派と考えられる。

氏名	こまやすまさ 古満安政	こまつほうこう 小松芳光	こみやかんざん 小宮寛山	こりゅうさい 古立斎	ごろべえ 五郎兵衛	こんがさい 今我斎	こやはんべえ 小山半兵衛			こんどうどうえ 近藤道恵（初代）	こんどうどうえ 近藤道恵（二代）	こんどうどうえ 近藤道恵（三代）	こんどうどうえ 近藤道恵（四代）	こんどうどうえ 近藤道恵（五代）	こんどうどうえ 近藤道恵（六代）	こんどうどうえ 近藤道恵（七代）	こんどうどうえ 近藤道恵（八代）	こんどうどうえ 近藤道恵（九代）
事蹟	江戸末期の印籠蒔絵師。古満家の一派と考えられる。銘は細字で「古満安政作」とし、古満本家当主と推測される。	近代の蒔絵師。明治三十六年金沢に生まれ、本名森作。東京美術学校に聴講生として在学の植松包美に入門。帝展・新文展で活躍した。金沢美術工芸大学教授となる。平成五年没。茶道具が現存する。	明治の塗師。明治十六年生まれ。十一歳で橋本市蔵に入門。螺鈿を応用した。名医四十四年に二十九歳で没。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	経歴不詳。文政頃に活躍した京都の道具塗蒔絵師と見られる。箱書に五郎兵衛、包書に「塗師蒔絵橋清」の判がある。食膳類・盃などが稀に見られる。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	徳川將軍家の御台所御用達の蒔絵師。明治維新まで代々御用を勤めた。	▽近藤道恵は京都の茶道具塗師で、加賀前田家に招聘されて金沢に逝くが、のちに病を得て帰京。前田家はその功績を讃えて累代扶持を与えたとされる。代々京都烏丸通錦小路上ルに住んだが、天明の大火で高倉二条上ルに転居。維新後当主が壮年で病死して絶家した。	江戸時代初期の塗師。通称将監。五十嵐道甫とは無二の親友である。道甫とともに加賀前田家に招聘されて鹿沢に逝くが、のちに病を得て帰京。京都手洗ノ水ノ町住。加賀前田家のほか片桐石州・小堀遠州の好み物も製作した。寛永十九年没。	通称次良兵衛。京都下立売通に住。正保五年没。	通称彦六。京都烏丸錦小路上ルに住。天和四年没。	山本春正（二代）景正の子で、通称次郎助。養父近藤道恵（三代）に師事。正徳五年に没。	通称次郎兵衛。父道恵（四代）に師事。享保十四年没。	通称与三兵衛、また源助。道恵（五代）の甥で六代を相続した。延享三年没。	通称勘兵衛また源助。天明八年大火により高倉二条上ルに転居した。宝暦二年没。	通称源蔵・源助。道恵（七代）の甥で八代を相続した。安永九年没。	宝暦八年生まれ。通称藤蔵・源助。天保五年没。久田春斎好「水月蒔絵盃」が現存。	

篠屋治兵衛 ささやじへえ	京都の塗物問屋で新町三条上ル二丁目に店を構えた。丹波篠山の出。長崎螺鈿の製造にも行っていた。
佐々木高保（三代） ささきたかやす	弘化二年高治の子に生まれる。通称弥三郎、字は子長、堂号は永福堂。明治四年、東京に移り三宅利右衛門方に寄寓して大嘗会の御用品を製作。明治六年には白銀町一丁目に居を構える。宮内省御用を勤め、明治天皇の御馬車や皇后御手道具などを製作。コロソブス万国博覧会・京都記念博覧会などに出品。日本漆工会設立。発起人の一人で、明治三十五年日本漆工会で御前制作をした。日本橋本石一丁目二十三番地に住。昭和四年に没し、真盛寺に葬。日れる。四季草花蒔絵棚（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）などが現存する。
佐々木高治（二代） ささきたかはる	文化十二年生まれ幼名音松。長じて和七郎高治と称す。京都上京間之町夷川上ル楠町に住。文久元年和宮御手道具を製作。また文久三年に上洛した徳川家茂が孝明天皇に献じた「二十四孝蒔絵鞍鐙」に鞭のみがなかったため、高治に制作を命じられ、「二十四孝蒔絵鞭」を謹製した。のち先に東京に移った子の高保方に身を寄せて悠々自適に過ごし、明治二十一年に没す。本所の真盛寺に葬られる。
佐々木幸助（初代） ささきこうすけ	明和年間に伊勢屋吉田六兵衛に就いて蒔絵を学び、六兵衛に子になかったため、伊勢屋の屋号を継承した。御所の御納戸用達、三宅利右衛門を通じて御所の用度を調達する。御所の御納戸用達、三
	▽佐々木家は宇多源氏六角佐々木家より出る。京都に出て蒔絵師となり、代々伊勢屋を称して御所の御用品を制作した。明治の佐々木高保は東京に移り、宮内省御用を勤めたことで知られる。
桜井芳蛾 さくらいほうが	通称満吉、号が太子芳蛾。藤網代の名手のして知られ、藤網代煙管筒を製作。一八九〇年代の美術展覧会に出品。また明治三十三年パリ万国博覧会出品。
斎藤芳次郎 さいとうよしじろう	東京下金杉村住、第一回内国勸業博覧会・パリ万国博覧会出品。
斎藤仙吉 さいとうせんきち	幕末・明治の蒔絵師。印籠・櫛・盃・香箱などの作品が多い。銘は「斎藤」に朱書きによる「仙吉」の方形印。
権兵衛 ごんべえ	貞享頃の堆朱楊成の門人。堆朱家の手控に名がある。
近藤道恵（十一代） こんどうどうえ	通称彦六郎。維新後壮年で没し、後継はなかった。
近藤道恵（十代） こんどうどうえ	通称藤蔵また源助。道恵（九代）の養子。明治元年没。
氏名	事蹟

氏名	佐野長寛 さのちようかん	佐野秀太郎 さのしゅうたろう	貞篤 さだあつ	澤田宗澤斎（初代） さわだそうたくさい	澤田宗澤（二代） さわだそうたく		澤山孫四郎（初代） さわやまごしろう	澤山孫四郎（二代） さわやまごしろう	澤山孫四郎（三代） さわやまごしろう	澤山得四郎（四代） さわやまごしろう	杉源斎 さいげんさい
事蹟	幕末の京都の塗蒔絵師。佐野源左衛門常世の末裔で、代々近江浅井郡小谷村に住んだが、三代前に京都に出て長濱屋治兵衛の次男として新町三条上ルに生まれ、通称治助。二十一歳で父の死により家名を継ぎ、翌年から諸国の漆工を歴訪した。文政五年帰京し、再び新町三条上ルに居を構えて開業。世人に高麗の名工張寛の再来と評され、長寛と号し、名を長次とした。奇行が多く表札に「長寛・長次どちらでもよし」と掲げ、断髪して鬢髪を剃らず弊衣を纏い、意匠に合わない仕事には応じなかつたという。安政三年没。作品は茶道具・家具・膳碗など、古漆器や地方漆器、陶画を写し、意匠を凝らす。多作で同じ意匠のものも多くあるが、必ず図や技法を異にしている。作品には銘が入らず、「漆匠／長寛造」の上作とするが、殆どの作品には銘が朱漆銘や蒔絵銘があるものが多い。数点に長次銘も見られる。箱書には和歌や賛を加えたものが多	佐野長寛の子で文政六年生まれ、業を継いだが二年後の安政五年に三十六歳の若さで歿した。また長寛は、人と交わらなかつたが、永楽保全とだけは親しく、後に別家して西村宗三郎を称した。養子に入って回全と号し、後に別家して西村宗三郎を称した。明治九年に没した。	江戸末期の江戸の印籠蒔絵師。安政年間の印籠が現存する。是真風。の作品があり、当時の蒔絵師。人気を受けての印籠ものと考えられる。	天保元年生まれ、通称弥次郎、宗澤斎と号した。蒔絵を梅田三内省後用品となるものも多い。明治十九年隠居し、宗次と改め二代作に譲る。大正四年没。高蒔絵の高上げを一度で行う技法を発明し、緻密で豪華な高蒔絵を得意とした。	澤田宗澤斎（初代）の長男。幼名良太郎、明治十九年に相続し、名を次作に改め宗澤を号した。幼名良太郎、明治十九年に相続し、	▽澤山家は幕府の御作事方支配の御塗蒔絵師棟梁で、宝暦年間より明治維新まで続いた。	宝暦年間より小普請方支配塗蒔絵師箔押御用を勤める。寛政度日光東照宮修復御用を勤めた。	文化頃に御用を勤めた。	文政頃に御用を勤めた。	天保四年塗師方見習となり、同十年相続。	江戸末期の印籠蒔絵師。「菊蒔絵印籠（東京国立博物館蔵）」ほか一点が現存する。

氏名	事蹟
塩見甚之助 しおみじんのすけ	江戸末期の京都の蒔絵師。嘉永元年に彦根藩主井伊家の注文で兼業しており、江戸の塩見小兵衛とは別に京都にも別家した塩見家が存在していたと考えられる。
塩見一鳳斎 しおみいつぼうさい	江戸末期の蒔絵師と推測される。「南天尾長鶏蒔絵硯箱（ハリリ・コレクション）」と「鳴子雀蒔絵櫛（大阪市立美術館蔵）」とが現存し、筆跡が共通している。作風から江戸末期の江戸の塩見家の作品と考えられる。
塩見小兵衛 しおみこへい	江戸後期の江戸の蒔絵師。通称小兵衛。京都の塩見政誠の後裔。江戸千家川上白好の「鶏頭蒔絵棗」や、漆絵の盃類が現存している。
塩見友治 しおみゆうじ	通称小兵衛。「蒔絵大全」によれば、塩見政誠の二代目であると伝えられる。
塩見政誠 しおみまさなり	江戸中期の京都の印籠蒔絵師。「装剣奇賞」の「印籠工名譜」にも挙げられている。正保三年生まれで、通称小兵衛。京都新町一条あたりに住んでいる。研出蒔絵にすぎれ、後世その作を塩見蒔絵と称した。国学に通じ、和歌を詠み、絵画もよくし、殊に牛を描くことが得意であったという。享保八年に没したと考えられる。「比良山蒔絵硯箱（東京国立博物館蔵）」や、多くの印籠が現存。印籠銘の多くは紐通部に「監見政誠」と朱漆で印形に入るが、晩年作の一部には蓋裏に行年銘も加えたものがある。「装剣奇賞」によれば子孫が江戸四谷に住んで業を継いだという。
塩見春政 しおみはるまさ	「装剣奇賞」の「印籠工名譜」に京都の人で塩見政誠の父として記載される。一説に塩見政誠は山本春正の一派といわれており、父の名を春政とするのは、この説を首肯させる。塩見春政在銘の印籠が数点現存するが、真贋を并じ難い。その活躍年代から考えれば慶安「寛文期」となり、在銘作品の存在そのものも疑問である。
塩原庄二郎 しいはらしょうじろう	江戸後期の印籠蒔絵師。椎原藤蔵の後代で寛政・文化頃の人。幼名亀之丞。金沢袋町住。六十歳で没した。
塩原市之丞 しいはらいちのじょう	江戸中期の印籠蒔絵師。椎原友之進の弟で下提町に住んだ。
塩原友之進 しいはらともしのしん	江戸中期の印籠蒔絵師。椎原市太夫の次子で金沢鍛冶町に住んだ。
塩原藤蔵 しいはらとうぞう	江戸中期の印籠蒔絵師。椎原市太夫の長子で藤蔵と称し、後市太夫を襲名した。
塩原市太夫 しいはらいちだゆう	加賀の伝説的印籠蒔絵師。清水源四郎の高弟で、加賀藩主前田綱紀に招聘されて金沢桶町に住む。享保十二年に藩主前田吉徳の兜の吹返に「昇り龍」の蒔絵を行っており現存している。当時の身分は国許の「町方御細工者」であった。「装剣奇賞」印籠工名譜には蒔絵師市太夫として記載される。印籠の名工として聞こえ、印籠と香合は幕府・諸侯への進物にされたと伝えられる。在銘を見ず、献上・贈答品でもあり、無銘であったと考えられる。在銘を

氏名	塩見政景 しおみまさかげ	塩見政陰 しおみまさかげ	塩見正重 しおみまさしげ	塩見政綱 しおみまさつな	塩見政春 しおみまさはる	茂矩 しげのり	重栄 しげひで	重光 しげみつ	自徳 じとく	芝川又右衛門 しばかわまたえもんまたえもん	柴田勘左衛門 しばたかんざえもん	柴田是真 しばたげしん
事蹟	未詳。在銘の印籠があり。塩見政誠の後代と考えられる。	未詳。在銘の印籠があり。塩見政誠の後代と考えられる。	紀伊徳川家伝来の無銘山内國綱の短刀に附属の合口拵に蒔絵を施す。	未詳。在銘の印籠があり。塩見政誠の後代と考えられる。	未詳。在銘の印籠があり。塩見政誠の後代と考えられる。	江戸末期、京都の印籠蒔絵師。銘は花押の添えたものと、朱漆による「茂矩」の方形印を添えたものがある。	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。作品は印籠がほとんどだが「波千鳥蒔絵琴」もある。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠師。堆朱印籠を得意とし、象嵌蒔絵の作品もある。銘は堆朱板を一字ずつ象嵌する。	文政六年に生まれ、幼少より蒔絵を学ぶ。蒔絵を廃業して窯業を営み、大阪で貿易商となる。明治二十三年、住友吉左衛門とともに日本蒔絵合資会社を設立、また芝川漆器合名会社を設立、紙製漆器などを開発した。大正元年没。	越後進発田に住み、蒔絵を業とし、藩主溝口家の召工である。	幕末・明治の印籠蒔絵師。文化四年、江戸両国に宮彫師市五郎の子に生まれ、幼名亀太郎、後に通称を順蔵とした。十一歳で古満寛哉（初代）に入門、十六歳で鈴木南嶺に画を学んで、名を是も真、字を檀然、令哉と号した。また京都に上がって岡本豊彦にも画を習い、頼山陽・香川景樹とも交わった。京都から帰り、神田川をはさんで柳原の対岸の浅草上平右衛門町に居を移したので、青對柳居とも号した。画人として、次いで漆工として名をなす。青海勤七以来絶えていた青海塗りを復興し、紫檀塗・青銅塗を発明し、漆絵を好んで用いた。明治六年のウイーン万国博覧会に「富士田子の浦蒔絵額面」を出品して進歩賞牌を受賞。明治二十三年、帝室技芸員となる。令哉・真哉・隆真三人の子の他に、多くの門人を育成し、絵画では鈴木弘真・築山清真・福島柳真・高橋翠岳・吉村嶋女・田中如真・大西椿平・庄司竹真・池田綾岡（有真・井草仙真）二代歌川国芳（森本君所・山形素真・松野應真・榎本筑後・幸阿弥伊勢・梶川鉦太郎・栗本信濃・奈良土佐らが輩出し、是真の住所から石切川岸派と呼ばれた。

氏名	芝山易政（初代） しばやますまさ	柴沼芝路 しばぬましげみち	柴沼秀亀齋 しばぬましゅうきさい	柴田藤兵衛 しばたとうべえ	柴田敬哉 しばたけいさい	柴田成真 しばたせいしん	柴田真哉 しばたしんさい	柴田令哉 しばたれいさい
事蹟	芝山象嵌の祖。本姓は小野木、通称が専蔵、名は易政。安政四年、下総國芝山村の農家、小野木文左衛門の子の生まれる。江戸に出、三田の幕府用達の小間物商に奉公に上がり、諸藩邸の奥向に出入りする。三十二、三歳の時に鶴岡八幡宮の政子の手箱を見て、木櫛に螺刻を象嵌することを考案する。夜中に自ら制作して、出身地の「芝山」を銘したもの、完成し、販売して評判となり、ついに小間物商を辞して、螺細・象嵌工となった。根岸大塚に閑居。某諸侯より將軍家へ献上の桐鳳凰図の硯屏と鴛鴦図の料紙硯箱を制作した。天保七年に没し、芝光寺に葬られる。	明治の蒔絵師。天保元年生まれ。通称長五郎。号が芝路。父柴沼秀亀齋に蒔絵を習い引き続き、大奥用達小山半兵衛の用品、婚礼道具類を制作した。特に人物の高蒔絵に長ず。木挽町九丁目十五番地住。製作した。	江戸後期の道具蒔絵師。通称鐵五郎、号が秀亀齋。神田鍛冶町に住んで、大奥用達小山半兵衛の用品、婚礼道具類を制作した。文久二年没。	江戸後期、京都の道具蒔絵師。本姓柴田、屋号が菱屋、通称藤兵衛。東本願寺に出入りした。	柴田令哉の次男。父令哉に模を学び、敬哉と号した。「古満」印を使用。文房具・茶道具が現存。	柴田令哉の長男。通称市太郎。父令哉と池田泰真に蒔絵を学び、庄司竹真に画を学んで、成真と号した。	柴田是真の次男。安政五年、是真と二番目の妻鈴木歌子の間に生まれる。通称慎二郎。父是真、池田泰真に蒔絵を学ぶ。また土佐の天文・山名貫義に絵画を、黒川真頼に国学を学んだ。幼くしてその天分を発揮し、第一回内国勸業博覧会で、画と蒔絵額を出品して花紋賞牌を受賞した。母方の叔母、真瀬木タイの養子となり、後で活躍した。兄令哉の母方の叔母、真瀬木タイの養子となり、後池田泰真の養子ともなるが、いづれも離縁。明治二十八年、三十八歳の若さで自刃した。芸術上の悩みが原因といわれている。	柴田是真の長男。嘉永三年に生まれ、通称亀太郎。父是真に蒔絵を学び令哉と号した。龍池会の創設に尽力。第一回内国勸業博覧会で鳳紋賞牌、第三回内国勸業博覧会で妙技二等賞を受けた。日本漆工会設立の発起人で商議員となる。「日本漆工会雑誌」には本漆工会が模写した「漆器図録」として再編集して刊行された。日本美術が、没後に「漆器図録」として再編集して刊行された。日本美術協会審査顧問。父是真の没後も上平右衛門町十一番地の家に住んだ。大正四年没。父是真の没後も上平右衛門町十一番地の家に住んだ。

氏名	壽鶴斎英舟 じゅかくさいえいしゅう	江戸後期の蒔絵師。数点の盃が現存。銘は「壽鶴斎／英舟作」または「英舟斎」。
	重閑 じゅうかん	江戸後期の塗師。飛来一閑の子孫と考えられる。
	秀岳斎 しゅうがくさい	越後新発田藩主溝口家伝来の「乾山菊蒔絵盃」がある。また明治二十七年の美術展覧会に額が出品されている。
	秋栄斎 しゅうえいさい	江戸後期の印籠蒔絵師。作風から寛政頃の蒔絵師と推測される。「秋栄斎」・「秋栄斎友山」と銘した。
	清水忠左衛門 しみずちゅうざえもん	代々加賀藩の蒔絵工で禄を受ける。金沢横堤町住。
	清水嘉門 しみずかもん	幕末・明治の金沢の蒔絵師。文化十三年生まれ。清水九兵衛の末裔で、通称九兵衛、嘉門と号した。金沢五宝町住。謡曲に堪能と伝えられる。明治十八年没。
	島野三秋 しまのさんしゅう	明治十年金沢で画家島村啓明の長男に生まれ、本名新太郎。塗を鶴田和三郎、蒔絵を松岡吉平に学ぶ。明治三十八年大阪に移住し山中紹介美術貿易部に勤める。帝室無鑑査。彩漆蒔絵や是真の青海波塗を研究、また客船の内装飾に携わった。歌人としても知られる。昭和四十年没。銘は「三秋」・「三秋斎」などとする。
	渋谷重義 しぶやしげよし	江戸後期の京都の蒔絵師。塩見政景との合作の琴がある。
	芝山総明 しばやまふさあき	明治の芝山象嵌工。芝山の末流とされる。「花丸螺細印籠（東京国立博物館蔵）」が現存。
	芝山政明 しばやままさあき	明治の芝山象嵌工。芝山易政（三代）の門人で、通称栄蔵、号が政明。
事蹟	芝山宗明 しばやまむねあき	明治の芝山象嵌工。芝山宗一の門人で、通称吉之助、号が宗明。「宗明」の象嵌銘とする。
	芝山宗一 しばやまそういち	文化八年生まれ。通称惣七また宗七。芝山易政（二代）に学んで号を宗一。第二回内国勸業博覧会で妙技三等を受けた。東京北豊島郡金杉村二百八十番地。明治二十九年没。輸出品に在銘を多く見る。
	芝山易政（四代） しばやまやすまさ	慶応元年牛込大久保の田川民五郎の次男に生まれ通称初太郎、のち専蔵。浅草区旅籠町二丁目六番地中代地に住。明治三十年、第二回水産博覧会に出品。
	芝山易政（三代） しばやまやすまさ	芝山易政（二代）の子で天保元年生まれ。通称徳太郎のち専蔵。真凌斎と号した。明治十年内国勸業博覧会で花紋賞を受ける。根岸大塚、京橋下槇町、浅草区旅籠町二丁目六番地に住。明治二十年没。「真凌斎」の象嵌銘の作品がある。
	芝山易政（二代） しばやまやすまさ	初代専蔵は妻を娶ったが、子がなかったため、妻の甥を養子として後を継いだ。これが二代である。根岸大塚住。銘は「芝山易政作」の象嵌銘が多い。

[illegible]

氏名	出羊齋 しゅつようさい	壽豊 じゅほう	春華齋 しゅんかさい	春壽齋 しゅんじゅさい	春松齋 しゅんしょうさい	松栄齋 しょうえいさい	勝花齋 しょうかさい	松花齋得城 しょうかさいとくじょう	昇極齋 しょうきよくさい	柰齋 しょうさい	庄司竹真 しょうじちくしん	庄司芳真 しょうじほうしん	松壽齋常政 しょうじゅさいつねまさ	松肖齋 しょうしょうさい	松正齋 しょうせいさい	松肖齋 しょうしょうさい
事蹟	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。在銘の印籠と盃が現存。素竜齋の下絵銘がある。「雪月花蒔絵三組盃」も現存。銘は「出羊齋」で朱漆書方形印を伴うものも多い。	江戸末期の印籠蒔絵師。	江戸末期の印籠蒔絵師。江戸の人。印籠と盃が現存。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	「桃山鵲蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」一点のみが現存。作風から江戸後期の江戸の印籠蒔絵師と推測される。	明治の印籠蒔絵師。未詳。金粉溜地小判印の印籠が多い。銘は「松花齋得城」もしくは「得城」と大書する。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。江戸の人と推測される。	近代の画家。弘化二年生まれ。通称が興四郎、竹真・可寛齋と号した。柳原町二丁目に住。柴田是真の画の門人であるが、蒔絵作品も僅かにある。また後年、多くの是真作品の鑑定を行っている。昭和十一年没。	明治三十二年生まれ。蒔絵を梅澤隆真、絵を父庄司竹真に学ぶ。帝展出品。多くの是真作品の鑑定を行っている。是真風の蒔絵作品が現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸の御小屋系の蒔絵師で数点の盃が現存する。	江戸末期の印籠蒔絵師。	「波鷹蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」一点のみが現存。作風から江戸後期の江戸の印籠蒔絵師と推測される。	江戸末期の印籠蒔絵師。

氏名	常川 じょうせん	常扇 じょうせん	庄兵衛 しょうへい	松茂齋 しょうもさい	松茂齋正光 しょうもさいまさみつ	常勇齋 じょうゆうさい	常立齋 じょうりゅうさい	恣隣齋 しよりんさい	恣林齋 しよりんさい	如嬰齋 じょえいさい	昇龍齋光玉 しょうりゅうざいこうぎよく
事蹟	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	貞享頃の堆朱楊成の門人。堆朱家の手控に名がある。	江戸末期の蒔絵師。多くは商品として販売され、諸大名家にも多数伝世する。	江戸末期の印籠蒔絵師。印籠と盃の作品が多く現存。	幕末・明治の印籠蒔絵師。	江戸後期の印籠蒔絵師。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。銘には花押・壺印を添える。	江戸末期の印籠蒔絵師。白井可交齋の門人と推測される。「恣林齋」で壺印を添えたものもある。	「松鷹蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」一点のみが現存。作風から江戸後期の印籠蒔絵師と推測される。	江戸後期から明治初年に江戸で活躍した印籠蒔絵師。通称金次郎、東海居・明堂居士・昇龍齋・一抱齋・光玉などと号した。はじめ廣三なる印籠蒔絵師に就くが、よく出来た印籠を石に投げつけられたため、名工になるうと神に願いをかけて修業して耳が遠くなり、蒔絵師の間では「聾の金次郎」・「ツン金」と呼ばれる。羊遊齋工房で直接教えた岩崎交玉と二人で残りの四歳の養子原更山。後も工房で閉鎖後、幕末の蒔絵仕手頭田邊源助宅に寄寓し、を支えた。工芸美術の発展に貢献。後進の育成にもあたったため、当時幕府御小屋の作業に従事。後進の育成にもあたったため、当時神田で育った蒔絵師で、ツン金と重傑（梶山明細）の息のかからぬ者はいないとさえいわれ、仕事は梶山明細の先輩であったが、起立工商会社に岩崎交玉の指揮で働く。明治十年代に岩崎交玉宅で没したと推測される。多くが他の蒔絵師の下職であったが、在宅の印籠・櫛が現存。「五虎將軍蒔絵印籠」は現存唯一の「東海居明光玉（花押）」銘である。また酒井抱一下絵で「昇龍齋光玉」銘の作品は五例に及ぶ。これらが羊遊齋銘の作風と全く同一であるのも銘字の筆跡が近いことも当然である。

氏名	白井可交齋 しらいかこうさい	可交齋忞理 かこうさいしやうり	白井松花齋 しらいしょうかさい	白井松花齋刑部 しらいしょうかさいぎやうぶ	白瀬勘十郎 しらせかんじゅうろう	白山松哉 しやましようさい	シロゾウ
事蹟	通称忞五郎。別号忞山・忞理。徳川將軍家の印籠蒔絵師。梶川家の門に連なる者と推測される。印籠・根付・盃の作品が多く現存する。彦根藩主井伊家伝来の「不忍池蒔絵盃」彦根城博物館蔵。「」は、文化八年に將軍家から拝領したもので、その活躍は文 化から安政と推測される。「可交齋忞理」銘も花押が同じである ことから同人と推測され、「可交齋忞理」筆跡が異なり別人で一門 と思われる。銘は「可交齋」もしくは「忞山」が多く、花押を据 えたものも多い。印籠の最上作には「白井」もしくは「松山」の 朱漆の壺形印が入る。越前福井藩主松平家伝来の「千羽鶴蒔絵印 籠」福井市立郷土歴史博物館蔵。「」にも「白忞山」の銘に印が添 えられている。明治「昭和の偽作が多いが正真作は緻密な優品で 出来に格段の相違がある。	白井可交齋忞山の一門と推測される。数点の印籠が現存。	明治の蒔絵師。通称、猪十郎、号が松花齋。安政二年生まれ。東 京浅草福富町二十四番地住。鹿島一峯齋の門人。大関弥兵衛の囑 品を製した。	幕末の印籠蒔絵師。本名は白井徳次郎。江戸住。田中松花齋の 師。金粉溜地小判形高蒔絵の印籠が多い。銘は「松花齋刑部」と 大書する。	越後新発田に住み、蒔絵を業とし、文化年間藩主溝口家に召抱え られる。	茶、道具の十九年帝室技芸員となり、大正十二年に没した。印籠・ 授、同三十九年帝室技芸員となり、大正十二年に没した。印籠・ 風、傑作を納めた。明治三十三、三十四、三十五年パリ万国博覧会に「雁来紅蒔絵屏 の傑作を納めた。明治三十三、三十四、三十五年パリ万国博覧会に「雁来紅蒔絵屏 ン」を納めた。明治三十三、三十四、三十五年パリ万国博覧会に「雁来紅蒔絵屏 蔵」五円。秋草蒔絵菓子器（M・O・A美術館蔵）を「コレクショ 費」二十五円。明治三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十 も人気がある。明治三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十 尾卓郎の発案によつて制作され、根細な研出蒔絵は松哉作品で最 作品であつたと伝えられる。羽根太鼓判を押したのが白山松哉の の作品を評して古製にも勝つたと太鼓判を押したのが白山松哉の うに当時の作品は無銘であつたが、柴田是真が無銘起立工商会社 会社の工人となる。「羽根太鼓判」東京国立博物館蔵。「」のよ 社の彫漆・螺鈿を蒲生盛和に、析倉豊次郎に塗を学ぶ。起立工商 業、彫漆・螺鈿を蒲生盛和に、析倉豊次郎に塗を学ぶ。起立工商 るが程なく孤児となる。明治三年、旗本細野十郎左衛門の子に生ま 近代の印籠蒔絵師。嘉永六年、旗本細野十郎左衛門の子に生ま 近	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸麴町に住。原羊遊哉下職の名人と伝 えられる。幕府の塗師方棟梁鈴木兼重に、家宝として孔雀蒔絵の 印籠を制作するよう依頼され、上野山下の孔雀茶屋に毎日通つ て写生し完成させた。と頼まれ、後で兼重が自分の銘を入れさせた ので、怒つて鈴木の家に入りしなく、兼重が自分の銘を入れさせた の

鈴木伊賀	国名伊賀。諱が兼重。文政六年、將軍世子家慶の命により狩野伊川院下絵で「老松富士蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」を製作。狩野養信の「公用日記」に記述されている。銘は「鈴木兼重（花押）」とする。
鈴木近江	通称金十郎、国名が近江。文化武鑑まで見られる。
鈴木弥次兵衛	享保元年に「御役塗由緒書」を提出。
鈴木弥左衛門	通称弥左衛門、諱が正之。元禄二年に日光東照宮修復御用を勤めた。江戸神田鍋町から永徳町四丁目、皆川町二丁目と転居した。
鈴木弥左衛門	通称弥左衛門、諱が正備。延宝八年に巖有院廟の蒔絵に参加。
	▽鈴木家は幸阿弥・菱田・奈良・両栗本・榎本・太田と共に江戸開府以来、代々塗物蒔絵御用を勤めた家。幕末まで五十俵二人扶持を給された。神田鍋町から永徳町四丁目と転居し、神田皆川町二丁目に代々居住した。弥次兵衛、近江、金十郎・伊賀・佐渡と続き、壱岐で維新となった。系図由緒書が現存せず詳細は不明。
杉林古香	近代京都の蒔絵作家。浅野友七（二代）の四男で明治十四年に生まれ、本名浅野喜次郎。明治三十三年に京と美術学校を卒業し、東京で川之邊一朝に師事。帰京して杉林家の養子となる。明治三十九年浅井忠の指導のもと京漆園を結成、競美会に参加。大正二年没。
菅沼古隣	明治の蒔絵師。通称芳太郎。本所区本町十四番地住。櫛が現存する。
甚吉	江戸末期、出羽庄内の鞘塗師。奇行を好み「仙人甚吉」と呼ばれる。西島に住み赤貧であったが、氣の向かない日は仕事をせず、石台に水をたたえて生きた沢蟹、小海老に蒔絵を施したという。漆と木の性質を調べ、木地によって漆液を分け、完成に時間を費やした。ある時藩の注文に数年経っても完成せず、ついに閉門に処せられたこともあったという。
翠竹軒	幕末・明治の印籠蒔絵師と考えられる。東流斎と印が同じであり、関連があると考えられる。
真龍斎	幕末・明治の印籠蒔絵師。
真立斎	幕末・明治の印籠蒔絵師。
真川	江戸後期、京都の印籠蒔絵師。
真好斎	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。
氏名	事蹟

鈴木晋江 すずきしんこう	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。作品から明治末と推測される。
鈴木如光斎 すずきじょこうさい	明治の蒔絵師。通称富蔵、如光斎と号する。本所区外手町十四番地住。櫛が現存。
鈴木古巖 すずきこがん	幕末・明治の蒔絵師。文化九年生まれ。江戸和泉町に住した橋原文斎のもとで一年修業し、二十歳の時、両国富士白町に開業した。内国勸業博覧会で花紋賞牌を受賞。パリ万国博覧会出品。印籠・茶器をはじめ、蒔絵物全般を制作した。北本所番場町十六番地住。在銘の印籠が現存し「古巖」二字銘となる。
鈴木貞親（五代） すずきさだちか	明治時代、橋本市蔵と並び称された鞘塗師。嘉永元年生まれで、通称が嘉助または嘉輔、諱が貞親。父鈴木嘉助嘉貞について鞘塗を修業、父嘉貞が発明した浅黄蠟色塗も明治初年にはかなり改良されたという。起立工商会社に勤め、明治六年、ウイン万国博覧会、同九年のフィラデルフィア万国博覧会に出品。翌年第一回内国博覧会で花紋賞牌受賞。明治三十四年「蠟色内梨子地書棚」が第五回漆工競技会で銀賞となる。浅草新片町三番地に住。大正十四年没。フィラデルフィア万国博覧会に出品された「四季草花蒔絵堆朱小筆筒（フィラデルフィア美術館蔵）」の扉内には浅黄蠟色と白漆による鮮やかな富士山が描かれている。これは鈴木貞親の手になるものである。在銘の櫛や香合・小印籠などが現存する。銘は「貞親」二字銘。
鈴木嘉貞（四代） すずきよしさだ	通称嘉助、諱が嘉貞。天保十一年、松江藩主松平直亮のために浅黄蠟色塗を発明し、大小拵に塗って珍重される。明治元年没。
	▽鈴木嘉助家は代々江戸で鞘塗師を業とし嘉助を通称した。明治時代に、橋本市蔵と並び称された鈴木貞親を輩出した。
鈴木美作 すずきみまさか	通称平五郎。国名美作。慶應年間の当主。南伝馬町一丁目から日本橋久松町に移った。また十人扶持を給された。
鈴木徳兵衛 すずきとくへい	天保から安政頃の当主。三人扶持を給される。
鈴木助十郎 すずきすけじゅうろう	寛政年間から武鑑に登場する。江戸南伝馬町一丁目住。
	▽鈴木助十郎家は代々幕府の作事支配塗師蒔絵師棟梁を勤めた。
鈴木壺岐 すずきいぎ	慶応武鑑にその名がある。
鈴木佐渡 すずきさど	弘化元年、本丸御道具新規仕立御用を勤めた。
氏名	事蹟

氏名	鈴木東谷 すずきとうこく	鈴木政義 すずきまさよし	巢野不幽 すのふゆう	青海勘七 せいがいかんしち	静観斎 せいかんさい	青春斎篤義 せいしゅんさいあつよし	青稚堂幸保 せいちどうゆきやす	清兵衛 せいべえ	青峰 せいほう
事蹟	明治の根付師。弘化二年生まれ。通称鐵五郎。東谷・梅龍・普随と号した。浅草馬道町四丁目五番地住。大正二年没とされる。管筒・根付が多く現存、印籠の作品として、「羅漢象嵌印籠」・「桜井楠公象嵌印籠」が現存する。	「装剣奇賞」に記載される江戸中期の印籠蒔絵師。通称庄左衛門。京都烏丸上立売南入町に住んだ。一本によれば正義は敬神家と伝えられる。ある夜夢に富士山を見た正義は、自らの技術が頂上に達した神のお告げであると、上御霊神社絵馬所に富士山の研究蒔絵印籠を貼り付け、馬を奉納した。その銘文には「宝暦十年辰年林鐘吉日／御蒔絵師／願主鈴木庄左衛門制作之／正義（正義）一とある。当時五十歳代で、程なく没したと伝えられ、活躍は享保から宝暦頃であろう。また御蒔絵師と自署しているところを見る、御所の御用を勤めたと考えられる。	江戸中期の印籠蒔絵師。本名木村重春、通称甚右衛門。江戸狩野十旭（木村建元）の弟ともいわれる。「装剣奇賞」所載の印であるが作品は確認できない。また「巢野不幽三世次重」銘の印籠が現存する。	元禄頃の名工。青海波の漆絵を得意とし、青海を姓とした。英一蝶・横谷宗眠・榎本其角・紀文らと常に花柳に出入りした。後津輕藩の召に応じ、津輕に移ったという。徳川光圀所用、「青海波塗蒔絵硯箱」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）の他、数点の硯箱や上田藩主松平家伝来「波千鳥蒔絵乱箱・香盆」などがある。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。青春斎もしくは酒遊斎と号す。在銘の印籠が数点現存。銘には花押を添える。	江戸末期の印籠蒔絵師。文久二年、福井藩士中根雪江が尾張藩主徳川慶勝から贈られた「堅田落雁蒔絵印籠」（福井市郷土歴史博物館蔵）にこの銘がある。	「装剣奇賞」所載の印籠工。大阪伏見町に住した石工だが、印籠の上手であり、当時「清兵衛のバラ印籠」と称して評判だった。「バラ印籠」とは段の表裏・上下をかえても合口があうというものという。宝永頃幕府に召し出されたが、途中箱根で病没した。	江戸後期の印籠蒔絵師。「諫鼓鶏蒔絵印籠」（静嘉堂文庫美術館蔵）一点のみが現存。

氏名	関啓次郎（九代）	関兵庫（八代）	関大隅（七代）	関数馬（六代）	関数馬（五代）	関数馬（四代）	関数馬（三代）	関若狭（二代）	関嘉右衛門（初代）	事蹟
	文政六年、養父跡職を相続。御目見。上野御宮修復御用。盛姫君様御引移御用。文姫様御引移御用。喜代姫様御引移御用。安政五年没。	寛政二年に御用見習となり相続。裕宮御下向御待請御用。淑姫君様御入興御用。峯姫君様御引移御用。浅姫君様御引移御用。た。文政六年隠居。同九年没。	安永二年、養父の跡職を相続。翌年大納言様鞍修復御用を勤め、御部屋様諸色道具、上野紅葉山・修復御用・種姫君様新道具御用・進献御太刀箱御用、彰君御方御下向御待請御用・裕姫君様勤めた。天明二年、御台様表道具御用・淑姫君様御入興御用などを政十一年没。	延享元年相続、大納言様鞍木地塗蒔絵御用を製作。寛延元年、朝鮮王国へ献上の「桜蒔絵鞍鐙」を狩野探常下絵で製作。入興道具・御産御用。安永六年没。	元禄十四年、部屋住で御目見。享保三年相続。享保十二年、御入興御道具製作。寛永元年隠居。宝暦五年没。	元禄三年に相続。御目見献上物をし、享保三年朝鮮王国へ献上の鞍鐙製作。同年隠居。翌年没。	寛文五年、部屋住の時に御目見。献上物あり。同六年相続。同十二年、常帯刀停止となる。天和二年將軍家より朝鮮王国へ献上の鞍鐙に蒔絵。元禄三年隠居、同年没。	寛永五年相続。承応二年古作鞍鐙蒔絵御用を勤め、褒美として熨斗目・自服白銀頂戴。寛文六年隠居。同七年没。	遠江方城主天方豊後守の三男に生まれる。慶長十八年徳川家康の鞍鐙作塗御用を勤め御紋付馬柄杓を献上。寛永五年隠居。同七年没。	▽関家は代々徳川將軍家の御細工頭支配（慶応二年から御納戸頭支配）御鞍鐙塗蒔絵師。拝領町屋敷は天明二年から中橋富樫町百二十坪余、文久三年から浅草諏訪町で三百二十坪余。代々の仕来りとして、年始元旦の御扇子献上御目見、五節句八朔歳暮月次御目見、御代替將軍宣下の節に御紋付御馬柄杓献上、帷子着用、御入興の節に黒塗御紋付唐草蒔絵裏献上、熨斗目・白帷子着用、非常旅行の節に帯刀。武家の表道具に限られたことである。礼装も格が高く、また馬柄杓献上はこの家に限られたことである。

氏名	千太郎 せんたろう	江戸末期の塗師。幕府の御蒔絵師鈴木佐渡・栗本長之助の塗師を勤めた。
	千太郎 せんたろう	江戸後期の印籠蒔絵師。古満巨柳の門人。未詳。
	千鶴斎 せんかくさい	江戸後期の蒔絵師。狩野守道下絵の「松竹梅鶴蝶蒔絵刀掛」(福岡市博物館蔵)がある。同名で筆跡の異なる千鶴斎が数種類あり、幕末まで数代存在するものと考えられる。いずれも御小屋系の蒔絵師である。
	雪船斎 せつせんさい	江戸末期の印籠蒔絵師。数点の印籠・盃が現存。御小屋系の蒔絵師。
	雪湖斎 せつこさい	明治期の蒔絵師。筆筥・香棚などが数点現存する。
	石山 せきざん	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。
	関口珠峯 せきぐちじゅほう	近代東京の蒔絵師。本名常吉、珠峯と号した。本郷区菊坂町住。
	関川勝信 せきかわかつのぶ	江戸後期の印籠蒔絵師。飯塚桃葉(初代)と同図の印籠もあり、同時代人と思われる。研出蒔絵を得意とした。
	関良和 せきよしかず	明治初年。東京の蒔絵師。安政四年、関陸遊斎の子に生まれる。通称和之吉、名が良和。父に師事し、十九歳で相続。明治十六年文部省の命で蒔絵硯箱を製作した。京橋銀座四丁目十三番地住。
	関陸遊斎 せきりくゆうさい	江戸末期の蒔絵師。通称庄次郎。諸侯の婚礼調度の蒔絵を専門とした江戸の道具蒔絵師。門弟多数。
	関尚孝 せきなおたか	江戸後期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が数点現存。
	関平十郎(十二代) せきへいじゅうろう	天保十二年生まれ、慶応二年御用見習となる、翌年養父跡職。扶持方を相続。
	関大隅(十一代) せきおおすみ	天保九年養父跡職相続。御紋付馬柄杓献上、御目見。泰姫君様御引移御用・御紋付唐草蒔絵棗を献上、東明宮御方下向御用・精姫君様御引移御用・西丸奥表御道具新君御方下向御待請御用・線姫君様御引移御新規御道具御用・篤君御方下向御待請御婚下御用・御縁組和宮様下向御待請御用など勤めた。弘化四年出精につき三人扶持一生下し置かれる。文久三年、中橋富楨町百二十坪余と浅草諏訪町三百三十坪余を相對替とする。慶応二年御納戸頭支配となる。翌年隠居。
	関文次郎(十代) せきぶんじろう	天保六年養父跡職を相続。永姫君様御引移御用・大納言様御鞍蒔絵御用、御代替の節、御紋付馬柄杓献上。同九年隠居。
事蹟		

氏名	善斎 ぜんさい	宣文 せんぶん	千齡斎 せんれいさい	草志庵 そうしあん	宗秀 そうしゅう	霜頂斎 そうちようさい		杣田武右衛門 そまだぶえもん	杣田清輔（初代） そまだきよすけ	杣田善兵衛（二代） そまだぜんべえ	杣田清輔（三代） そまだきよすけ	杣田藤左衛門 そまだとうざえもん
事蹟	江戸後期、出羽庄内の鞘塗師。村上仲靖の師。「木目塗印籠（花押）」が現存し、「羽前庄内住／善斎（花押）」の銘がある。	江戸末期の印籠蒔絵師。笠翁風を得意とした。未詳。	幕末・明治の印籠蒔絵師。玉椿・喜朝などの銘が見られる。	江戸後期の印籠蒔絵師。研出蒔絵を得意とした。文政から天保の頃の京都の人であろう。	江戸後期の京都の印籠蒔絵師。研出蒔絵を得意とした。	江戸後期の印籠蒔絵師。印籠・根付・盃などの作品がある。作銘は「霜頂斎」三字銘か、壺印・花押を添える。	▽杣田家は富山藩主前田正甫に抱えられた青貝工で、切貝・切金による緻密な青貝細工を創始し杣田細工と呼ばれる。	京都の青貝師。杣田清助の兄。幕末の京都で長崎螺鈿を制作していた。青貝屋武右衛門の祖と推測される。	通称、弥兵衛、名は清輔。寛永十年京都に生まれる。延宝六年、富山藩主前田正甫によつて富山藩御細工所に召出され扶持三十五俵、金子三十兩を給される。元禄十三年没。	京都の産。杣田清輔の門人で清輔に男子がいなかったため杣田の家を相続。扶持三十五俵。延享三年没。	通称、清助、諱が光恒、号が宗偏。元禄十三部屋住時に召出され御徒小目付を命じられ、五人扶持銀五枚を給される。延享三年に相続。御細工方兼役、御徒小目付御先供兼役となり扶持三十五俵を給される。宝暦十三年日光東照宮修復御手伝普請に参加。寛政二年、隠居して名を弥遊と改めるが同三年没。「杣田宗偏」、杣田清助宗偏」銘の印籠が数点現存する。	享保十五年に生まれ、通称藤左衛門。御徒組兼御細工方として二人扶持銀三枚を給される。天明四年、春姫君方様御婚禮道具吟味役を拝命。寛政二年相続。文化三年隠居し弥休と改める。文化十一年没。蓋裏に「杣田弥休」在銘の「山水螺鈿印籠（ポストン美術館蔵）」が現存する。

氏名	そまだみつひさ 杣田光久（五代）	通称佐源太、名は元輔、諱が光久、また杣田重廣も同人と推測される。宝暦十三年生まれ、天明四年、修業のため出府。文化十三年相続三十五俵。文政九年隠居、以上と改名。天保十三年没。
		「桜鷄蒔絵印籠（三井記念美術館蔵）」他数点の印籠が現存し、 「富山住杣田光久（花押）」、「杣田光久（花押）」等の青貝銘である。 「杣田重廣銘では「鳳凰螺鈿矢筒（メトロポリタン美術館蔵）」。「草子洗螺鈿硯箱（富山市郷土博物館蔵）」などが現存する。
氏名	そまだやへいた 杣田弥平太（六代）	通称弥平太。文政九年相続、細工方へ出仕、三十五俵下される。天保六年見日流柔術師範、翌年山口流剣術師範兼役。安政三年没。
氏名	そまだみつゆき 杣田光之	安政四年薬種屋権七より豊前小倉藩主小笠原忠嘉へ献上の「林和靖螺鈿印籠」を製作した。「越中富山杣田光之（花押）」銘がある。
氏名	そまだみつまさ 杣田光正	「桜鷄螺鈿印籠（ボストン美術館）」などが現存。銘の多くは「越中富山杣田光正（花押）」。「杣田光正（花押）」の青貝銘である。
氏名	そまだひさみつ 杣田久光	明治の青貝師。数点の印籠が現存。「杣田久光（花押）」の青貝銘である。
氏名	そまだみつみね 杣田光嶺	数点の印籠が現存「杣田光嶺（花押）」の青貝銘。
氏名	そまだみつのお 杣田光信	近代の蒔絵師晋哉との合作による「十二月蒔絵揃小印籠」や数点の煙管筒が現存することから明治末の青貝師と推測される。
氏名	だいきとよすけ 大喜豊助（初代）	▽大喜豊助は尾張名古屋の豊楽焼の工人である。豊楽焼は加藤利慶が創始し、二代加藤豊八のとき、三代以降は門人の大喜家に引き継がれた。特に大喜家以降、「木具写し」と呼ばれる陶胎に塗蒔絵を行った。独特な作風を一家の特色とし、その茶道具は珍重された。
氏名	だいきとよすけ 大喜豊助（二代）	加藤豊八の弟子で豊楽焼の三代にあたる。安政八年に生まれ、文化十四年に富士見藤棚から香久連里に移住した。天保十三年尾張徳川家の陶器師となり、徳川斉荘自ら「豊楽」と揮毫して与えた。とされる。元治元年没。
		豊楽焼の四代。文化十年生まれ。安政五年没。「有職文蒔絵印籠」が現存。文化十年生まれ。安政五年没。「有職文蒔絵印
氏名	だいきとよすけ 大喜豊助（三代）	豊楽焼の五代。養子で明治十八年に八十五歳以上の高齢をもって没した。
事蹟		

高田和三郎 たかだわさぶろう	高田河月 たかだこうげつ	高内白亀斎（二代） たかうちはつきさい	高内市左衛門（初代） たかうちいちざえもん	高井白陽 たかいはくよう	高井得好斎（二代） たかいとっこうさい	高井得好斎（初代） たかいとっこうさい	高井泰令 たかいたいれい	大喜豊助（四代） だいきとよすけ	氏名
幕末・明治の塗師。天保三年生まれ。十四歳で高坂桐谷に入門し、明治十年漆技を学び、安政二年に開業、道具塗師・鞘塗師となる。明治九年に紫塗を発明、第一回内国勸業博覧会に出品して花紋賞牌を受けた。起立工商会社に入り輸出漆器を製作。	幕末明治の加賀の蒔絵師。天保七年生まれ。通称茂三郎、号が河月。また一本には江月とある。明治三十五年没。	明治の道具蒔絵師。天保七年生まれ。通称鎌三郎。父高内市左衛門について修業、明治四年に相続した。以後輸出品を製作。東京麹町六丁目十一番地に住。	江戸後期の道具蒔絵師。重箱・婚礼道具を製作。号は不明だが白亀斎を号したと考えられる。初代市左衛門も白	名は栄四郎、号が白陽。明治二十八年新潟生まれ、大正八年に東京美術学校卒業。中野区江古田四丁目四六八住。帝展特選が二回。昭和二六年没。	明治期の東京の蒔絵師。天保十三年、有馬家江戸藩邸内に生まれる。幼より父に就いて修業し、通称鈴太郎、号が得好斎、諱が安治。香箱などの輸出品を製作した。彫漆、芝山に長ずる。櫛や額面・香箱などの輸出品を製作した。青山北町二丁目六十三番地のち麴町区有楽町三丁目一番地六十四号に住。日本漆工会の商議員。明治三十六年没。青山墓地に葬られる。また「詰菊蝶蒔絵香箱（ハンブルグ記蒔絵象嵌額面）」が現存する。また「詰菊蝶蒔絵香銘がある。	江戸末期の久留米藩主有馬家の御用蒔絵師。通称金二郎、得好斎と号した。明治元年に家名を子の得好斎安治に譲った。	近代東京の蒔絵師。明治十三年生まれ。名は茂治。池田泰真宅に住み込みで修業、泰令を号した。後に赤塚自得の妹と結婚、自得にも師事。青山北町六の四十七に住。昭和四十六年没。木地蒔絵が多く、是真風を特色とした。文房具・煙草入などが多く現存。銘は行書で「泰令」二字銘が多い。また古満印を使用した。	豊楽焼の六代。嘉永元年生まれ、第一回内国勸業博覧会で花紋賞牌を受け、第二回・第五回内国勸業博覧会、明治十一年にパリ万国博覧会に出品した。のち欧米にも輸出した。大正十六年没。以降大喜家六代、豊楽焼の八代まで続いた。	事蹟

氏名	高橋分水 たかはしぶんすい	高橋半四郎 たかはしはんしろう	田上助四郎 たがみすけしろう	高野松山 たかのしょうざん			武井藤助（初代） たけいとうすけ	武井藤助（二代） たけいとうすけ	武井藤助（三代） たけいとうすけ
事蹟	幕末明治の彫工。文化十四年、加賀藩士高橋七郎兵衛の子に生まれる。父に彫刻を学ぶ。中国風の肉彫指物を作る。二十五歳の器に梅園で開業、筆墨商。江戸に移り諸侯の注文により、その後江戸古作。神田末広町三十八番地住。木彫在銘共箱の印籠がある。	江戸時代後期、京都の家具塗師。天明七年生まれ。屋号は大文字箱がある。また津田清兵衛（堅清）との合作もある。	明治期の挽物師。渡辺喜三郎の挽物を多く手がけた。	近代美術学校の巨匠。明治二十二年熊本に生まれ本名は高野重人。東京美術学校で白山・橋本市蔵（二代）に学ぶ。郷里の旧領主侯爵細川護立に二十五円の生活給で召抱えられる。二十五円と望したと考えられる。松哉が今村繁三から受けていたのと同額を要動したと伝えられる。細川家の庇護のもと、究極の白山派の技巧に基きながら、抜群のデザイン力を生かし、現代的な数々の名品を帝展・日展に出品した。昭和三十年重要無形文化財保持者となる。昭和五十一年没。作銘は楷書で「松山」、松山作」とする。ことが多い。	近代美術学校の巨匠。明治二十二年熊本に生まれ本名は高野重人。東京美術学校で白山・橋本市蔵（二代）に学ぶ。郷里の旧領主侯爵細川護立に二十五円の生活給で召抱えられる。二十五円と望したと考えられる。松哉が今村繁三から受けていたのと同額を要動したと伝えられる。細川家の庇護のもと、究極の白山派の技巧に基きながら、抜群のデザイン力を生かし、現代的な数々の名品を帝展・日展に出品した。昭和三十年重要無形文化財保持者となる。昭和五十一年没。作銘は楷書で「松山」、松山作」とする。ことが多い。	▽武井家は上野国出身で二代からは幕府の御蔭絵師棟梁別席阿弥、調度の仕頭を代々勤め、御小屋で多数の工人を実際に指揮して、無に近い制作にあたった。維新後も実業を継続した。在銘品蔵。が現存し、「漆枝蔭絵手板（イギリス・キューガーデン	初代藤助三十歳の代作と推測される。東京国立博物館蔵。は	江戸末期の蔭絵師。幕府の御蔭絵師棟梁幸阿弥因幡長賢配下の仕頭に、特に万延二年、呉服橋内の御小屋での作業中に脳卒中で没した。門下に川之邊一朝・中井一花斎が出た。	天保十三年生まれ。初め忠次郎。万延二年に相続して通称を藤助に改め、幸阿弥因幡長福の仕頭を勤めた。明治二年没。

氏名	武井東泉齋（四代） たけいとうせんさい	武井静一郎（五代） たけいせいいちろう	竹内紫光 たけうちしこう	竹内生司 たけうちしょうじ	竹内松涛齋 たけうちしょうたうさい	竹内泉石 たけうちせんせき	竹内竹二郎 たけうちたけじろう	武田友月 たけだゆうげつ	竹中勝次郎 たけなかかつじろう	忠之 ただゆき	橋古船 たちばなこせん	橋宗純 たちはなそうじゆん
事蹟	天保十二年生まれ。武井家門人で初め新次郎。明治二年、武井名を継いで藤助を称し、東泉齋と号した。第一回内国勸業博覧会で花紋賞牌を受け、ウイーン万国博覧会へは硯箱五点と人力車三両を出品した。明治八年からは内務省の命で盃を製造した。浜町一丁目一番地住。	武井東泉齋の子で家業に励むが明治三十九年に没。弟春三も同年没。	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。	江戸後期の道具蒔絵師。姫路藩主酒井家の抱工。文政六年に酒井抱一のため「住江蒔絵硯箱」を製作。「秋海棠蒔絵小筆筭」は現存唯一の作品。	幕末・明治の道具蒔絵師。通称生左衛門、松涛齋と号し、別号を生翁とした。文化二年生まれ。十六歳で田邊源助（四代）に入門。三十六歳で江戸本石町に開業、幕府御細工所の用品を製作、また姫路藩主酒井家の抱工となる。維新後東京須賀町一番地に住。明治十一年、第一回内国勸業博覧会に出品して花紋賞牌受賞。明治十五年没。	近代東京の蒔絵師。池田和泉哉に蒔絵を習う。大正風のコンパクトや櫛・喫煙具・額などが現存する。	弘化元年生まれ。竹内松涛齋に師事。東京須賀町一番地住。	元文政二年新加賀藩老巨今枝直方が見出して金沢に迎え、文政元年没。木彫蒔絵による文房具や印籠が現存する。弘化	幕末金沢の蒔絵師。安永二年、姫路藩士花井四郎兵衛の十一男に生まれる。通称秀平、諱が信興、友月と号した。京都に住していたが文化十一年加賀藩老巨今枝直方が見出して金沢に迎え、文政元年、前田齊広に推挙し御細工者小頭並に任じ十五人扶持とな	幕末・明治の道具蒔絵師。天保十一年生まれ。十三歳から父竹中勝次郎に師事。二十五歳で家名を相続。料紙箱・文台・鼻紙台・煙草盆・筆筭その他婚礼道具類を製作。橋屋信濃に販売していたが、明治二年より輸出遺品を製作した。日本橋通三丁目六番地に住。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸初期の印籠蒔絵師。「東坡蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」ただ一点が現存する。遠方三年紀があり在銘としては例外的に古い作品である。

氏名	橘文重 たちばなふみしげ		田付長兵衛高忠 たづけちやうべえたかただ	田付長兵衛廣忠 たづけちやうべえひろただ	田附長兵衛高廣 たづけちやうべえたかひろ	田付孝則 たづけたかのり	田付せう女 たづけしょうじょ	田附工鏡 たづけこうきやう	田付高豫 たつけこうよ
事蹟	江戸後期の蒔絵師。彦根藩主井伊家に「鶴蒔絵盃（彦根城博物館蔵）が伝来する。	▽田付家は、京都の蒔絵の名家として知られる。寛永期には田付長兵衛が江戸京都にもあったが貞享四年「江戸惣鹿子」によれば、田付長兵衛が江戸三軒堀五丁目に住したとある。この頃に早くも江戸と京両方に拠点を持ったか、二家に分かれたと考えられている。江戸では江戸中期以降に孝則・せう女・工鏡らが輩出している。	「角田川蒔絵文台・硯箱（東京国立博物館蔵）」と津軽家伝来「萬細道蒔絵文台・硯箱」の作者。「角田川蒔絵文台・硯箱」には「萬細道／田付長兵衛／高忠（花押）」、「萬細道蒔絵文台・硯箱」には「萬細道／田付長兵衛高忠（花押）」の銘がある。	出雲大社還宮奉納品「亀甲剣木瓜紋蒔絵文台（出雲大社所蔵）」の作者で、「千時寛文七丁未歳正月中旬／田付長兵衛／廣忠（花押）」の銘がある。寛文七年は貞享四年「江戸惣鹿子」が書かれる。僅か二十年前である。	通称長兵衛。諱が高廣。姓は田附・田付両方の記名が確認できる。高忠・廣忠の末裔であろう。「菊池寂阿蒔絵硯箱」・「三夕蒔絵文台硯箱」・「玉川蒔絵硯箱」などが売立目録に見られ、「ない。」「蒔絵硯箱」・「蓮鶯蒔絵香盆」が現存する。印籠の作品は見衛高廣の落款で、狩野風であったと伝えられる。蒔絵作品も筆致、研出蒔絵に優れる。文献資料が全くなく、年齢記銘も確認され、いないが、享保から宝暦頃の作品と見える。	江戸中期の印籠蒔絵師。「装剣奇賞」の「印籠工名譜」に記載され江戸に住し、狩野派の絵をよくしたという。飯島虚心著「蒔絵師傳」には、著者虚心が孝則筆「菅公図」の画幅を実見し、「画法狩野派で一風あり」と書き残している。	江戸中期の印籠蒔絵師。「装剣奇賞」の「印籠工名譜」に記載され、江戸に住し、田付孝則の親族か、としている。せう女はその作品の現存を聞かない。しかし著者の稲葉通龍が花押を書き留めていることを考えれば、在銘作品が当時存在したのであろう。	文政頃の江戸の印籠蒔絵師。幸々斎和常・芝のち工鏡と号した。また画中印に「徳風」・「高光」を用い、高光は諱と考えられ、田附長兵衛の末裔とも考えられる。変わり塗を使った作品も多あり、多くの印籠と数点の道具類が現存する。文政四年の年紀銘があり、また行年銘は八十五歳まで見られる。	幕末の蒔絵師。未詳。江戸の田付家と推測される。

氏名	辰巳徳兵衛 たつみとくべえ	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。
	辰巳次兵衛政明 たつみじへえまさあき	江戸末期の印籠蒔絵師。当時名声が高かったという。「菊御所車蒔絵鞘印籠（佐野美術館蔵）」が現存。作品は少ない。
	辰巳次兵衛薫壽 たつみじへえとうじゅ	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。
	辰巳次兵衛清政 たつみじへえきよまさ	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。
	龍田牛歩 たつたぎゅうほ	近代東京の蒔絵師。大正四年に第三回農展出品。旧グリーンフィールド・コレクションとして「元禄風俗蒔絵文庫」が現存する。
	田付文々斎 たつけぶんぶんさい	江戸後期の蒔絵師。加茂競馬蒔絵三組盃が現存。
	田付隆益 たつたかます	江戸後期の印籠蒔絵師。風俗画の蒔絵が殊に上手である。作風から化政頃の京都の人と考えられる。銘は「田付隆益」銘が多い。
	田付常甫 たつけじょうほ	江戸後期の印籠蒔絵師。
	田付常祥 たつけじょうしょう	江戸後期の印籠蒔絵師。風俗画研出蒔絵の印籠を多く見る。
	田付光々斎 たつけこうこうさい	江戸後期の蒔絵師。未詳。
	田付交々斎 たつけこうこうさい	江戸後期の蒔絵師。未詳。
	田付栄助 たつけえいすけ	江戸後期の印籠蒔絵師。京都富小路二条上御鍛冶屋町住。京の蒔絵の名家田付勘右衛門の裔とされる。動物の蒔絵に特に長じ、島津侯の依頼で千匹猿の印籠を制作した時に、誤って図を天地逆に蒔絵した。しかし出来を侯に賞され、失態があつて賞されたのは栄助一人と評価になった。栄助の家は貧しく、六畳一間の裏屋に母と三人の子の五人で住んでいたため、夜中に仕事をしたという。またその母は常に奉公に出てその家計を助けた。三人の子が業を転じたため、家は絶えたという。
事蹟	▽京都の田付家の存在は、「雍州府志」・「京羽二重」などで確認できる。新町今出川下ル町に住したが、通称など詳細は全く不明である。幕末の田付栄助について「田付勘右衛門の裔」という一字からその通称が勘右衛門であったことが辛うじて判明する。しかし現存する作品から京都の蒔絵師と考えられる人物が数人推定される。	

氏名	事蹟
田中一秋 たなかいつしゅう	明治から大正期の象嵌工。囊物商の口伝によれば田中姓と伝えられる。別号が青仙居士。煙管筒や印籠、櫛が現存する。
田中光二 たなかこうじ	明治大正の蒔絵師。神田お玉が池畔に生まれ、本所横河町に育つ。通称菊太郎または菊三郎。十三歳で竹内松涛斎に入門。十九歳で本阿弥光賀より嶺松斎光二の号を授かり開業。日本漆工会創設に尽力し、その商議員となる。大正十年没。昌清寺に葬られる。「嶺松斎光二」の銘の印籠が比較的多く現存する。
田中松花斎 たなかしょうかさい	幕末・明治の蒔絵師。本名は田中金次郎、号が松花斎。弘化三年生まれ。江戸神田住。白井松花斎刑部の門人。印籠蒔絵師であったが、維新後は輸出家具の蒔絵をした。
田中表阿弥 たなかひょうあみ	近代京都の蒔絵師。明治十四年生まれ。旧姓佃、木村表斎（二代）に師事し表阿弥と号した。昭和四十七年没。茶道具・什器類が現存する。
	▽田邊源助は三河棚邊郷の出身で江戸に出て棚邊を称した。のちに田邊と改めて、代々幕府の御細工所に出仕した。明治維新後も家業を継続する。また四代が叔父平治郎から羊遊斎派の蒔絵を学び、以降一家の特色とした。
田邊源助（初代） たなべげんすけ	三河棚邊郷の出身で宝永年間に江戸に出て鉄砲町に住んで、蒔絵師となり棚邊を姓とした。享保十六年没。
田邊源助（二代） たなべげんすけ	元禄十一年、中橋大鋸町塩野某の子に生まれ、初代源助に入門。初代源助に男子なく、後嗣となり、源助を称し、姓も田邊に改める。また諱を照房とした。中橋大鋸に住。明和五年没。
田邊源助（三代） たなべげんすけ	延享三年、二代源助の子に生まれる。初め源五郎と称し、相続して源助、諱を照光とする。徳川将軍家の奥向御道具の製作に従事し、梨子地紋唐草蒔絵を得意とした。文化十年没。
田邊平治郎 たなべへいじろう	田邊源助（三代）の実弟。原羊遊斎の門に入り、名匠とされる。
田邊源助（四代） たなべげんすけ	天明七年、田邊源助（三代）の次男に生まれる。幕府御細工所御蒔絵統領鈴木兼重に紋唐草の蒔絵を習い、また叔父田邊平治郎から羊遊斎派の蒔絵を習得。相續して源助を襲名し、諱を照房とした。蒔絵師棟梁鈴木佐渡・菱田駿河・栗本信濃から仕手頭を嘱せられる。将軍家の調度類製作、殿中上段の間、天井・日光・上野・芝の御霊屋修復など大規模な工事等を指揮し、名井頭とし・同業者の信頼が厚かった。その門に入る者、梶山明細・金井壽一・川勝照玉斎・竹内松涛斎など三十余名という。中橋大鋸町から神田皆川町に移り住んだ。嘉永二年没。

堆朱楊成長是 （十代）	堆朱彫、厚貝、青貝細工の名人で天和三年幕府御細工所に召し出され、御目見。貞享四年將軍家の御用で堆朱彫り机を製作した。宝永五年麹町十三丁目に町屋敷八十三坪を拝領した。享保四年没。
堆朱楊成長善 （九代）	承応三年父長宗の跡をつぎ諸大名の好評を得る。また禁裏御所造営御用を勤め山城の名を与えられる。延宝八年没。
堆朱楊成長宗 （八代）	慶長のころ鎌倉で父長親とともに厚貝青貝等を入れて彫物をした。この頃の作を鎌倉彫の堆朱という。寛永年間江戸に居を移し三代將軍家光に仕え、禁裏御用、日光東照宮造営御用を勤める。以来代々幕府の用達となる。承応三年没。
	▽堆朱楊成家は室町時代から近代まで続く堆朱の名家である。初代長充は足利將軍義詮の巨で、我國の堆朱彫の元祖である。代々足利將軍家ついで豊臣家に仕えて茶器を製造した。八代楊成長宗は寛永年間、三代將軍家光に召し出され、「御青貝堆朱彫師」として代々徳川家に仕えた。
椿圭 ちんけい	江戸末期の江戸の工人。笠翁細工風の印籠・根付・漆絵の作品がある。
珍儀 ちんぎ	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。沈金彫の印籠もあり、珍榮と同じ系統であろう。
珍榮 ちんえい	江戸後期の沈金工。狩野松林下絵の「馬沈金印籠」があることから江戸の人と推測される。沈金印籠の名品が多く現存する。また豊後佐伯藩主毛利家に「郭子儀沈金文台・硯箱」が伝来していたため、大名家出入の江戸の名工であろう。今日の沈金とは異なり、丸刀で彫り金粉を沈めてある。銘は沈金銘で珍榮とする。
長左衛門 ちようざえもん	江戸後期の印籠蒔絵師。野村九甫の門人。
釣玄斎 ちようげんさい	江戸後期の蒔絵師。江戸の御小屋系の蒔絵師で数点の盃が現存する。
長京斎 ちようきようさい	狩野栄信下絵の「鯉滝昇蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」が現存し、銘は「長京斎（花押）」である。その花押から山田常嘉斎（七代）の初号と考えられる。
竹翁 ちくおう	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。
近直 ちかなお	近直については「装剣奇賞」以外に古い文献がない。しかし現存品の筆跡は、ほぼ共通している。橘守国「絵本直指宝」（延享二年刊）の印籠を写していることから、活躍は安永く宝暦である。う。作風から京都の印籠蒔絵師と推測される。
丹治伝入 たんじでんにゆう	江戸中期の京都の蒔絵師と伝えられる。加賀藩老本多家伝来の「幔幕蒔絵鞍（藩老本多蔵品館蔵）」がある。
氏名	事蹟

辻村松華 つじむらしょうか		近代の蒔絵師。慶応三年、神奈川県中郡比々田村の近藤氏の長男に生まれ、通称は延太郎。明治三十五年辻村姓となる。下谷区中根、瓢箪町九番地住。帝国美術院展覧会に出品。東京美術学校講師、農商務省工芸審査委員会委員。昭和四年没。
つきおけいすい 月尾慶水		本名月尾求一。池田慶真と高井泰令に蒔絵を学ぶ。古満印を使用した。
ついでしゅうせいながあき 堆朱楊成長昭（二十代）		十八代国平の次男で十九代の実弟。明治十三年根岸に生まれ幼名豊五郎。父兄が没し家名を相続。絵画を佐竹永湖、彫刻を石川光明に学んだ。彫彩漆や存星風・蒔絵風を取り入れた。農展・帝展に出品。宮内省御用品多数制作。昭和二十七年没。
ついでしゅうせいいつねなが 堆朱楊成経長（十九代）		幼名好三郎。維新で家業を中断。成長して業を再興したが、明治二十九年に若くして没した。
ついでしゅうせいくにひら 堆朱楊成国平（十八代）		幼名平八郎。後国名長門。万延元年跡を継ぐ。本丸普請規式の際に熨斗目長袴着用。上棟の節に大紋着用。文久元年日光東照宮修復御用を勤める。本町三丁目坪数百七十坪の屋敷を拝領した。明治新後、新政府に拝領屋敷を収公される。名を平十郎に復した。明治二十三年没。
ついでしゅうせいながひで 堆朱楊成長英（十六代）		幼名彦十郎。文化八年跡を継ぐ。文政三年まで勤め、嘉永元年に没。
ついでしゅうせいながかげ 堆朱楊成長蔭（十五代）		幼名太郎助。寛政三年跡をつぐ。文化八年まで勤め、嘉永元年に没。
ついでしゅうせいなおなが 堆朱楊成均長（十四代）		幼名源蔵。安永八年相続、御用を勤めた。亀岱と号し、当時「蒔絵の常嘉、青貝の亀岱」といわれる。俳諧もよくした。寛政三年没。
ついでしゅうせいながとし 堆朱楊成長利（十三代）		幼名喜七郎。明和二年相続、御用を勤めた。安永八年没。
ついでしゅうせいながおと 堆朱楊成長韻（十二代）		幼名源蔵。享保二十年相続、御用を勤めた。明和二年没。
ついでしゅうせいながもり 堆朱楊成長盛（十一代）		幼名喜七郎。享保四年相続、御用を勤めた。享保二十年没。
氏名		事蹟

氏名	津田清兵衛（八代） つだせいべえ	津田清兵衛（九代） つだせいべい	津田翠光（十二代） つだすいこう	津田宗貫 つだそうかん	薦田高陽齋 つただこうようさい	土田宗悦 つちだそうえつ	土田半六 つちだはんろく	
事蹟	▽津田清兵衛家は京都で代々続く道具塗蒔絵師。創業は正保年間、西小角にあった。作品は什器が多い。在銘はなく、箱書は「かたち屋清兵衛」・「京都」・「堅清」の黒文長方印を捺するものが多いが、朱印や丸印も見られる。「堅清」の履歴はほとんど伝えられていない。	元文年間、松尾流の松尾楽只斎宗匠の定塗師となり、堅地屋の屋号を与えられる。以後代々松尾流の定塗師を勤め、堅地屋の屋号とし、「堅清」を商号として印とした。	安政六年に東本願寺勅使門を塗ったが寛政直後に焼失した。元治元年の大火で押小路車屋町西小角の自宅と系図・書類を焼失、大火後室町下立売に転居した。	高松に生まれ、本名英造。木村秀雄に師事。津田清兵衛の養子となり、大正三年に十二代清兵衛を継ぐ。農展・商工展で活躍した。上京区室町通樺木町二に住。昭和九年没。	近代の蒔絵師。明治元年、尾張藩士津田右京の三男に生まれる。明治十三年家を相続、薬物学・化学を学び、趣味に陶芸も研究。明治三十四年、京都新門前橋本町の池田清助方に勤めて社宅に住み、社内の春井恒眠から蒔絵を一週間伝習。その後独学で研鑽を重ね、新門前中之町の自宅に開業。三十四・五歳から光琳・破笠・半山・樗平の写しを製作し、また陶器・堆朱・七宝・青貝を象嵌。宗貫と号し、一流斎・自楽斎等を別号とした。作品は文房具・印籠などで、陶器は乾山・半山・木米を写す。無銘の作品もある。昭和九年没。	近代大阪の蒔絵師。通称栄三郎、名は英輝。大阪南区鍛冶屋町八幡筋北入一七六に住。	古くから元禄頃の蒔絵師と伝えられるが確証はない。光悦・光琳の「破笠様の蒔絵をした。日置島津家伝来で紀伊藩主徳川治貞所用の「曳舟蒔絵硯箱」に享保年紀があり、行年銘も八十五歳まで見られることから、この頃まで活躍したと考えられる。多くの印籠が現存。	江戸中期の印籠蒔絵師。江戸赤坂に住したという。「装剣奇賞」に記載される。一本に土田宗悦と同一人とするが、不明。在銘もない。

氏名	都築幸哉 つづきこうさい	綱島古松 つなしましろう	綱島露信 つなしまろしん	鶴下遊斎 つるしたゆうさい	鶴下永壽斎 つるしたえいじゅさい	鶴下浅次郎 つるしたあさじろう	鶴田松斎（初代） つるたしろうさい	鶴田信斎（二代） つるたしんさい	貞二 ていじ	貞次郎 ていじろう	照木松山 てるきしやうざん
事蹟	近代の蒔絵師。明治十七年、香道御家流の十九代家元、都築成幸の子に生まれ、名は幸二。東京美術学校卒業。池田泰真に蒔絵を学び幸哉と号す。御家流二十代家元となる。小石川区指ヶ谷町一四七に住。帝展出品。鳳凰草蒔絵料紙箱・硯箱（ハリリ・コレクシヨン）は第五回農展出品であり、是真の風をよく伝える。	幕末・明治の蒔絵師。文政四年生まれ。通称庄兵衛、十四歳で陸遊斎入門、三十一歳で独立、号を古松とした。土佐藩主の御用を勤めた。維新後は香箱・香盆など輸出品を製作。明治十一年赤羽工作した分局に雇われ、家什具に蒔絵した。京橋弓町十五番地住。	明治の蒔絵師。通称金之助、綱島古松の養子と見られる。京橋弓町十五番地住。日本漆工会会員。	江戸後期の蒔絵師。通称は右膳、号が遊斎。天明頃に江戸の芝に住む。原羊遊斎の師。通称は右膳、号が遊斎。天明頃に江戸の芝に住む。	江戸末期の蒔絵師。通称は鶴三郎、号は永壽斎または鶴壽斎。江戸の柴井町に住す。	明治の蒔絵師。東京三河町四丁目住。	加賀金沢の塗師。天保十二年に生まれ通称は和三郎、号が松斎。双鶴。布目塗を發明。また明治二十二年、明治神宮造営に際し、百五十人の加賀の職工を率いて格天井の塗を指揮した。加賀梅本町住。大正十年没。	慶応二年鶴田松斎の長男に生まれ、幼名伊三郎。のち相続して和三郎。信斎と号した。大手町住。明治三十一年全国漆器共進会で一等賞を受ける。昭和四年に御成婚奉祝献品の棚飾となる。「撫子蒔絵香盆（宮内省三の丸尚蔵館蔵）」を献上した。昭和十七年没。	幕末・明治の塗師。塗師貞と呼ばれ、貞トと称し、貞二と号す。深川に住。はじめ三浦乾也の注文を作っていたが、乾也に蒔絵を教え、交換的に陶芸を習った。後に乾也と不仲になり自ら破笠細工を模した。印籠や根付の作品が多く見られる。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸住。野村久甫の門人。未詳。	明治の蒔絵師。通称松之助。号松山。日本橋浜町三丁目一番地ほの五十に住。

氏名	桃園斎 とうえんさい	逃花 とうか	桃宜 とうぎ	東光 とうこう	東廣斎正茂 とうこうさいまさしげ	東紫斎倍茂 とうしさいますしげ	桃春 とうしゅん	東巴 とうは	東遊斎 とうゆうさい	稲葉 とうばう	東流斎 とうりゅうさい	東柳斎吉房 とうりゅうさいきちふ	桃林斎 とうりんさい	遠坂宇兵衛 とおさかうへえ
事蹟	江戸末期の江戸の蒔絵師。越前福井藩主松平家伝来の「登竜門蒔絵盃（福井市立郷土歴史博物館蔵）」は弘化三年に田安斎匡から贈られたもの。江戸の御小屋系の蒔絵師と推測される。	江戸後期の印籠蒔絵師。飯塚桃葉（初代）と石塚桃壽の作品に似た構図のものが、活躍時期は寛政から天保ころと推測される。	江戸後期の印籠蒔絵師。印籠の形、作風とも飯塚桃葉派の特徴が顕著であり、桃葉一門、特に二代桃葉門下と推測され、その活躍時期は文化・文政頃と思われる。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。明和元年生まれ。文化・文政期に活躍した。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。彫銘も多く見られる。「日本国尽蒔絵印籠」が数多く現存する。研出蒔絵の作品が多い。	幕末・明治の印籠蒔絵師と考えられる。翠竹軒と印が同じであり、同人もしくは関連が考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	明治二十一年の美術展覧会に侯爵蜂須賀茂韶が「能書印籠」を出品しており、飯塚桃葉一門と推測できる。これまで桃林斎の作品は一点だけあったが、桃葉派の正真作とは思えず、今後の出現によって年代、師弟関係が明らかになると思われる。	江戸時代京都で続いた茶道具塗師。代々藪内家の定塗師で通称を宇兵衛、宗仙を号とした。

氏名	としまみつあき 戸島光朗
事蹟	弘化三年生まれ。光正の子で通称彌兵衛、諱が光朗。山本光利に師事。明治二十六年シカゴ・コロンプス万国博覧会出品。室町通二条上ルに住。大正十年没。
としまみつまさ 戸島光正	幕末・明治の印籠蒔絵師。文政二年生まれ山本利兵衛（四代）武光の実に、弟で、天保十一年に戸島家を継ぐ。通称彌三郎、諱が光正。父兄に蒔絵を学ぶ。弘化三年に御所の調度・文久元年に和宮降嫁の調度など製作した。弘化三年に小路室町住。明治八年没。数点の印籠が現存し、銘は「光正」の蒔絵に朱漆で「戸島」の方形印が添えられる。「菊鶏蒔絵印籠（根津美術館蔵）」など、山本利兵衛の「印籠下絵集」と合致する。
とざわまたぞう 戸澤又参（四十代）	文久三年生まれ。中村又斎の三男で戸澤左近を継ぎ光幽軒とも号した。研出蒔絵、光悦・光琳風の蒔絵を得意とした。大正八年没。
とざわさこん 戸澤左近（三十九代）	柳子軒・龍叟と号す。天保初年尾張藩主徳川斉温に召し出され、名古屋に移住した。晩年尾頭に隠棲。明治二年に没した。
とざわさこん 戸澤左近（三十八代）	土佐光貞の下絵で茶器や盃を多数製作。また光格天皇の御好みで戸澤左近が下地を製作、土佐光貞が直描した「胡徳楽舞人印籠」・「勸盃瓶子取印籠」の揃印籠が現存する。
	▽戸澤家は高松宮の末裔とされ、京都で御挽物師、御細工師を業とし、天下一の称を賜る。御所・公卿・諸侯・千家・小堀遠州・片桐石州等に入りした。代々業を継いだ。
とよあちよしい 戸崎朝哉	近代東京の蒔絵師。漆工競技会で活躍した。東京日暮里町谷中本一五に住。
とおさかそうせん 遠坂宗仙（八代）	幕末京都の茶道具塗蒔絵師。文化二年生まれで初名は青野長四郎。若年より中村宗哲、佐野長寛、高橋半四郎の工房を経て一家をなし、遠坂家八代を相続した。以後代々の通称を宇兵衛、宗仙の号を用いる。万延・文久のころ京都で印籠の製錬法が絶えかけた時、宗仙が印籠下地を作った。明治維新で廃業し、明治十八年頃没したといふ。跡を継いだ。明治維新で廃業し、明治十八年頃没したといふ。子

氏名	戸島幸阿弥 としまこうあみ	栃倉豊助 とちくらとよすけ	得幸齋 いぬさうさい	百々玉泉 どどぎよくせん	百々玉善 どどぎよくぜん	百々玉翁 どどぎよくおう	戸邊公風 とべこうふう	富田幸七 とみたこうしち	
事蹟	近代京都の蒔絵師。明治15年生まれ。通称彌一郎、諱が光孚、幸阿弥と号した。京都美術学校を卒業、竹内栖鳳に日本画を、父・叔父に漆芸を学び、さらに二年間東京で東京風の蒔絵も習得した。大正天皇即位の際、堂上華族より献じた「蒔絵鶏置物」を製作。鯉魚を研究し乾漆蒔絵置物なども多い。また絵絹の漆絵に傾倒し自ら漆画師と称する。新古美術品展・農展等に出品。昭和三十一年没。「蒔絵堂」を建てた。	通称は豊次郎または豊助。当時塗師として「余程上手で名人」と評されるが、酒飲みで周囲を困らせたと伝えられる。起立工商会社の工人で、白山松哉の塗の師としてもその名が伝えられる。	明治の東京の印籠蒔絵師と考えられる。	江戸後期の京都の蒔絵師。通称善次郎。祖父某以来蒔絵を業とする。その後以前は彦根藩士であったという。玉泉は父の跡を継ぎ、良工の間こえ高く、諸国の富豪からの依頼が絶えず、生涯絹物のみを着たといいう。茶事を嗜み、北村養軒に学んでその奥義を極めた。安永4年没。	江戸後期の京都の蒔絵師。百々家の四代目。父玉泉の跡を継ぎ蒔絵を業とした。また絵画を円山派に学んだ。	江戸後期の京都の蒔絵師。明和5年生まれ。百々家の五代目で調度に「琴の海に天人舞楽」の図を蒔絵し、その後仙祠御所・鍋島家の調度にも蒔絵をする。この玉翁の代に至って初めて禁裏の御用を勤めるようになった。五十一歳の時、江戸へ出て徳川将軍から裏葵紋付を賜る。文学を好み、当時博学で名を知れた中村内記と交わり最も親しかったという。天保十一年に没。ある人が若い頃、玉翁に印籠の蒔絵を依頼する。使った時のこと、印籠の素地を持参し、目高三尾の研究蒔絵が三両であったという話しが伝えられている。	江戸期の作品に見える出来である。戦前に製作した作品は木地も薄く、数製作した。芝区西久保巴町七十二住。昭和四十年没。「公風」作「銘の印籠が多く現存し、戦前に製作した作品は木地も薄く、江戸期の作品に見える出来である。」	近代の蒔絵師。明治二十一年生まれ。通称岩次郎、号が公風。大典献上品を製作。また鶴沢松月・山口松枝斎・三浦明峰・豊平翠仙などを抱えた戸辺工房を経営し、古作写しの道具類や印籠を多数製作した。芝区西久保巴町七十二住。昭和四十年没。「公風」作「銘の印籠が多く現存し、戦前に製作した作品は木地も薄く、江戸期の作品に見える出来である。」	近代京都の蒔絵師。嘉永七年生まれ。本姓奥村、名が幸七。十歳で山本武光・光利に師事。明治十年、出奔して東京に上がり清川守貞に師事。柴田是真・小川松民を訪ねる。骨董商富田伊助の養子となり、号好室・光漆・光一などと号した。内外の博覧会展覧会に出品。明治四十三年没。

氏名	友忠 ともただ	砥山光珉 とやまこうみん		豊川楊溪（初代） とよかわようけい	豊川楊溪（二代） とよかわようけい	豊川楊溪（三代） とよかわようけい	豊川伊三郎 とよかわいさぶろう
事蹟	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	明治の芝山象嵌工。天保十年生まれ。通称又四郎。嘉永元年開業。幕府御細工所用。達小間物商大崎善四郎方に奉公していたが、彫刻を好み独学で象牙彫刻・象嵌工となり、明治八年には浅倉松五郎からモザイクを習う。起立工商会社の職工となり、その終焉まで勤めた。日本橋区長浜町二丁目三番地に住。	豊川家は徳川將軍家の印籠蒔絵師。明治維新以降は明治政府の御用品を製作し、明治中期以降は腐食螺鈿・象嵌塗を特色とした螺鈿工となる。豊川家には初代より三代が使用した「印籠下画帳」が現存し、狩野派・土佐派絵師による多くの印籠下絵が見られ、世に蒔絵・螺鈿の現存作品ともよく一致する。また三代以降が使用した蒔絵・螺鈿の下絵集も現存している。	江戸後期の徳川將軍家の印籠蒔絵師。通称彦八、別号生泉斎。天保十三年没。狩野養信下絵の「福祿寿。鶴印籠」など印籠が僅かに現存。	江戸末期の印籠蒔絵師。文化十年生まれ。通称彦八、号が楊溪、別号山晴斎・碎金堂。鞘塗も得意とする。明治元年没。印籠と鐔・櫛・矢立の作品が現存。徳川將軍家のために製作した月次印籠「定家詠花鳥十二月掬印籠」は八点の現存を確認している。印蒔絵を得意とし、精度が極めて高い。銘は「楊溪」「渡舟螺鈿印籠」「大英博物館蔵」「山晴斎楊溪（花押）」「寒山拾得螺鈿印籠」では既に腐食螺鈿や密陀絵を試みている。「猩猩蔴繪印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」「鬼鍾馗蒔絵印籠（静嘉堂文庫美術館蔵）」「内では知られる。	幕末・明治の蒔絵・螺鈿工。弘化二年生まれ。通称彦八、山晴斎・蓬泉堂・碎金堂などとした。根岸金杉村住。廃刀令後は輸出品や外務省の用品を製し、特に浜離宮のグランド將軍のベツドリ梨子地海貝丸蒔絵をしたという。明治政府の御用の際、門前に高張提灯使用を許されたという。明治政府の御用の際、門前に高張提灯・象嵌塗を用いたという。はじめは蒔絵作品に部分的に腐食螺鈿・象嵌塗を用いていたが、明治中頃からはこの技法と上根岸町三十九番地に住。大正三年没。東京金杉村二百十一番地のち上根岸	明治の蒔絵師。嘉永三年生まれ。豊川楊溪（三代）の実弟。納富介次郎や起立工商会社の嘱品を製作した。

氏名							
中 大 路 茂 永 なか おおじ も えい	江 戸 末 期 の 京 都 の 印 籠 蒔 絵 師 。 中 大 路 茂 栄 の 弟 で 次 郎 兵 衛 と 称 し 、 諱 と 号 が 茂 永 。 猪 熊 下 立 売 。 下 所 に 住 し た 。 茂 栄 の 没 後 業 を 継 ぎ 、 そ の 作 風 を よ く 守 っ た 。 ま た 孝 明 帝 即 位 道 具 に 蒔 絵 す る 。 覇 氣 を 有 し 、 碌 々 と し て こ の 業 に つ く こ と を よ し と せ ず 、 時 事 に 憤 慨 し 、 蒔 絵 を 廃 し て 一 橋 徳 川 家 に 仕 え た 。 そ の 後 の 消 息 は 不 明 に で あ る 。 印 籠 は や は り 研 出 蒔 絵 が 多 い が 、 高 蒔 も 少 な か ら ず 見 ら れ る 。 銘 は 一 茂 永 一 を 蒔 絵 し 三 組 盃 は 現 存 唯 一 の 共 箱 で あ り 、 銘 書 を 添 え る 。 ま た 一 芦 鶴 蒔 絵 組 盃 は 現 存 唯 一 の 共 箱 で あ り 、 銘 書 と 朱 印 が 捺 さ れ て い る 。						
中 大 路 茂 栄 なか おおじ も えい	文 政 期 に 京 都 で 活 躍 し た 印 籠 蒔 絵 師 。 寛 政 十 年 、 加 茂 別 雷 神 社 の 祠 官 の 支 族 の 家 に 生 ま れ る 。 諱 が 茂 房 、 号 が 茂 栄 。 京 都 の 元 誓 願 寺 通 堀 川 西 入 町 に ト 居 し た 。 温 厚 謹 嚴 で 観 世 流 の 謡 曲 に も 堪 能 で あ っ た と い う 。 昼 に 寝 に 就 き 、 或 い は 遊 歩 し 、 夜 に 蒔 絵 筆 を と っ て 徹 夜 で 製 作 し た と い う 。 そ の た め か 天 保 元 年 の 京 畿 大 震 災 の 時 に は 下 で 病 床 に あ り 、 同 年 三 十 三 歳 の 若 さ で 没 し た 。 四 条 派 絵 師 の 下 絵 に よ り 研 出 蒔 絵 の 印 籠 を 得 意 と す る 。 駄 作 が 一 点 も な い 行 書 で 一 茂 栄 一 を 蒔 絵 、 下 に 朱 漆 に よ る 一 富 一 の 方 形 印 と し て 、 は い ず れ も 研 出 と す る 。						
中 井 一 花 斎 なか い い っ か さ い	幕 末 明 治 の 蒔 絵 師 。 嘉 永 元 年 生 ま れ 。 通 称 、 定 次 郎 。 武 井 藤 助 。 第 一 回 内 国 勸 業 博 覧 会 に 出 品 。 東 京 浅 草 新 森 田 町 六 番 地 に 住 る 。						
豊 原 一 峯 斎 とよ は ら い っ ぽ う さ い	江 戸 後 期 の 印 籠 蒔 絵 師 。 古 満 派 の 蒔 絵 師 と 見 ら れ る 。 未 詳 。						
豊 田 重 右 衛 門 とよ だ じ ゅ う え も ん	江 戸 中 期 の 京 都 の 道 具 蒔 絵 師 。 代 々 婚 礼 道 具 を 製 作 。 屋 号 は 吉 文 字 屋 。 山 本 武 繼 の 師 。						
豊 川 楊 林 とよ か わ よ う り ん	近 代 の 螺 鈿 工 で 豊 川 楊 溪 (三 代) の 三 男 。 明 治 三 十 年 生 ま れ 。 通 称 徳 蔵 。 昭 和 六 十 年 没 。 櫛 が 多 く 現 存 す る 。 明 治 三 十 年 生 ま れ 。 通						
豊 川 楊 汀 とよ か わ よ う て い	近 代 の 螺 鈿 工 で 豊 川 楊 溪 (三 代) の 次 男 。 他 家 に 養 子 に 行 く が 、 作 家 と し て は 豊 川 楊 汀 で 通 し た 。 東 京 美 術 学 校 の 正 木 直 彦 校 長 と 親 し く 一 十 三 松 堂 日 記 に 頻 繁 に 登 場 す る 。 煙 管 筒 ・ 櫛 が 多 く 現 存 す る 。						
豊 川 楊 溪 (四 代) とよ か わ よ う け い	近 代 の 螺 鈿 工 で 豊 川 楊 溪 (三 代) の 長 男 。 明 治 十 七 年 生 ま れ 。 通 称 金 太 郎 、 山 晴 斎 と 号 し た 。 上 根 岸 住 。 美 術 展 覧 会 ・ 農 展 ・ 商 工 展 で し ば し ば 受 賞 し 、 昭 和 四 年 に 御 成 婚 奉 祝 献 品 の 棚 飾 と な る 。 一 藤 花 菖 蒲 螺 鈿 軸 盆 (宮 内 庁 三 の 丸 尚 蔵 館 蔵) を 献 上 。 経 緯 は 一 十 三 松 堂 日 記 に 記 載 さ れ る 。 昭 和 四 十 六 年 没 。 一 千 字 紋 螺 鈿 煙 管 筒 (一 巴 ウ ア ー コ レ ク シ ョ ン) 一 な どの 煙 管 筒 や 櫛 に 優 品 が 多 い 。						

[illegible]

氏名	事蹟
ながのこうしゅんさい 長野耕春斎	江戸後期の京都の蒔絵師。大阪の絵師、法橋蔀関月の下絵、梨木祐為和歌による福祿鶴蒔絵三ツ組盃が現存する。ことから、長野横笛（初代）同人と考えられる。
ながのおうてき 長野横笛（二代）	初代の子で跡を継ぐ。蒔絵師としては例を見ないほどの屋敷に住み、大宅・庭園は豪奢を極め、洛東にも別荘を構える。伊勢・尾張・大坂の豪家からの注文が絶えなかつたという。作品は食膳類が多いが、茶道の多いが、茶道の黒文正方印が共箱に捺されている。在銘の作品は数点現存し、二点は印籠である。
ながのおうてき 長野横笛（初代）	江戸後期の京都の蒔絵師。通称次郎兵衛、屋号が橘屋。享和年間にも開業し、堺町通小路に住。作品は食膳類が多いが、茶道具も若干見られる。作品に銘を入れず、一長野横笛一の黒文正方印を箱に捺す。円山応震下絵の「蘭蒔絵広蓋」がある。
なかのいつせき 中野一跡	幕末の螺鈿工。文化七年生まれ。通称多市。京藩邸詰福岡藩士の余技である。彫を学め、職実家に螺鈿法を学び、さらに京金工の後藤一乗に高彫を学んで、螺鈿象嵌蒔絵の独特な作風を確立した。慶応三年没。代表作に孝明天皇御料、相州吉広に附属する「黒檀地花鳥蒔絵螺鈿小さ刀拵（一東京国立博物館蔵）」があり、総金具後藤一乗作で鞘が中野一跡の在銘である。螺鈿の印籠も数点現存する。
なかにししょうりゅうさい 中西松立斎	明治・大正の蒔絵師。通称長三郎。東京市麻布区新門前町三番地に住。輸出品と見られる青銅塗高蒔絵の香盆や、川端玉章下絵で大正二年作「松風蒔絵琵琶」が現存する。
なかにししょうりゅうさいひでもと 中西松立斎栄元	幕末の印籠蒔絵師。天保十四年生まれ。松立斎達榮の後代で、仙台伊達家の御抱蒔絵師。「熊蒔絵印籠」一点が現存し、銘文は「なつている。甲子六月朔日造／松立斎藤原栄元／歳次拾二年」と
なかにししょうりゅうさい 中西松立斎	松立斎達榮の後代と考えられる。通称喜太良。安政四年、仙台藩主伊達家の伝来の伝聖徳太子作の笙「節摺」に附属の「竹蒔絵箱」も伊達家の作で狩野典信の下絵の作品が多く、仙台中西松立斎は江戸の人。通称代助、諱は達榮、号が松立斎。仙台下絵の継承は七十一歳まで確認できる。緻密な優品があり、大作もある。印籠（大阪市立美術館蔵）など、織作風・銘字の類似性、も
なかにししょうりゅうさいひでもと 中西松立斎達榮	もの。一松立斎「三字」銘が多く、「松立斎達榮」銘に壺印を加えた

氏名	事蹟
中村宗哲（三代） なかむらそうてつ	元禄十二年生まれ。宗哲（二代）の子で、幼名は鍋千代でのち八兵衛と改める。勇斎・方寸庵・漆翁・漆桶と号した。俳諧もし、俳号は紹朴。七十賀に形物を七種七百を作り「彭祖棗」として有名。宝暦十三年桜町天皇の即位の調度の製作を命じられた。安永五年没。
中村宗哲（二代） なかむらそうてつ	寛文九年生まれ。宗哲（初代）の子で通称八兵衛、勇斎・汲斎と号した。宝永三年没。
中村宗哲（初代） なかむらそうてつ	元和三年に生まれる。父は豊臣家の老中村式部少輔一氏の弟で、大坂の陣の後、京都に隠棲。千守の女婿となり吉文字屋を屋号とし、塗師職となる。名を玄弼、通称を八郎兵衛、杯斎・方寸斎・漆翁・勇山と号した。三千家の好み物を作り、また藤村庸軒と親しく、その好み物の「凡鳥棗」・「望月棗」を作った。元禄八年没。
	▽中村宗哲家は千家十職の一つとして知られ、代々千家の好みに物を制作した。京都新町一条に住し、現在まで茶器塗物として活躍している。銘は哲一字で四代までは漆書を、五代からは針銘と他、蔭絵銘を入れ、別号を添える。
中村松間斎 なかむらしょうかんさい	明和元年生まれ。中村松甫斎の弟で通称宗治、諱が信直。兄松甫斎の跡を継ぎ津和野藩主亀井家の御抱えとなる。天保十二年没。作品は印籠と盃がほとんどで、銘は壺印を添えたもの、綴密な上作であり、藩主家伝来の「虫蔭絵印籠・菊花蛇蔭絵根付」を最上蜜蠟製と書き添えたものが多い。
中村松甫斎 なかむらしょうほうさい	石見津和野に生まれる。通称儀右衛門、諱は達孝。津和野藩主亀井家の御抱えの印籠蔭絵師。京都に出、さらに江戸で仙台藩主伊達家の蔭絵師棟梁中西松立斎達榮の許で五年間修業し帰郷する。文政七年没。作品は印籠と盃がほとんどで、銘は「松甫斎」に朱漆の花押を添える。
永昌 ながまさ	江戸末期の印籠蔭絵師。未詳。
中林笑山 なかばやししょうざん	幕末・明治の蔭絵師。天保八年生まれ。十歳で狩野派の絵を学ぶ。嘉永二年から文久元年まで白井可交斎に蔭絵を学び、諸道具・印籠等を製した。初め関根姓を名乗るが安政五年に出羽亀田藩士中林の家を継ぐ。師の没後、その家名が絶えるのを憂い、笑山を号した。明治五年より宮内省の御用品を製するようになり、明治天皇の「水龍御剣」へ東京国立博物館蔵「の拵新調に際しては梨子地蔭絵をした京橋弓町十九番地のち、銀座二丁目七番地に住。時代を反映した是真風の印籠が数点現存する。銘は「笑山（花押）」。

氏名	中村 宗哲（四代） なかむらそうてつ	中村 宗哲（五代） なかむらそうてつ	中村 紹哲 なかむらしょうてつ	中村 宗哲（六代） なかむらそうてつ	中村 宗哲（七代） なかむらそうてつ	中村 宗哲（八代） なかむらそうてつ	中村 宗哲（九代） なかむらそうてつ	中村 又斎 なかむらゆうさい	中山 江民 なかやまこうみん
事 蹟	享保十三年生まれ。宗哲（三代）の婿養子で、通称八郎兵衛、名は為安、深斎と号した。寛政三年没。	青沼雄安の子で明和四年生まれ。宗哲（三代）に師事し宗哲（四代）の婿養子となる。通称八郎兵衛のち八兵衛、守一・豹斎・漆畝と号した。連歌に長ず。作銘は彫銘で印ははじめ四代の唐草・漆を使ったが、天明大火以後は二重輪「哲」印とした。文化八年没。	宗哲（四代）の実子。幼名鉄五郎、のち宗兵衛。号を紹哲とす。「塗師／紹哲」の墨書に三代宗哲と同じ唐草「哲」印を捺す。	宗哲（五代）の長男で寛政六年生まれ。通称八兵衛、のち八郎兵衛。名は為一・喋斎と号した。文化十三年家督を弟に譲り別家した。天保十年没。	宗哲（五代）の子で宗哲（六代）の弟。寛政十一年生まれ。通称八兵衛、名は安一、獏斎・黒牡丹と号した。また尾張徳川家から得玄の号・印を拝領した。光格天皇遺物「夕顔蒔絵台子（宝鏡寺蔵）」を製作。弘化三年没。	宗哲（七代）の子。文政十二年生まれ。通称八兵衛、名は忠一、勁斎・聴雨・蜂老と号した。家伝資料、寸法書を整備した。フィラデルフィア万国博覧会に出品。井伊宗親好み「定家十二月蒔絵棗」を製作した。明治十七年没。「薄露蒔絵印籠（三井記念美術館蔵）」は在銘で共箱。旧グリーンフィード・コレクション「桜蒔絵印籠」は在銘で、どちらも黒蒔絵の作品である。	宗哲（八代）の婿養子。安政三年生まれ。通称喜三郎、名は義生、英斎と号した。シカゴ万国博覧会に出品。千家十職に数えられる。明治四十四年没。	文政十年生、伊勢松阪白子町に生まれる。通称栄次、天保十年に古屋で澤木一国斎に漆芸を学び、名古屋古屋法華寺町に住。明治十四年に大阪に出る。東京で尾張徳川家重宝の修理を行う。明治三十年没。三男又参は戸澤左近家を継いだ。	近代の蒔絵師。慶応三年生まれ。中山胡民の孫で、通称由次郎、号が江民。小川松民に師事し、胡民の重鎮。向島の法泉寺にある胡民の墓に合葬された。蒔絵振興会の「高砂蒔絵硯箱」が数多く現存する。多の作品は少なく、数点の煙管筒、「江民」とする。台「の現存が確認される。銘は「民」もしくは「遠山蒔絵熨斗箱」は小川松民に似る。銘は「民」もしくは「遠山蒔絵熨斗箱」は小川松民に似る。

氏名	奈良土佐	奈良庄五郎	奈良土佐	奈良安吉	成信	南溪	南枝	西川破光	西川安延	日光斎	二宮桃亭	勝軍木庵光英（初代）
事蹟	通称八郎左衛門、国名土佐。享保元年、御役塗由緒書を提出。享保三年、南鞘町国役尋に記載。寛延元年、朝鮮王国へ献上の「装剣奇賞」に印籠工として挙げられるが、印籠の現存は確認できない。宝暦九年武鑑までその名が見られる。	天明元年から寛政五年武鑑にその名が見られる。	文化六年生まれ。柴田是真にも学ぶ。坂本町一丁目住。万延元年に新調御道具を製作。文久元年、和宮御車修復。慶応二年没。	奈良土佐の実子・惣領で天保八年生まれ。御蒔絵師見習いを勤め、慶応二年に家督を相続した。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	明治の印籠蒔絵師。未詳。「李南溪」と銘す。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	明治の漆工。文政十一年生まれ。通称多左衛門。はじめ囊物商丸屋利兵衛で奉公し嘉永五年に開業し一閑張・破翁細工を製作し破光と号した。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	明治の印籠蒔絵師。未詳。小判形の印籠が多く現存。銘は「日光斎」。	はじめ名は遥、後に子果、字は子圭または断中、桃亭と号した。安芸吉田の人。代々医者で吉益東洞に学び、その娘を妻とする。後に江戸に出て、文政十二年没。	在府中の藩主より「勝軍木庵」の墨書の特使をもつて授けられ、硯箱の製作を命じられ、三年の満開を写した「勝軍木蒔絵文台・硯平齊貴より、盆栽のヌルデの満開をかけた完成。その功により箱の製作を命じられ、三年の満開を写した「勝軍木蒔絵文台・硯

氏名	勝軍木庵春光（二代） ぬるであんしゅんこう	野原貞明 のはらていめい		野村九圭（初代） のむらきゅうけい	野村樗平（二代） のむらちよへい	野村九甫（三代） のむらきゅうほ
事蹟	勝軍木庵光英（初代）の子で弘化四年生まれ。幼名宗太郎。永正・光斎と号し、父の没後、勝軍木庵を相続。明治三十九年没。「光」銘や「春光」銘が多いとされる。	明治期の介甲象嵌の巨匠。安政五年、葛飾郡篠崎の星野文左衛門の次男に生まれる。通称石五郎、後に野原家の養子となる。長じて中山貞民に入門して十一年修業、さらに石川光明に師事した。内外の博覧・展覧会に出品。明治天皇、昭憲皇太後の御用品も製作した。大正十三年没。本所の華厳寺に葬られる。額面・文房具・調度の他、煙管筒も見られる。銘は象嵌で「貞明」とするものが多い。	▽野村次郎又家は江戸中期から代々徳川家の「青貝堆朱瀬戸物蒔絵師」を勤めた。召抱えの正確な時期と由緒は不明であるが、小川破翁の没後であり、破翁細工の流行により、將軍家においても破翁細工の職人を必要としたためと考えられる。明治維新まで代々次郎兵衛・次郎又が続いたが、系図・由緒書が現存しないため詳細は不明。	江戸中期の印籠蒔絵師。通称次郎又、九圭と号した。古満家五代休伯安巨の門人。幕府御用の「青貝堆朱瀬戸物蒔絵」として寛延二年武鑑からその名がみられる。「御細工所控師」として寛延二年武鑑から野村次郎又の下絵・製作になる「厚貝尽海草蒔絵鞍轡」・「厚貝蜻蛉蒔絵鞍轡」・「貝魚尽大形料紙硯箱」・「朱地芥子蝶蒔絵小形料紙硯箱」の下絵があるが、いずれも破翁細工を思わせる作品である。これらは寛延元年に徳川將軍家から朝鮮国王への献上品であり、遅くともそれまでには召抱えられてゐる。「武鑑」による確認できる。目で、宝暦九年までその名を確認できる。	江戸後期、寛政頃の印籠蒔絵師。宝暦十年武鑑から野村家は次郎兵衛となつてゐる。すなわち野村九圭の実弟で通称次郎兵衛、樗平・青秀畔と号した人である。これまで九圭の跡は九甫が継いだとされてきたが、その前に樗平が兄の跡を継いだと考えられる。十代将軍徳川家治の世子家基所用「唐子蒔絵箱」(靈鑑寺蔵)も樗平の作と推測される。伊勢亀山藩主石川家伝来の「魚尽蒔絵印籠」や高遠藩主内藤家伝来の「鶏蒔絵印籠」など諸大名家に破翁風の印籠・根付が伝来し、今日も多く作品が現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。古満巨柳の門人で、通称源三郎。号は諸品に「久甫」と記すが、休蒔絵硯箱「三夕蒔絵硯箱」があるところを見ると、考えらる。誤用職人野村家の株を買って野村九圭家の跡目相続し「九甫」と号し、日本橋檜物町に住したという。ただ「九甫」の可能性がある。門人として貞次郎、現存作品の多い野村九國同甫の可能性がある。門人として貞次郎、和吉・長左衛門の名が伝えらる。

氏名	野村九国 のむらじゅうこく		野村四郎右衛門（初代） のむらしろうえもん	野村四郎右衛門（二代） のむらしろうえもん	野村源三郎（三代） のむらげんざぶろう	野村四郎右衛門（四代） のむらしろうえもん	野村治兵衛（五代） のむらじへえ	野村忠兵衛（六代） のむらちゅうへい	野村庄七 のむらじょうしち
事蹟	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。経歴未詳であるが、野村九圭家の可能性もある。破翁風の印籠が多く見られる。	▽野村四郎右衛門は尾張出身の蒔絵師で、享保十三年に幕府御細工所に召えられた。御細工頭支配御蒔絵師。慶応三年には御納戸頭支配となる。代々の仕来りとして相続の際に御目見。自宅での御用の際には町触、御紋付高張提灯を立て、御用道中には伝馬証文を与えられた。	享保十三年、幕府御細工所に召出され、定式塗蒔絵御用を勤める。世良田東照宮・三河瀧山寺・日光諸堂修復御用の際、伝馬証文を下される。また紅葉山有徳院廟・日光本坊修復御用なども勤めた。明和八年に没。	野村四郎右衛門（初代）の養子で明和八年に相続。日光修復御用・増上寺台徳院廟修復御用・種姫君様婚礼道具・淑姫君様誕生御用・榊宮御方下向御用などを勤めた。文化五年病氣に付き引込み、同七年没。	文化五年養父野村四郎右衛門（二代）が病氣につき養子となり御用見習となりさらに相続。姫君様御入興道具・日光修復御用・峯姫君様引移御用を勤め、文政元年引退し、同二年没。	文政元年、養父野村源三郎（三代）の跡職を相続。浅姫君様引移御用・元姫君様引移御用を勤めた。同六年病氣につき引込み、同八年没。	野村四郎右衛門（四代）の養子。文政六年に相続して御本丸大奥御用を勤め、小納戸御用でオルゴール香箱・ガラス張青貝菓子器を製作。文政七年遠眼鏡根付修復、鼈甲張印籠を製作。翌年西丸小納戸御用でギヤマン切子重箱・吸物碗を製作した。その他盛姫君・文姫・溶姫・和姫・末姫・喜代姫・永姫・泰姫君様引移御用を勤めた。弘化四年没。	文化元年生まれ。野村治兵衛（五代）の養子。弘化四年に相続。末姫君様新規則御具・精姫君様引移御用・壽明君入興道具・線姫君様引移御用・西丸新規則御具・美賀君御方御用・本丸新規則御具・実成院様引移御用・世良田東照宮修復塗御用などを勤めた。	幕末・明治の堅地師。文政四年生まれ。十三歳で菱田の喜三郎（渡邊喜三郎）について修業、二十五歳で開業する。紀伊徳川家の用品を製したが、明治十一年より精工社の製品を製造。東京赤坂表二丁目六番地に住んだ。

氏名	橋本又次郎（二代） はしもとまたじろう	橋原文藏 はしはらぶんさい	佰川斎 はくせんさい	白雲斎 はくうんさい	萩野高山 はぎのすうざん	氏名
長谷川宗永 はせがわそうえい	幕末・明治の鞘塗の第一人者、今日一般に「はしー」と呼ぶのはこの三代である。文化十四年生まれで幼名市三郎。放蕩者であったが、父の重病にあり、前非を悔い改め鞘塗の技を磨く。職人氣質で奇行が多い。橋本市・はしー酔阿弥と号した。擬竹塗を發明して額面・花生・菓子器・煙管などを制作し内外の博覧会で好評を博す。芝新銭座三番地に住。明治十五年明治天皇御剣の「煤竹塗仕込杖拵」東京国立博物館蔵」を製作。同年没。長泉寺に葬られる。	江戸末期の鞘塗師。通称又次郎・市蔵。塗師又と呼ばれる。安政六年没。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	嘉永元年、長谷川光祇の長男に生まれる。通称鍊太郎、宗永と号した。日本漆工会の創設に尽力。商議員、後に特別会員。明治四十四年没。在銘の櫛が多数現存する。
長谷川光祇 はせがわこうし	橋本市蔵（三代）の兄。文化四年生まれ。橋庄と称した。天保五年に開業。東京芝露月町十番地住。廃刀令後は竹塗の箱類を製作した。内国勸業博覧会出品。	橋本市蔵（三代）の兄。文化四年生まれ。橋庄と称した。天保五年に開業。東京芝露月町十番地住。廃刀令後は竹塗の箱類を製作した。内国勸業博覧会出品。	橋本市蔵（三代）の兄。文化四年生まれ。橋庄と称した。天保五年に開業。東京芝露月町十番地住。廃刀令後は竹塗の箱類を製作した。内国勸業博覧会出品。	橋本市蔵（三代）の兄。文化四年生まれ。橋庄と称した。天保五年に開業。東京芝露月町十番地住。廃刀令後は竹塗の箱類を製作した。内国勸業博覧会出品。	橋本市蔵（三代）の兄。文化四年生まれ。橋庄と称した。天保五年に開業。東京芝露月町十番地住。廃刀令後は竹塗の箱類を製作した。内国勸業博覧会出品。	幕末・明治の印籠蒔絵師。文政八年、桜田伏見町の質商に生まれる。幼名松次郎、後通称を松兵衛。十三歳で道具蒔絵師、関陸遊齋に入門するが飽きたらず、翌年印籠蒔絵師の石井有得齋へ初代へ入門。蒔絵では壽得齋と号し、同時に佐竹永海に画を学んで永立と号す。安政四年某諸侯より召し出されて家士に準じ、両国矢の倉に住し、永々子光祇と改号した。その作品は印籠・鞘・煙管筒等緻密な小道具が多い。また柴田是真とも交わりが深い。明治に奉進の手炉を製作する。維新後、丸屋利兵衛より明治天皇十六年に没した。銘文は、初子が「壽得齋（永立）」で、多くは「光祇（花押）」、永々子光祇（花押）」などとなる。
橋本庄右衛門 はしもとしやうえもん	安政三年芝宇田川町に生まれる。明治三年橋本市蔵の門に入り、同十三年養子となつて四代目を襲名。同二十七年東京美術学校漆工科教官となり三十年勤める。大正十三年没。長泉寺に葬られる。	安政三年芝宇田川町に生まれる。明治三年橋本市蔵の門に入り、同十三年養子となつて四代目を襲名。同二十七年東京美術学校漆工科教官となり三十年勤める。大正十三年没。長泉寺に葬られる。	安政三年芝宇田川町に生まれる。明治三年橋本市蔵の門に入り、同十三年養子となつて四代目を襲名。同二十七年東京美術学校漆工科教官となり三十年勤める。大正十三年没。長泉寺に葬られる。	安政三年芝宇田川町に生まれる。明治三年橋本市蔵の門に入り、同十三年養子となつて四代目を襲名。同二十七年東京美術学校漆工科教官となり三十年勤める。大正十三年没。長泉寺に葬られる。	安政三年芝宇田川町に生まれる。明治三年橋本市蔵の門に入り、同十三年養子となつて四代目を襲名。同二十七年東京美術学校漆工科教官となり三十年勤める。大正十三年没。長泉寺に葬られる。	
橋本市蔵（四代） はしもといちどう	幕末・明治の鞘塗の第一人者、今日一般に「はしー」と呼ぶのはこの三代である。文化十四年生まれで幼名市三郎。放蕩者であったが、父の重病にあり、前非を悔い改め鞘塗の技を磨く。職人氣質で奇行が多い。橋本市・はしー酔阿弥と号した。擬竹塗を發明して額面・花生・菓子器・煙管などを制作し内外の博覧会で好評を博す。芝新銭座三番地に住。明治十五年明治天皇御剣の「煤竹塗仕込杖拵」東京国立博物館蔵」を製作。同年没。長泉寺に葬られる。	江戸末期の鞘塗師。通称又次郎・市蔵。塗師又と呼ばれる。安政六年没。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	
橋本市蔵（三代） はしもといちどう	幕末・明治の鞘塗の第一人者、今日一般に「はしー」と呼ぶのはこの三代である。文化十四年生まれで幼名市三郎。放蕩者であったが、父の重病にあり、前非を悔い改め鞘塗の技を磨く。職人氣質で奇行が多い。橋本市・はしー酔阿弥と号した。擬竹塗を發明して額面・花生・菓子器・煙管などを制作し内外の博覧会で好評を博す。芝新銭座三番地に住。明治十五年明治天皇御剣の「煤竹塗仕込杖拵」東京国立博物館蔵」を製作。同年没。長泉寺に葬られる。	江戸末期の鞘塗師。通称又次郎・市蔵。塗師又と呼ばれる。安政六年没。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	
橋本市蔵（二代） はしもとまたじろう	幕末・明治の鞘塗の第一人者、今日一般に「はしー」と呼ぶのはこの三代である。文化十四年生まれで幼名市三郎。放蕩者であったが、父の重病にあり、前非を悔い改め鞘塗の技を磨く。職人氣質で奇行が多い。橋本市・はしー酔阿弥と号した。擬竹塗を發明して額面・花生・菓子器・煙管などを制作し内外の博覧会で好評を博す。芝新銭座三番地に住。明治十五年明治天皇御剣の「煤竹塗仕込杖拵」東京国立博物館蔵」を製作。同年没。長泉寺に葬られる。	江戸末期の鞘塗師。通称又次郎・市蔵。塗師又と呼ばれる。安政六年没。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	
橋原文藏 はしはらぶんさい	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称友吉、文斎と号した。江戸和泉町住。鈴木古巖の師。	
佰川斎 はくせんさい	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	
白雲斎 はくうんさい	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。破翁風の印籠を得意とした。未詳。	
萩野高山 はぎのすうざん	通称、庄兵衛。弘化三年江戸京橋南伝馬町の茶道具商堺屋庄兵衛の子に生まれ。幼少より銅器・漆器・陶器の修理を学ぶ。書家の市河米庵が「嵩山」の号を授ける。樽正町住。「さか庄」と呼ばれ光悦・光琳・常憲時代の印籠の模造を得意とした。震災直後より品川御殿山の益田鈍翁に召抱えられる。昭和四年没。箱書は「嵩山」「庄兵衛」などとする。	通称、庄兵衛。弘化三年江戸京橋南伝馬町の茶道具商堺屋庄兵衛の子に生まれ。幼少より銅器・漆器・陶器の修理を学ぶ。書家の市河米庵が「嵩山」の号を授ける。樽正町住。「さか庄」と呼ばれ光悦・光琳・常憲時代の印籠の模造を得意とした。震災直後より品川御殿山の益田鈍翁に召抱えられる。昭和四年没。箱書は「嵩山」「庄兵衛」などとする。	通称、庄兵衛。弘化三年江戸京橋南伝馬町の茶道具商堺屋庄兵衛の子に生まれ。幼少より銅器・漆器・陶器の修理を学ぶ。書家の市河米庵が「嵩山」の号を授ける。樽正町住。「さか庄」と呼ばれ光悦・光琳・常憲時代の印籠の模造を得意とした。震災直後より品川御殿山の益田鈍翁に召抱えられる。昭和四年没。箱書は「嵩山」「庄兵衛」などとする。	通称、庄兵衛。弘化三年江戸京橋南伝馬町の茶道具商堺屋庄兵衛の子に生まれ。幼少より銅器・漆器・陶器の修理を学ぶ。書家の市河米庵が「嵩山」の号を授ける。樽正町住。「さか庄」と呼ばれ光悦・光琳・常憲時代の印籠の模造を得意とした。震災直後より品川御殿山の益田鈍翁に召抱えられる。昭和四年没。箱書は「嵩山」「庄兵衛」などとする。	通称、庄兵衛。弘化三年江戸京橋南伝馬町の茶道具商堺屋庄兵衛の子に生まれ。幼少より銅器・漆器・陶器の修理を学ぶ。書家の市河米庵が「嵩山」の号を授ける。樽正町住。「さか庄」と呼ばれ光悦・光琳・常憲時代の印籠の模造を得意とした。震災直後より品川御殿山の益田鈍翁に召抱えられる。昭和四年没。箱書は「嵩山」「庄兵衛」などとする。	

氏名	はせがわこりん 長谷川巨鱗斎	はせがわみねじろう 長谷川峰次郎	はたじごえもん 畑治五右衛門	はたやごのじょう 畑弥五之丞	はたげんごえもん 畑源五右衛門	はなかわまさゆき 花川政行	はべつ 跛亀	はやかわさいうんさい 早川彩雲斎	はやしくへい 林九兵衛	はらだほうえつ 原田芳悦	ばんしょうさいじょうほ 萬松斎常甫	はんじろう 半次郎
事蹟	江戸後期、文化・文政頃の印籠蒔絵師。号が巨鱗斎、諱が重美。精密な高蒔絵・研出蒔絵を得意とした。一常嘉斎印籠下絵と合致するものも多く、山田常嘉斎一門と考えられる。また狩野美信・狩野英信・土佐光貞などの下絵によるものがある。多くの印籠が現存するが、偽名はさらに多い。また道具類は少ないが狩野美信下絵の「竹蒔絵煙草盆」が現存する。銘は「長谷川巨鱗斎の作」もしくは「長谷川重美作」で印は壺形で二種類ある。印籠の銘は底部左下を掟とする。	起立工商会社の工人。同社で職人を五人から八人使役していた。第一回内国勸業博覧会にも出品。	通称、治五右衛門、諱は好永。安土桃山時代に長崎で唐人から密陀絵を習う。越中城端別院善徳寺の門前で塗師屋を開く。佐々木又兵衛に伝授した。佐々木又兵衛が小原治五右衛門の祖である。	加賀金沢前田家の城端蒔絵師。畑治五右衛門の直系とされる。元禄十四年前田家に召出。二十五俵を給される。密陀絵に蒔絵、青貝を併用することを開明した。	畑次郎右衛門の三男畑五之丞の実弟。はじめ新規召抱えを願いが認められなかった。享保十九年、針細工者不島源六郎の弟子が不器用なため、畑源五右衛門を養子とし、切米二十五俵、漆細工兼芸地謡御細工者に召出される。元文二年養父の没後に相続、漆細工兼芸地謡御細工者に召出される。以後加賀の城端蒔絵は不島家に伝えられる。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の江戸の印籠蒔絵師。未詳。	江戸時代中期の江戸の印籠蒔絵師。未詳。金森宗和の好み物を制作した。文房具・茶道具の作品がある。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の塗師。幕府の御小屋で堆朱出羽の塗師を勤めた。	

氏名	ひしかたえいこう 土方永耕	ひしかたまさかず 土方政一	ひしかたよしお 土方良生			ひしだなりのおぶ 菱田成信	ひしだえいきゅう 菱田栄休	ひしだじんえもん 菱田甚右衛門	ひしだたんば 菱田丹波	ひしだやそはち 菱田八十八	ひしだじとく 菱田自得	事蹟
	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。	近代東京の櫛蒔絵師。	近代東京の櫛蒔絵師。本名吉雄。在銘の櫛が多く現存。	類が現存せず詳細は不明。 白金町一丁目で、後に神田皆川町二丁目となった。由緒書・系図	▽菱田家は江戸初期に幸阿弥家から分家し、幸阿弥・奈良・両栗 本・鈴木・榎本・太田と共に江戸開府以来、代々塗物蒔絵御用を 勤めた家である。代々幕府から四十俵二人扶持を給されて明治維 新まで続いた。代々正月二日に御目見を許され、拝領屋敷は初め 白金町一丁目で、後に神田皆川町二丁目となった。由緒書・系図	通称源之丞、諱が成信。房貞の嫡子と見られるが、後代が房明を 称していることを考えると、相続しなかった可能性もある。	通称甚右衛門、号が栄休、諱が房貞。延宝八年、巖有院廟に蒔絵 をした功績により翌年七人扶持が与えられた。白金町一丁目住。	菱田房貞から丹波房明が登場するまで約八十年の間があり、菱田 甚右衛門が続くことから同名の甚右衛門が二、四代続いたと考え られる。	国名は丹波、諱が房明。宝暦頃に相続し、明和・安永と菱田丹波 が続き、国名の呼称を許されたのは菱田家が最初である。「六玉川蒔 絵料紙箱・硯箱（大阪市立美術館蔵）」は現存唯一の作品で、表 は一閑張地に狩野典信が墨絵で直書したもの、内部が菱田丹波 の作で見事な研出蒔絵がある。「菱田丹波房明（花押）」との隠 銘がある。銘に国名を入れた非常に珍しい例でもある。	天明頃に相続したとみられる。幕末まで八十八が約八十年続き、 同名八十八が二、三代続いたものとも見える。	文化十一年生まれ。国名は駿河。号が自得または自得斎、別号友 松軒。徳川将軍の御蒔絵棟梁上席で、幕末期の御細工所の最高友 権力者。安政の大獄の際の従士目付からの風聞書によれば、職人 達の人心掌握に巧みで、役人との癒着が報告されている。その後 万延元年に新調御道具を製作。文久元年、和宮入城の御車を修 復。仕手頭に田邊源助、塗師に喜三郎（後の渡邊喜三郎）、下絵 書きに川鍋暁齋という最高の下職集団を率いた御蒔絵師棟梁。明 治十二年没。作品は「苦字蒔絵棗」と狩野養信下絵による「鶴蒔 絵三組盃」のみが現存する。	

氏名	菱田大和	媚川	英光	百英齋	平井松花齋	平井船玉齋	広瀬永治	笛木松風齋了甫（初代）	笛木松風齋了甫（二代）	笛木岩三郎	笛木松風齋由甫	深山美峰
事蹟	菱田自得の嫡子で御用見習を勤めたと考えられる。文久年間、太田播磨とともに禁裏へ献上の小筆笥を製作した。	江戸末期の印籠蒔絵師。	江戸中期の印籠蒔絵師。作風から安永頃の人と推測される。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。通称松五郎、名が正常。神田塗師町住。天保から安政頃に活躍した。印籠や盃が現存する。銘は「松花齋」「福井市立郷土歴史博物館蔵」などの上作には「松花齋正常作」銘が入る。	幕末・明治の蒔絵師。嘉永元年生まれ。通称源次郎、十二歳から永岡千鶴齋に蒔絵を習い、船玉齋と号し、さらに千鶴齋の下職となる。明治十年に開業。	江戸後期の印籠蒔絵師。幸阿弥派の蒔絵師で師家の姓を与えられたと推測される。耕齋と号した。未詳。銘は「広瀬永治（花押）」と「幸阿弥永治（花押）」銘がある。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸音羽町に住。天保元年没。「鶴蒔絵印籠」が現存。	江戸後期の印籠蒔絵師。笛木松風齋了甫（初代）の実弟。江戸音羽町に住。「梅月蒔絵印籠」が現存し、「松風齋入道了甫（花押）」の梅月蒔絵印籠（メトロポリタン美術館蔵）と下絵が共通する。	幕末明治の印籠蒔絵師。文化八年、笛木松風齋了甫の子に生まれる。通称岩三郎。実父に蒔絵を学び、天保十年に山田家の養子となつて七代を相続した。男子がなく、嘉永元年に山田家の養子と	江戸後期の印籠蒔絵師。通称房次郎。稲垣霞松齋が天保十年から嘉永元年まで師事しており、この頃に活躍している。そのため笛木松風齋了甫の親族と考えられる。岡田閑林下絵で弘化元年の「菊蒔絵印籠」が現存し「由甫（花押）」銘となっている。また「不忍池蒔絵盃（大阪市立美術館蔵）」は「由甫作」銘である。	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。作品から昭和と推測される。

藤林橋堂 ふじばやしきつどう	安政六年金沢立町に蒔絵師昌平の子に生まれる。通称昌吉。幼に安政父に蒔絵を学び、また東京で太田勇蔵に学ぶ。号が橋堂。金沢伝馬町に住。また画を佐々木泉龍に学ぶ。のち大阪に転居し大坂市南区八幡町百三十一に住。昭和十三年に大阪藤井寺市で没した。
藤川文綺堂（二代） ふじかわぶんきどう	天保十一年藤川文綺堂（初代）の次男に生まれ、通称新造。兄が病弱につき家業を継ぎ、二代となり蘭斎を号した。内外の博覧会に出品。大正四年没。
藤川文綺堂（初代） ふじかわぶんきどう	玉楮象谷の実弟で文化五年生まれ。幼名清次郎、のち舜造。兄が藩主より玉楮の姓を賜ったため、藤川姓を継いだ。屋号を文綺堂とし、黒斎と号した。内国勸業博覧会などで受賞多数。明治十八年没。キンマ・存星・彫漆等の茶器・盆印籠などが現存する。
藤井満義（三代） ふじいみつよし	二代の長男在壽が造酒司常大掾徳美家を継いだため、次男の満義が継ぎ、藤蔵を称し、上京榎木町衣棚西入に住した。
藤井満喬（二代） ふじいみつたか	享和三年生まれ。初代光忠の子で光喬。たびたび転居を繰り返すが、後堺町押小路上ルに住。主に重箱・提重・盃などを作る。安政年間、御所炎上により島津家より進献の屏風筆笥（青山貫洪・浅野友七・木下徳兵衛・永田習水・藤井満喬・山本武光らで合作）に蒔絵した。慶応二年没。
藤井満忠（初代） ふじいみつただ	明和二年生まれ。通称藤助、名が光忠。蒔絵の名工で堺町通二条上ルに住。一説に岸駒に画を学びその下。絵になるものが多かったという。文政五年没。東大谷に葬られる。
福島朝雪 ふくしまちようせつ	近代の蒔絵師。本名福島芳次郎。文芳斎・朝雪と号した。農展で活躍。
福島泰哉 ふくしまたいさい	近代の蒔絵師。本名福島敏慎。池田泰真の門人で「古満」印を使用した。是真風の作品が多い。東京巢鴨宮仲町住。大文献上品を製作。文房具・道具類・煙管筒などが見られ、煙管筒に名品が多い。
福岡卜齋 ふくおかぼくさい	京都の指物師駒沢利斎の系統を引く指物師の家柄で、卜齋はその四代目で通称鐵五郎。石黒喜八のもとで修業、二十三歳で卜齋を相続、幕府や諸侯の茶席用の道具を製作し、江戸随一の指物師といわれた。維新後ウィーン万国博覧会で有功賞牌、内国勸業博覧会で花紋賞牌を受賞。柴田是真・池田泰真・柴田真哉などによる本地蒔絵の指物を多く手懸け、作品には瓢箪形に「ト」の字の焼印を押した。また高井泰令の作品にもしばしばこの銘がみられ、後継が存在したと考えられる。浅草区瓦町二十九番地住。
福岡萍哉（四代） ふくおかひょうさい	本名縫之助。都築幸哉の門人。
氏名	事蹟

氏名	藤原鴨月 ふじわらおかげつ	浮船 ふせん	浮船 ふせん	浮船齋延秀 ふせんさいのぶひで	浮船齋秀勝 ふせんさいひでかつ	二木成抱 ふたぎせいほう	船橋舟珉 ふなはししゅうみん	卓亮 ふりよう	古市桐谷 ふるいちとうこく	平川齋定重 へいせんさいさだしげ	平川齋定久 へいせんさいさだひさ	峯雲齋 ほううんさい	宝珠齋 ほうじゆさい	峯松齋 ほうしようさい	宝真 ほうしん	寶川齋 ほうせんさい	豊遊 ほうゆう
事蹟	近代京都の蒔絵師。本名由之助。山田伊三郎に師事し鴨月と号した。京都市下鴨に住。昭和十三年頃没。	江戸後期の印籠蒔絵師。長映斎とも号した。印籠と盃が多く現存。	江戸後期の印籠蒔絵師。印籠と盃が多く現存。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸の人。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸の人。	近代加賀の蒔絵の名工。明治十七年生まれ。山本利成に蒔絵を学ぶ。帝展・新文展・日展で活躍。モダンなデザインと堅実な技術で知られる。金沢市上柿木畠一の三十六に住。文房具・酒器などが現存。昭和二十九年没。	近代の蒔絵師。安政六年生まれ、通称岩次郎。十二歳で植松抱民に入門。初号、光民のちに舟珉また長流とも号した。師抱民とともに精工社の工人となる。浅草区小島町十五番地、のち下谷区上野桜木町に住。帝展無鑑査。没年不詳。	明治初期の印籠蒔絵師。東京の人と考えられる。	江戸後期の塗師。美濃関の人で、通称権左衛門。大島甲斐守の家臣となる。文化頃、擬堆朱を發明し、また箔絵に巧であったという。法橋に叙せられる。擬堆朱は池田健蔵に授け、健蔵から広まった。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸の御小屋系の蒔絵師と考えられる。印籠が現存し、銘は「平川齋定重」とする。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。平川齋定重・定久は同じ一派で、江戸御小屋系の蒔絵師と考えられる。印籠や盃が現存。「平川齋定久作（花押）」とする。	幕末・明治の印籠蒔絵師。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。琳派風の作風である。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。

氏名	増田 朴斎 ますた ぼくさい	正文 まさふみ	政利 まさとし	正武 まさたけ	正茂 まさしげ	正章 まさあき	前山 光真 まえやまこうしん	本間 舜華 ほんましゆんか	本多 生齋 ほんだしろうさい	堀田 瑞松 ほったすいしろう	細田 鍊五郎 ほそだてつごろう	星野 松花齋 ほしのしょうかさい	星野 伊之助 ほしのいのすけ	保坂 萬平 ほさかまんべい
事蹟	明治の指物師。代々の指物師でその四代目。嘉永二年に生まれ、父直吉に朴斎に学び、父の死後伯父に五年習う。通称を猪之助とし、朴斎と号した。主に茶器を制作していたが、明治元年から用筆・書棚の類を製作した。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。狩野典信下絵の印籠がある。	明治の蒔絵師。通称藤蔵。柴田真哉の門人で光真と号した。煙管筒や櫛が多く現存。	近代東京の蒔絵作家。明治二十七年山形県生まれ。辻村松華に師事。伝統的な草花を斬新な高蒔絵で表現した。第一回文展覧で文部大臣賞を受ける。農展・新日展で活躍。豊島区要町一―五十一に住。平成三年没。	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。作品から明治末と推測される。	近大の彫刻家。天保八年但馬豊岡に生まれる。初め寸松と号し彫刻・鉄筆を得意とし、禁裏御用を勤めた。孝明天皇に「紫檀波模様台」を彫り上げて献上し、瑞松の号を賜った。また維新後、御前製作した、船舶の防腐塗装の研究でも知られる。大正五年に没。	江戸末期の蒔絵師。幕府御小屋において御蒔絵師の関大隅・榎本筑後・圓阿弥筑前の仕手頭を勤めた。	幕末・明治の蒔絵師。天保五年生まれ。十三歳で星野伊之助入門。安政三年、師の死去により師家を相続。伊之助を称し、松花齋を号した。第一回内国勸業博覧会で花紋賞牌を受け、ウィーン万国博覧会・フィラデルフィア万国博覧会に出品。東京下谷練堀町十四番地に住。	江戸末期の蒔絵師。徳川将軍の小納戸御用を勤める。安政三年没。	幕末・明治の蒔絵師。天保四年生まれ。三代前より中道具塗師で、父仙太郎の代から幕府御細工所の用達となり、常に職工三十人を使役したが維新で零落した。その後輸出品を作り宮内省御用品も製作するようになる。東京本銀町一丁目十六番地住。

氏名	水谷秋登甫 みずたにしゅうとほ	江戸中期の江戸の印籠蒔絵師。小川破笠と同時代の人で古墨蒔絵や古銭散蒔絵の印籠を得意とした。未詳。文房具・印籠が現存。
	三浦明峰 みうらめいほう	昭和の蒔絵師。明治三十四年生まれ。松田抱明に師事。東京戸邊工房の雇いで研出蒔絵の印籠を得意とした。また東京国立博物館で修復の仕事を。昭和五十年没。銘は「明峰」に「三浦」の方形印を添える。
	萬鱗斎 まんりんさい	江戸後期の蒔絵師。作風から御小屋系の蒔絵師。「桃蒔絵盃」が現存。
	萬葉斎政義 まんようさいまさよし	江戸後期の印籠蒔絵師。
	萬次郎 まんじろう	江戸末期の塗師。御小屋で幸阿弥因幡の塗師を勤めた。
	松本松壽斎 まつもとしょうじゅさい	幕末・明治の蒔絵師。文政5年生まれ。通称八十八。十七歳で高井得好斎（初代）入門。彫刻を野本敬二郎より伝授。天保十一年に開業。芝中門前町一丁目に住。第一回内国勸業博覧会で花紋賞牌。のち内務省・各県賞盃を製作した。「菊蝶蒔絵印籠（大阪市立美術館蔵）」が現存。「松壽斎／得山作（花押）」銘がある。
	松野應真 まつのおうしん	江戸末期の印籠蒔絵師。柴田是真の門人だが若くして没した。
	松田抱明 まつだほうめい	近代東京の蒔絵師。通称彦次郎、号が抱明。植松抱民の門下で、保井抱中・船橋舟珉とともに、その三羽鳥の一人に数えられていた。神田区元佐久間町六に住。
	松田恠交斎 まつだしょうこうさい	幕末・明治の印籠蒔絵師。天保二年生まれ。通称久三郎。白井可交斎に蒔絵を習い、嘉永六年より幕府用達鈴木某・栗本某の印籠・婚礼調度の下請けをしていた。維新後は三河屋幸三郎・小林幸次郎の嘱品を製した。銘は「恠交斎」三字銘だが、「恠交斎常儀作（花押）」銘の印籠が一点だけ現存する。
	松田権六 まつだごんろく	明治二十九年金沢生まれ、六歳から兄に就いて蒔絵を学び、石川県立工業学校・東京美術学校を卒業。帝展・新文展・日展に出る。昭和十八年に東京美術学校教授、三十年に重要無形文化財となる。昭和六十一年没。古典研究に基づき製作に反映した。
	松木豊慶 まつきほうけい	生没年未詳。幕末の彫工で、通称豊次郎、豊慶と号した。煙管筒・印籠・根付・櫛などに細密な彫漆を施した。門人として奥谷熊吉の名を確認でき、豊玉銘、久慶銘の作品も作風は近く、豊慶一派と考えられる。
	松井定一 まついさだいichi	佐一の子で業を継ぐ。京都縄手大道大和橋上ルに住。
	松井佐一 まついさいichi	江戸末期の櫛蒔絵師。

氏名	水野雨橘 みずのうきつ	三田村古真 みたむらこしん	三田村自芳 みたむらじほう	光寿 みつとし	光之 みつゆき	皆川露道 みながわろどう	皆川春女 みながわしゅんじょ	光賀 みつよし	光義 みつよし	民斎 みんさい	村上仲靖 むらかみなかやす	茂英 もえい	最上熊次郎 もがみくまじろう	持栗安太郎 もちぐりやすたろう
事蹟	江戸後期の名古屋の挽物師。天明四年生まれ。通称松兵衛、雨橘を業として棗・椀などを作る。材は四、五年風雨に曝したものを、使いは、外は木地をそのままとした。寺に葬られる。また自作を市中で見つけたら買い取って破棄するように遺言したと伝えられる。	明治の蒔絵師。通称三之助、号が古真。神田区松富町六番地住。煙管筒や櫛が多く現存。	近代東京の蒔絵師。明治十九年摺師、三田村勇の四男に生まれる。十四歳で赤塚自得に入門。明治三十八年漆工青年会に「扇面蒔絵盃」を出品して一等賞を得る。帝展で特選、無鑑査となる。昭和五十四年没。文房具・茶道具の作品が見られる。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	し。銘は行書で「露道」に「皆川之印」とする。在銘の櫛が現存した。内国博覧会へは印籠寄せ手筆筒を出品した。在銘の櫛が現存した。二。郎の嘱品を製した。細密な花鳥に長ずる。維新後は横浜の箕田長用品を製していた。京橋弓町の梶川平三郎に学び、以後徳川家の幕末・明治の蒔絵師。文政十一年生まれ。通称常次郎、露道と号す。東京三ノ輪住。京橋弓町の梶川平三郎に学び、以後徳川家の川露道の娘と推測される。箕輪三軒家住。起立工商会社の蒔絵師。皆	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	明治の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。在銘の盃が現存。	幕末・明治の塗師。出羽飽海郡八幡町観音寺の生まれ。庄内の塗師善斎に学び、庄内金工の鷺田光親・桂野赤文に彫法を学ぶ。通称善作、別号謙斎。松月堂また「村靖」と銘を切ることが多い。出羽大泉や酒田の広野、鶴岡の島に住んだ。印籠は漢画の堆朱・堆黒が多く、松葉紅葉存星の鞘や「堆黒海老鞘拵」なども現存し庄内拵の名手としても知られる。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	幕末・明治の塗師。起立工商会社で職人を十から十五人使役していた。	江戸末期の蒔絵師。幕府御小屋において御蒔絵師の太田播磨の仕

氏名	望月重蔵 もちつきじゆうぞう	望月半山 もちつきはんざん	基重 もとしげ	基董 もとた	百五郎 ももごろう	守川 もりかわ	森川紫山 もりかわしざん	守正 もりまさ	守屋松亭 もりやしやうてい	盛之 もりゆき	矢代永政 やしるながまさ	保井抱中 やすいほうちゆう	安川 やすかわ	泰重 やすしげ
事蹟	江戸後期寛政頃の印籠蒔絵師。「装剣奇賞」所載の江戸の人。	生没年未詳。江戸福井町に住み、その家には梅の太木があったので「梅の木半山」と呼ばれた。「舞楽蒔絵提筆笥」（昭和四年男爵久我家並島田家所蔵品入札・現東京国立博物館蔵）をはじめ印籠や文房具が多く現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。林忠正によれば「基重ト同人ノ様二重ハル」という。	江戸後期の印籠蒔絵師。作風から京都の人と考えられる。	江戸末期の塗師。幕府の御小屋で御蒔絵師圓阿弥筑前の塗師を勤めた。	幕末・明治の印籠蒔絵師。未詳。	近代東京の蒔絵師。明治二十年生まれ。本名茂吉。川之邊一朝に師事。帝展出品。文展審査員。川面冬山・河合静山とともに「昭和の三山」といわれた。赤坂区新町住。昭和二十四年没。棚・文房具・茶道具類が多く現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	近代東京の蒔絵師。明治二十三年京都に生まれ、本名音三郎。十七歳で白山松哉に師事し、松亭の号を授かる。帝展・新文展で活躍。また乙堂・賛松庵を号した。昭和四十七年没。文房具・茶道具の作品が多く残る。また在銘・共箱の「烏鷺蒔絵印籠」が現存する。	江戸後期の印籠蒔絵師。未詳。	近代東京の櫛蒔絵師。在銘の櫛が多く現存。作品から明治・大正と推測される。	近代東京の蒔絵師。安政四年生まれ。通称庄吉、十二歳で植松抱民の門に入り抱中と号した。精工社・起立商工会社に勤める。花鳥高蒔絵を得意とし、美術展覧会・漆器競技会で活躍。また明治三十五年に日本漆工会で御前製作。大正九年に石原抱真とともに明治神宮御神宝を製作した。京橋区築地一丁目四番地住。大正十一年没。	江戸後期の印籠蒔絵師。大阪の人。未詳。	江戸後期の印籠蒔絵師。高蒔絵の印籠が多い。

氏名	安原清 やすはらきよし	安原祥窓 やすはらしょうそう	矢田雪真 やだせつしん	山口松杖齋 やまぐちしょうじょうさい	柳澤一抱 やなぎさわいつほう	柳澤玉抱 やなぎさわよくほう	山口春哉 やまぐちしゅんさい	山崎十左衛門 やまさきじゅうざえもん		山田常嘉齋（初代） やまだじょうかい
事蹟	天保十四年生まれ。加賀蒔絵の五十嵐與右衛門に蒔絵を学ぶ。号が機芳。明治十五年、池田清助に招かれて神戸で輸出漆器を製作。同十八年大阪鰻谷東ノ町に寓した。大阪漆芸界の発展に貢献。明治三十二年に没した。在銘は少ないが「仙人蒔絵象嵌二曲一双屏風（ハリリ・コレクシヨン）」は在銘である。	安原清の次男。兄重次も蒔絵を業としたが二十四歳で病死。自ら三世を称した。本名勝守、号を祥窓。農展・帝展で活躍した。また練金蒔絵を研究、発明した。大阪南区塩町三丁目六十二番地住。文房具など道具類が現存する。	近代東京の蒔絵師。通称善四郎、号が雪真。池田泰真の門人では真風をよく守る。本所区外手町六十一番地、のち本所区亀澤一ノ二十六に住。本所区外手町六十一番地、のち本所区亀澤一ノ	大正・昭和の印籠蒔絵師。明治三十三年、新潟市に生まれる。本名山口庄三郎。十九歳で戸邊公風に入門。二十八歳で独立。松杖齋、のち知音、松翁と号した。昭和五十三年没。	白山松哉の門人。東京美術学校に白山松哉の胸像を建立した際の一〇に住。昭和九年没。孔雀石粉を蒔いて作品に使用。高蒔絵を得意とする。文房具と煙管筒・櫛などが現存する。	柳澤一抱の子と推測される。一抱と同所に住。	近代東京の蒔絵師。明治二十八年日本橋河岸に生まれ、名は潔。都築幸哉の門人。昭和五十六年没。銘は「春哉」とし、「古満」印も使用した。	元禄頃の江戸の堆朱師。通称十左衛門。徳川將軍の御用堆朱師となり、印籠・香合などを製作した。印籠は無銘で、模様は和風の花鳥人物などの独特の意匠を凝らしたという。	あることが推測される。また飯塚桃葉・中西松立齋・赤塚鳳船齋などいづれもその初代は山田常嘉齋門人と考えられる。	▽山田常嘉齋は江戸初期に徳川將軍家が大阪から招出した印籠蒔絵師で、代々「御印籠師」・「御差鞘蒔絵師」として幕末まで続き、明治初年まで蒔絵師として活躍が見られる。二代以降日本橋平松町の拝領屋敷に住むが、武鑑では宝暦十年から幕末まで南塗師町と書かれ、嘉嘉齋銘の作品は勿論、山田嘉置・山田豊美・長谷川が現存し、常嘉齋銘の作品は山田嘉置・山田豊美・長谷川巨鱗齋・石橋嘉良齋等の在銘作品とも下絵がよく一致し、一門であることが推測される。また飯塚桃葉・中西松立齋・赤塚鳳船齋などいづれもその初代は山田常嘉齋門人と考えられる。

氏名	山田常嘉斎（二代） やまだじょうかさい	山田常嘉斎（三代） やまだじょうかさい	山田常嘉斎（四代） やまだじょうかさい	山田常嘉斎（五代） やまだじょうかさい	山田常嘉斎（六代） やまだじょうかさい	
事蹟	初代常嘉斎に男子がなく、二代は養子で延宝八年生まれ。元禄三年に相続。宝永七年、日本橋平松町に坪数百三十坪の屋敷を拝領、繪の桐花の署名が、あり、その筆跡に二代の作と考へられ。図録は「常嘉斎」の三文字銘。	常嘉斎（二代）の實子で延享三年に部屋住で御目見、寛延二年に相続。寛政十年、没。狩野典信の「雲龍」の「馬」の「世」の「拾」の「遺」の「挿」の「信」の「雲」の「龍」の「蔵」の「印」の「現」の「存」の「作」の「銘」の「通」の「常」の「嘉」の「斎」の「光」の「在」の「銘」が、あり。	常嘉斎（三代）の實子で延享三年に部屋住で御目見、寛延二年に相続。寛政十年、没。狩野典信の「雲龍」の「馬」の「世」の「拾」の「遺」の「挿」の「信」の「雲」の「龍」の「蔵」の「印」の「現」の「存」の「作」の「銘」の「通」の「常」の「嘉」の「斎」の「光」の「在」の「銘」が、あり。	常嘉斎（四代）の實子で延享三年に部屋住で御目見、寛延二年に相続。寛政十年、没。狩野典信の「雲龍」の「馬」の「世」の「拾」の「遺」の「挿」の「信」の「雲」の「龍」の「蔵」の「印」の「現」の「存」の「作」の「銘」の「通」の「常」の「嘉」の「斎」の「光」の「在」の「銘」が、あり。	常嘉斎（五代）の實子で延享三年に部屋住で御目見、寛延二年に相続。寛政十年、没。狩野典信の「雲龍」の「馬」の「世」の「拾」の「遺」の「挿」の「信」の「雲」の「龍」の「蔵」の「印」の「現」の「存」の「作」の「銘」の「通」の「常」の「嘉」の「斎」の「光」の「在」の「銘」が、あり。	文化十四年、山田常嘉斎（五代）の養子となり、同年相続。英次郎。文政四年に御目見。文政五年、大御所徳川家斉の従一位左大臣任官につき進献御太刀に蒔絵をする。文政十年、大御所家斉の太政大臣御昇進につき進献御用を勤める。弘化四年、孝明天皇御即位につき進献御用を勤める。嘉永元年、病身による隠居。同二年に没。狩野太刀御用を勤める。嘉永元年、病身による隠居。同二年に没。狩野惟信の「河野春明との合作による「時鳥蒔絵印籠」が現存。「常嘉斎」の三文字銘。

氏名	やまだじょうかい 山田常嘉斎（七代）	やまだじょうかい 山田常嘉斎（八代）	やまだかぎのすけ 山田鍵之助	やまだかち 山田嘉置	やまだきよはく 山田巨柏	やまだじょうしゆん 山田常春	やまだじょうすけ 山田常助	やまだたいぎよ 山田泰魚	やまだとよし 山田豊美	やまだとうし 山田桃枝
事蹟	文化八年、印籠蒔絵師笛木了甫の子に生まれる。通称岩三郎。父に蒔絵を学び、天保十年、山田家の養子となる。山田常嘉斎（六代）に病気がなく、嘉永元年、山田家の赤城下町六十七番地に住し、印籠・鞘・小筆筥・香箱・手袋入・名刺入などを製作。明治十年の第一回内国勧業博覧会に書棚の扉を出品して鳳紋賞牌を受賞。一東京名工鑑の時に記載される。没年未詳。多数の印籠が現存す。銘は「常嘉斎（花押）」である。花押は朱漆である。	天保六年生まれ。実祖父は孝吉、実子は和吉なる者。通称が幸之丞。山田常嘉斎（七代）に男子が、ないため、嘉永四年に養子となつて相続。安政四年に御目見。安政六年、御差衛府太刀拵蒔絵御用を勤める。文久元年、御道具多数製作。文久二年、和宮降嫁につき、進献御太刀御用を勤める。文久三年、十四代将軍家茂の上洛につき、立博物館蔵「」を製作。維新後も先代常嘉斎と共に家業を続け、（花押「」の蒔絵銘で花押は朱漆のもの、と金蒔絵のもの、と両方がある。	弘化四年、八代常嘉斎の子に生まれる。十七歳の時に部屋住で御差御用を勤め、元治元年に御目見した。明治十二年刊の「東京名工鑑」には六十八歳の山田常嘉斎（七代）と、その倅一人のみが記録されているため、早世したと推測される。	江戸後期の印籠蒔絵師。「常嘉斎 / 印籠下絵」の下絵と作品がよく合致し、山田常嘉斎の一門と考えられる。銘は「山田田嘉置作」と入る。	江戸後期の印籠蒔絵師。在銘の印籠が現存。山田常嘉斎の一門と考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。山田常嘉斎の一門と考えられる。	時代未詳。山田常嘉斎の別号と考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。「常嘉斎 / 印籠下絵」の下絵と作品がよく合致し、山田常嘉斎の一門と考えられる。銘は「泰魚作」に壺形印か「泰魚（花押）」とする。多くの印籠が現存。	江戸後期の印籠蒔絵師。「常嘉斎 / 印籠下絵」の下絵と作品がよく合致し、山田常嘉斎の一門と考えられる。銘は「山田豊美作」とする。	江戸後期の蒔絵師とみられる。「曳舟蒔絵香棚」もある。

氏名		山本春正（初代） やまもとしゅんしょう	春正景正（二代） しゅんしょうかげまさ	春正政幸（三代） しゅんしょうまさゆき	春正春継（四代） しゅんしょうはるつ	春正正令（五代） しゅんしょうまさよし	春正正之（六代） しゅんしょうまさゆき	春正正賢（別家） しゅんしょうまさかた
事蹟	▽山本春正は京都の蒔絵師で、五代正令に至って名古屋に移住。近代は蒔絵師よりも塗師として活躍し、その別家は金森春次をはじめとして、春宗、春久、春卯、春愛、春清、春九、春孝、春周など十家に及ぶ。また京都にも別家安兵衛家が残った。墓所は四代春継までが下京西林寺、五代正令以降名古屋門前町極楽寺に葬られる。極楽寺は戦災で焼失し、墓石は現存しない。	慶長十五年生まれ。山本俊正の子で、通称次郎三郎。京都の蒔絵師といわれる。松永貞徳・木下長嘯子に和歌を、伊藤仁斎に漢籍を学び、「古今類句」一絵入源氏物語一著す。法橋に叙せられ舟木と号した。天和二年没。初代春正の作品として青蓮院尊親王の筆になる芦手書のある「海松高杯蒔絵硯箱」や木下長嘯子遺愛の「鉢敲の水指」が近代まで現存していた。下京西林寺に葬られ、上京妙覚寺にも墓石がある。	寛永十八年生まれ。幼名七十郎、次郎兵衛と称し、姓を春正に改めた。元禄元年東山帝即位の調度の製作を入札により命じられ、た。両替町二条上ル町に住。宝永四年没。東山天皇遺物の「住吉蒔絵硯箱（名古屋市博物館蔵）」も二代景正の作と考えられる。	承応三年生まれ。幼名兵太郎、八左衛門と称し、剃髪後は常照と号した。元文五年没。研出蒔絵による「春正政幸作」銘の印籠が少なからず現存する。	元禄十六年生まれ。幼名庄吉、長じて八左衛門と称した。姓を変え柏木伴助と称した。明和七年没。	享保十九年生まれ。幼名勝之丞、のち次郎兵衛を称した。姓を再び春正とした。油小路押小路下ル町、川西泉町、二条東洞院東入町と転居した。天明八年の京都の大火で類焼し、翌寛政元年名古屋へ移住した。享保三年没。	安永三年生まれ。幼名与三治郎、のち又四郎。尾張藩主に拝謁し、御小納戸・御具足方の御用を勤めた。剃髪後は敬通と号した。天保二年没。「緞子塗盃台（東京国立博物館蔵）」が現存する。	春正（五代）正令の次男で天明二年生まれ。幼名熊之助、長じて熊治。文化十一年伊勢山田に移住。天保二年尾張井田村長福寺で剃髪。初代春正画像・春正正令画像の筆者として知られる。「渡舟蒔絵盃」が現存。作銘は「正賢画」、箱書には「春正」の墨書に黒文長方形印を捺しており、名古屋春正家から別家していたと考えられる。

	▽山本利兵衛家は代々京都室町今出川南入町で蒔絵を業とした。蒔絵の名家としては珍しく、代々実子が相続し、通称を利兵衛、屋号を吉文字屋とする。後には御所の蒔絵御用常職を拝命した。当時は京都でも代々の御用常職が家名を売買しており、山本家は実子相続のため代々の常職よりも常職らしかったという。明治以降も家業を継続した。葬地は代々東山真如堂である。三代光春以来使用したとみられる「印籠下絵集」が現存し、光利・戸島光正などの現存作品とよく合致する。
やまもとやすのり 山本保徳	江戸末期の印籠蒔絵師。江戸の人と考えられる。
しゅんしょうまさみつ 春正正光	京都の別家と推測される。在銘の印籠が現存。
しゅんしょうやすへい 春正安兵衛（別家）	春正正令（五代）が名古屋に移住した後、京都にも分家して子孫が近代まで残った。代々安兵衛を称し、春正を号として京都油小路に住蒔絵を業とした。このことは名古屋の春正正兼（十代）も証言している。また近代京都の印籠蒔絵師北村春正は春正子孫を自称し、箱書には「印籠師春正」としたと伝えられる。印籠製作を伝えたのは名古屋春正家ではなく、京都春正家であったと考えられる。
しゅんしょうたけふろう 春正東三郎（十二代）	正興の長男で大正八年生まれ。十三歳で相続。家業を別家春周に任せ、別家春孝方で十年修業した。
しゅんしょうまさおき 春正正興（十一代）	正兼の長男で明治二十八年生まれ。別家金森春次のもとで修業。さらに春周の面倒をみながら父正兼に学ぶ。昭和四年に相続同六年没。
しゅんしょうまさかね 春正正兼（十代）	正周の子で元治元年生まれ。明治十一年に兄正章（九代）の跡を相続。名古屋区室町一丁目八十二番屋敷に住。のち西区西萬町から東区久屋町に転居。明治十四年内国勤業博覧会で有功二等賞牌を受ける。別家十家の総帥。昭和四年没。「芦雁蒔絵硯蓋」（東京国立博物館蔵）が現存。
しゅんしょうまさあき 春正正章（九代）	正周の子で弘化三年生まれ、幼名李太郎、長じて次郎兵衛。明治十年に相続、翌年弟正兼に家督を譲る。
しゅんしょうまさちか 春正政周（八代）	文化十三年生まれ。幼名は清五郎、通称を東三郎、安政五年に兄正徳（七代）の跡を相続。明治十年没。
しゅんしょうまさのり 春正正徳（七代）	文化三年生まれ。幼名吉次郎、通称を實太郎、静一庵と号し、五十三歳で剃髪、ト斎と号した。作品の多くは食膳類である。明治四年に十六歳で没した。多くの作品は箱書のみで作銘がない。花押「晩年の作品に「ト斎寫（花押）」銘や「舟木七世春正製（花押）」などの在銘の作品が数点ある。花押は金蒔絵と朱漆両方がある。
氏名	事蹟

氏名	山本武利（五代） やまもとみつとし	山本武光（四代） やまもとたけみつ	山本光春（三代） やまもとみつはる	山本光固（二代） やまもとみつかつた	山本武継（初代） やまもとたけつぐ
事蹟	天保十年生まれ。幼名房次郎のち利兵衛を襲名、諱が光利。号が心月。幼より父から蒔絵を学ぶが、手板に絵を描くだけでは飽きたらず、自ら古印籠を解体して製作方法を解明し、親が夏に昼寝をしていて時間を密かに父に代わって和宮降嫁御用を勤めた。孝明天皇の御用品として「花鳥身の父に代わって東京国立博物館蔵」の太刀に、孝明天皇が新た十二ヶ月蒔絵螺鈿太刀拵（東京国立博物館蔵）を製作した。これは十四代將軍徳川家茂の進献品であつた備前長船館蔵の「孝明天皇の御用品として」に拵の製作を命じたもので、総金具は後藤一乗作、鞘は狩野永岳が新に蒔絵・螺鈿が光利の作で在銘である。さらに吉則の太刀に新調の「菊紋唐草蒔絵毛抜形太刀拵（東京国立博物館蔵）」、吉光の御短刀拵には塩川文麟下絵で「子の日蒔絵」をした。その他中嶋華陽下絵で、「老松鷹蒔絵文台・硯箱」・原在照下絵で「鷹狩蒔絵文台・硯箱」・土佐光文下絵で「芦鶴蒔絵小机」・円山応立下絵で「夏川景蒔絵硯箱」を製作。また孝明天皇より徳川將軍家に贈つた「大堰川三舟蒔絵料紙硯箱」を原在照下絵で製作した。慶応三年、明治三十年、明治天皇即位道具を製作。明治以降国内外の博覧会に出品した。明治三十年、明治天皇即位道具を献上の「遠山草花蒔絵書棚」、「逢坂山蒔絵料紙箱・硯箱」を富田幸七と製作。孝明天皇の形見として皇女和宮に譲られた「虎蒔絵印籠（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）」も現存している。作銘は「光利」に朱漆による「山本」の長方形印、もしくは「山本作」の三字銘である。	文化十二年生まれ。幼名甚三郎、二十三歳で利兵衛を襲名、諱が武光。若年での相続により長野横笛を後見とする。弘化四年孝明天皇即位道具に蒔絵し、安政元年禁裏蒔絵常式となる。安政年間、御所炎上により島津家より進献之屏風筆筒（青山貫洪・浅野友七・木下徳兵衛・永田習水・藤井満喬・山本武光らで合作）に蒔絵した。また皇女和宮の五葉菊紋を考案して採用される。実作は病身により子の光利にあたらせた。明治三年没。	安永元年生まれ。幼名利三郎、相続後は利兵衛を称し、諱が光春、別号嶺月。父に蒔絵を習い名手といわれる。吉田元陳に画を学び、御所の臨時御用で「梅図屏風」を納め、氏神である上御霊神社拝殿に「三十六歌仙額」を奉納した。文化十四年、仁孝天皇即位の調度に蒔絵し、禁中蒔絵常職となり、利兵衛家第一の名工とされる。光格上皇御用で「吉野山蒔絵提重」、島津より進献の「雪中鷹蒔絵料紙硯箱」を製作した。天保九年没。子孫に技を示すために「竹製亀甲形印籠」を御用の際の掃溜の金粉で製作し、内部に日本地図、洛外名所を研出蒔絵とした。	寛保三年生まれ。幼名周三、通称は利兵衛、諱が光固。明和八年に後桃園天皇即位の調度、安永九年に臨時御用品に蒔絵した。また満田道志と断金の交わりがあり、道志に後継がなかったため光固の門人太三郎を養子とした。以後満田家の相続者は蒔絵を山本で修業するのを例とした。寛政三年没。	元禄元年、丹波桑田山本村に生まれる。家は本姓柴田で元来は武家だが帰農していた。宝永四年に京都に出て豊田重右衛門に蒔絵を、中村宗哲に塗を学び、正徳四年、室町今出川南入町に開業、姓を山本に改め、屋号を吉文字屋とし、たちまち都下にその名を知られる。享保十八年、御所の御用で「須磨明石蒔絵重硯箱」を制作。延享三年には桃園天皇即位の調度を調達した。明和元年没。

吉野屋治兵衛	よしのやじへい	京都の盃蒔絵師。天保から安政にかけて活躍した。朱漆の地に松葉・渦水などを描詰めた盃を得意とした。
義親	よしちか	江戸後期の印籠蒔絵師。応挙下絵の「孔雀蒔絵印籠」もあり同時代の人であろう。未詳。
吉田醇一郎	よしだじゅんいちろう	明治三十一年新潟県生まれ。植松抱美に師事。帝展特選を二回受ける。江戸川区小岩町七一一一五に住。昭和四十四年没。
吉田源十郎	よしだげんじゅうろう	明治二十九年高知県生まれ。帝展特選を二回受ける。世田谷区赤堤町一一三十二に住。昭和三十三年没。
吉兼臣	よしかねおみ	江戸末期の印籠蒔絵師。幕府御用の印籠蒔絵師と伝えられる。
羊毛斎	ようもうさい	江戸末期の印籠蒔絵師。
由木尾雪雄（二代）	ゆきおゆきお	万延元年生まれ。由木尾平兵衛の子で幼名他吉郎。義父とともに佐々木泉龍に画を学ぶ。明治十九年に相続して通称を平兵衛とし、雪雄と号した。東京に出て麹町区上六番地町四十二の浅草区阿部川町三十三番地に住。万国博覧会に出品して金賞となる。昭和四年に没し、青山墓地に葬られる。文房具・茶道具が現存する。
由木尾平兵衛（初代）	ゆきおへいべえ	幕末明治の加賀蒔絵の工人。文化十四年生まれ。加賀藩工清水忠左衛門の子で通称平兵衛。由木尾某の嗣子となる。天保五年十八歳で開業。弘化二年加賀藩の藩命により大阪で販路を開く。晩年佐々木泉龍に画を学ぶ。安政頃御門前町に住まいし、維新後金沢区下松原町に住。明治十九年没。
結城哲雄	ゆうきてつお	近代東京の蒔絵師。明治三十三年山形県に生まれる。船橋舟珉・植松抱美に師事。帝展特選となる。日展会員。豊島区長崎東町三一三四四に住。昭和四十五年没。
勇嘉斎	ゆうかさい	江戸末期の印籠蒔絵師。
湯浅華暁	ゆあさかぎよう	湯浅守隆の息子で通称久次郎、名が守一、華暁と号した。蒔絵を父に、画を森川曾文に十年間学ぶ。麩屋町御池上ルに住。昭和二十七年没。伊勢藤野家のために四十年かけて製作した日暮らしの料紙文庫など豪華な文房具を製作した。
湯浅守隆	ゆあさもりたか	幕末・明治の京都の蒔絵師。天保十四年生まれ。通称久吉、諱が守隆、並川中務に蒔絵を学び、壽山斎と号した。麩屋町御池上ルに住。明治三十四年没。
氏名		事蹟

氏名			吉村 伝右衛門（初代） よしむらでんえもん	吉村 伝右衛門（二代） よしむらでんえもん	吉村 伝右衛門（三代） よしむらでんえもん	吉村 伝右衛門（四代） よしむらでんえもん	吉村 伝右衛門（五代） よしむらでんえもん	吉村 伝右衛門（六代） よしむらでんえもん		吉村 寸齋 よしむらすんさい		米田 孫六 よねだまごろく	米原 至洞 よねはらしどう	頼 美 よりよし
事蹟	▽吉村 伝右衛門は尾張徳川家の御塗師。城代支配。御目見を許される。代々伝右衛門を称した。	初代の吉村 伝右衛門は近江の浪人で正徳年間に駿府で召し抱えられる。切米二十石五人扶持を給され塗師御用を勤める。	二代 伝右衛門は明暦二年い相続、万治二年三十石五人扶持に加増され塗師頭となる。	三代 伝右衛門は延宝三年に相続、三十石五人扶持。	四代 伝右衛門は享保十六年に相続、切米二十石五人扶持。	五代 伝右衛門は元文四年に相続、切米二十石五人扶持。	六代 伝右衛門は元文六年に相続、切米十石三人扶持。	江戸中期、天明頃に尾張名古屋で活躍した蒔絵師。号が寸齋、別号が一穴庵、諱が為隆、字が易。蝶蒔絵三組盃の共箱には、別「張州尾蒔絵師」と書き添えてあり、尾張徳川家の御用蒔絵師と推測され、前項の吉村 伝右衛門の七、八代とも考えられる。在銘の印籠と盃、茶道具作品が僅かに現存する。余技の彫刻でよく知られ、本業の蒔絵師よりも根付師としての名高く、特に浮彫の人物根付は高く評価されている。根付以外の彫刻では大龍寺の「十六羅漢像」や円福寺の「秋葉大権現像」が知られる。狂歌をよくし、奇行で知られ、大酒家として敵う者なし。大阪の某が尾張を通る際、寸齋の樽を聞いて訪ねて酒を飲み比べるが、某は病むこと三日、寸齋の噂を聞いて訪ねて酒を飲み比べるが、某はという逸話が伝えられていて、寛政六年没。名古屋河町光蓮寺に葬られるが、戦災により墓石は現存しない。銘書葉多様で、姓や号と字に花押を組み合わせた、三ツ組盃などでは1枚ずつ銘を変えるなど、かなりのおだわりがあるように感じられる。ただし諱の為隆は根付だけに見られ、蒔絵作品では未見である。	江戸末期の金沢の道具蒔絵師。五十嵐吉左衛門に学ぶ。通称孫兵衛。屋号が描金堂、庸道と号した。文房具や什器類の作品が多い。	明治の一閑張師。享和二年生まれ。天保十四年に堅牢な一閑張を発明し、囊物商丸屋利兵衛方へ販売した。その堅牢さは鉄に等しく、維新前は一閑張で甲冑を製作した。また維新後は起立工商会社の輸出品を製作。内国勸業博覧会では花紋賞牌を受けた。四谷伝馬町一丁目三番地住。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。			

氏名	瀾々斎 らんらんさい	里朝 りちよう	龍光斎 りもうこう	龍昇園 りゆうしょうえん	朧月斎 ろうげつさい	六角紫水 ろっかくしすい	和吉 わきち	渡邊一東斎勝康 わたなべいつとうさいかつやす	渡邊一東斎勝政 わたなべいつとうさいかつまさ	渡邊喜三郎（四代） わたなべきさぶろう	
事蹟	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。江戸の人と考えられる。在銘の印籠が現存。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	江戸末期の印籠蒔絵師。未詳。	近代の漆工家。慶応三年広島に生まれる。本名藤岡注多良。東京美術学校を卒業。明治三十七年に岡倉天心らと渡米してボストン美術洋部所蔵品の整理を行う。大正十三年より東京美術学校教授、朝鮮総統府より楽浪漆器整理、東京帝国大学より楽浪美術学校賞掘調査を嘱託される。帝展審査員で第十一回帝展で帝国美術院賞を受ける。昭和十九年に正四位勲四等に叙せられる。東洋漆工史を著したことも有名。昭和二十五年没。古代の図案技法を研究しアルマイト・刀筆などを取り入れた作品を残した。文房具が現存するが作品は多くない。	江戸後期の印籠蒔絵師。江戸音羽町に住した。野村久甫の門人名工といわれる。山田常嘉斎（八代）の実父とも考えられる。	江戸後期の印籠蒔絵師。通称千之助。万延元年没。	幕末・明治の印籠蒔絵師。通称千之助。天保十一年生まれ。父一東斎勝康に蒔絵を習い印籠・煙管筒を製していたが、維新後は貿易品・精工社の嘱品を製した。東京三田同朋町十四番地に住。	▽渡邊喜三郎家の先祖は代々江戸の塗師職。幕府御細工所御蒔絵師棟梁菱田家の下塗師として「菱田の喜三郎」と呼ばれた。初代喜三郎は嘉永二年没。神田皆川町住とされる。菱田家屋敷かその周辺に住んでいたと推測される。二代喜三郎は文久二年没。三代喜三郎は明治四年没。四代明治以降は茶道具や懷石膳碗にその腕を振った。	弘化二年生まれの四代喜三郎をもって近代喜三郎家の初代とし、渡邊を姓とした。幼名傳吉。父二代喜三郎に師事。幕府御細工所御蒔絵師棟梁上席菱田自得の塗師として「菱田の喜三郎」と呼ばれる。徳川家御細工所・御小屋での作業に従事し、門弟十三、四人を率いた。のち柴田是真・池田泰真・小川松民の茶器下塗を、し、内国勸業博覧会に小川松民が出品の棗・茶器を製作。パリ万国博覧会へは政府出品の東照宮本殿雛形の塗を担当。はじめ皆川町のちに籠閑町に移住し、「一門從河岸の喜三郎」とも呼ばれる。明治初年から神田千代田町一番地に住み。宮内省大膳御用達で名字帯刀・自宅御用に際し高張提灯を掲げること許された。大正十年没。

氏名	わたなべきさぶろう 渡邊喜三郎（五代）	わたなべきさぶろう 渡邊喜三郎（分家）	わたなべきさぶろう 渡邊喜三郎（分家）	わたなべきさぶろう 渡邊喜三郎（六代）	わたなべしょうえん 渡邊松演	わたなべとうせん 渡邊桃舩	わたなべとうみん 渡邊東民	
事蹟	通称房次郎。明治二年生まれ。門下に赤地友哉・田所芳哉を出す。日本橋箱崎町に住み「箱崎の喜三郎」と呼ばれる。昭和十八年没。	阿久太郎。明治九年生まれ。五代の実弟。麴町幸町住。益田鈍翁の注文を受ける。昭和十三年没。	已三郎。明治十二年生まれ。五代の実弟。号を宗已。昭和六年没。箱書は喜三郎だか宗已の黒印を用いる。	明治四十三年生まれ。阿久太郎の子で相続。昭和六十一年没。	近代の蒔絵師。本名虎吉。白山松哉の門人で松演と号した。芝区愛宕町二一十三に住。文房具・煙管筒の作品が現存。銘は「松演」に「松演」の方形印を添える。	は「松風斎桃舩（花押）」の銘がある。押「松風斎桃舩（花押）」の銘がある。ち和泉町通旧藤堂邸内に住。文房具・印籠が現存し、「桃舩（花押）」の銘がある。博覧会で妙技二等賞牌を受ける。芝西応寺町三十四番地に住。蒔絵をした。後刀藩主内藤紀伊守などの注文を受け、刀・槍の鞘に製し、越後村上藩と号す。本石町の牧野儀兵衛の嘱品を十余年開業し、松風斎桃舩と号す。本石町の牧野儀兵衛の嘱品を十余年甫（初代）に入門。さらに二代松風斎の雇工となる。二十九歳で幕末・明治の蒔絵師。文化十二年生まれ。十五歳で笛木松風斎了	幕末・明治の蒔絵師。天保四年に生まれ通称を清吉。のちに中山胡民に入門、その養子となる。後に故あつて分かれる。東京浅草馬道町一丁目四番地に住。第一回内国勸業博覧会に出品。	